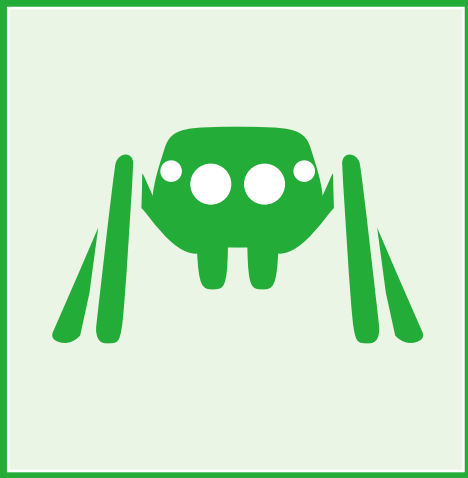
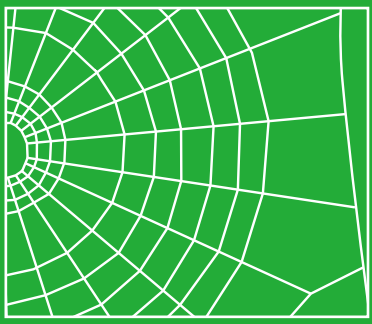
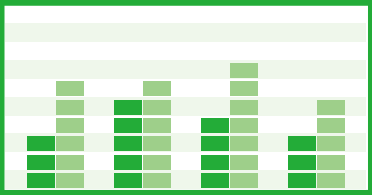






クモ基本 60

改訂版

Spider Life

東京蜘蛛談話会

クモ基本 60

Spider Life

改訂版

東京蜘蛛談話会

はじめに［introduction］

東京蜘蛛談話会では年４回のクモ観察会を行っているが，そこで話題になることのひとつが簡易なクモ識別図鑑が欲しいということだった。新海栄一・高野伸二『クモ基本 50』（1987 年，森 林書房）は版元が無くなって絶版・品切になってしまった。新たにクモを選定し直してクモ識別図鑑を作ろうという計画が浮上したのは数年前のことである。

基本種の選定を経て談話会会員の生態写真を募集し，過去の談話会会誌等の生態情報を盛り込んで，ここに『クモ基本 60』を発刊する。

今回の作成にあたって念頭に置いたのは英国蜘蛛学会のウェッブ・ページにあるクモ・データである。データに基づき成体雌雄の出現時期・発育段階・生息環境・採集法などが表示されている。

本書では過去 14 年間 10 ヶ所の関東地方での観察会のデータを基に記録率 60％以上のクモから60 種を基本種に選定した。ただし，屋内性など一部には記録率が低い種もある。生活史を示すグラフは観察会のデータを基に作成した。グラフの縦軸は観察会での成体記録の割合であり，9 は九割という意味である。

基本種の隣には関連種を配置した。生態情報は『クモ基本 50』の新海の解説のほか，主に池田ほか編『クモ生理生態事典』（2011 年）に依った。網型･生息場所･繁殖習性（求愛・卵嚢など）・令数等をデータのある限り記述した。成熟季節はオスの出現時期とピークを基本にした。秋は 8 月後半からとする等，二十四節季を参考にした。出典の詳細情報はウェッブ上の『クモ生理生態事典』にある。

和名および科名に関しては新海栄一『日本のクモ』（2006 年，文一総合出版）に依拠した。学名は CD『日本のクモ』（2012 年）を参照した。

身近なクモ 30 種をルーペで見ながら正しく知ることができれば，もっと詳しい図鑑や参考書を用いて自分で勉強できるようになる。そのためのきっかけが本書であって欲しい。珍種探しではなく，普通種の生きざまを知ることで Spider Life，クモのいる生活を楽しんで欲しいと思っている。

編集スタッフ

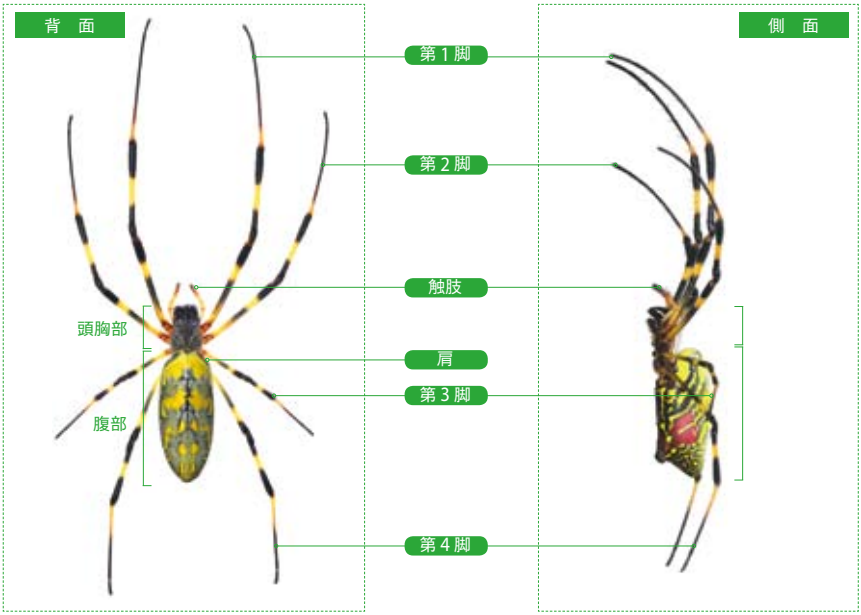
- 監修 -
新海 栄一

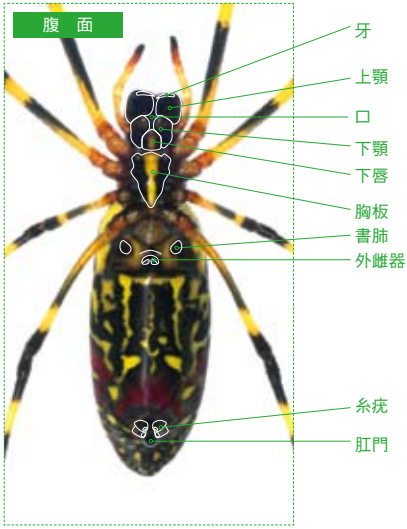
- 編集 -
池田 博明　仲條 竜太
初芝 伸吾　甲野　涼

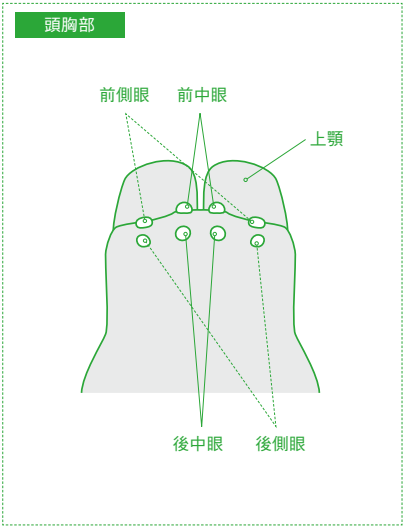
- 写真 -
浅間　茂　新井 浩司　安藤 昭久
池田 博明　石田 岳士　腰高 直樹
荘司 康治郎　新海 栄一　谷川 明男
高橋　登　高野 伸二　千国 安之輔
初芝 伸吾　伴　満　水野　恵
水野　碧　森田 剛則　山崎 茂幸
（1 種の提供者は該当箇所にフルネームで記した）

- デザイン -
中　敦郎

体を表す用語


背　面
側　面
第 1 脚
第 2 脚
触肢
頭胸部
肩
第 3 脚
腹部
第 4 脚


腹　面
牙
上顎
口
下顎
下唇
胸板
書肺
外雌器
糸疣
肛門


頭胸部
前側眼
前中眼
上顎
後中眼
後側眼

クモの生態や行動に関する用語と引用文献

円網の構造を指す用語は別図に記した。円網以外の網の糸を表す用語はそれぞれの種の解説で記した。

亜成体 成体になる直前の齢。

糸疣 いといぼ又はしゆうと読む。クモの腹部後端にある出糸器官で各一対の前疣・中疣・後疣から成る。糸疣上には吐糸管があり糸腺につながる。

外雌器 メスの交尾器官で，一対の交尾孔がある。成体ではキチン化して硬化したり色づいたりする。殻皮を通して内部の交尾管や受精嚢などが見える場合もある。

ガード オスがメスをそばで「守る」行動や母親が卵嚢を「守る」行動。徘徊性種の母親の多くは卵嚢の上でガードする。

交接 本書では「交尾」と表記している。

交尾 オスが触肢の移精針をメスの外雌器交尾孔に差し込むこと。以前は交接と呼んだ。

交尾栓 交尾後にメスの交尾孔をふさぐオスの道具。触肢の交尾器の移精針が取れて栓となる場合（コガネグモ科）やにかわ状物質を詰める場合（シロカネグモやクサグモ）がある。行わないクモも多い。

篩板 糸疣とは別にこまかい糸を出す出糸器官。篩板の有無は分類上重要である。

篩板糸 軸糸に丸いパフを作るこまかい糸。

出嚢 クモの幼体が卵嚢から脱出すること。母親が卵嚢をかみ破って（開嚢して）出嚢を助ける種類と幼体が自力で脱出する種類がある。

触肢 第1歩脚より前に付く付属肢で，オスでは交尾器官となり，精網上に生殖孔から出した精液を吸い上げて保持している。

成熟季 多くのクモでオスの成熟のほうが時期的にメスより早い。求愛・交尾期も考慮した。ナミハグモはメスが先に成熟する。

性的二型 雌雄で色彩やサイズが異なること。クモでは一般にオスが小形。

成体 最終脱皮を終えて親になった状態。雌雄とも生殖器官が完成する。

精網 成体になったオスが作る小さな網で，触肢に精液を吸い上げるために使う。

梳糸（そし） 本書では「篩板糸」と表記している。

体外消化 とらえた虫に口器の顎葉から唾液を，食道・吸胃に続く中腸から腸液をかけて口もとで消化し，溶かして吸い込む。

脱皮 成長に伴って体を囲む外殻を脱ぎ捨てること。

粘球 横糸の軸糸に付けられた粘液が表面張力で丸くなったもの。餌捕獲に使用。

ふ化 卵から子グモが生まれること。

保育網 キシダグモ類の母親が出嚢する子グモ用に作る網。子グモは保育網内でまどいをする。

まどい 出嚢した幼体が一時的に作る集団。

幼体 成熟前の成長途上の子グモのこと。クモは不完全変態で，脱皮して成長する。脱皮ごとに齢数が増えていく。卵からふ化した子グモを1齢幼体とすると，一回目の脱皮を卵嚢内で行い，2齢幼体となって出嚢，まどいを行う。二回目の脱皮を行って3齢幼体で分散するというクモが多い。ウヅキコモリグモは卵嚢内で3齢幼体となってから出嚢する（母親が開嚢して出嚢可能）。出のう幼体を1齢とすべきだとする見解もある。

卵室 産卵のための住居。フクログモ類は葉を巻いて作る。ハエトリグモは卵室にこもって産卵するため卵嚢を作らず薄い糸で被うものが多い。

卵嚢 卵を糸で保護した袋。種により形や色彩が特異的。

【引用文献】

池田博明・桑田隆生・新海明（編），2011.「クモ生理生態事典」ウェッブ上より.
小野展嗣（編），2009.「日本産クモ類」東海大学出版会.
新海栄一，2006.「日本のクモ」文一総合出版.
その後の事項は主に「東京蜘蛛談話会会誌」Kishidaia および「東京クモゼミ報告」より.

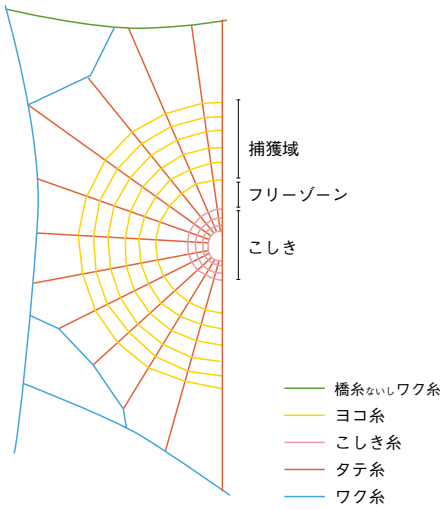
本書の使い方

① **基本種 No**（基本種 60 種を成熟時季によって 4 部に分け，部の中では網性の順に並べた。巻末に和名で「索引」を用意している） ② **基本種写真**（会員からの投稿等を基本に種の特徴をよく表す写真を選抜した） ③ **成体時季データ**（約 10 年間の 10 ケ所での東京蜘蛛談話会観察会での成体記録数。ギンメッキゴミグモの場合には 5 月には♂が 3 ケ所，♀が 10 ケ所で記録されたことが分る） ④ **基本種の識別ポイント** ⑤ **和名** ⑥ **漢字で表した和名** ⑦ **学名** ⑧ **科名** ⑨ **観察会 10 ケ所で記録された割合** ⑩ **網性を表したマーク**（垂直円網，水平円網，立体円網，同心円網，不規則網，棚網，受信糸網，篩板糸網，皿網，条網，徘徊性，地中性） ⑪ **成熟時季**（オス成体出現時季を重視している。5 月春と 7 月夏に記録された） ⑫ **成体体長** ⑬ **観察ポイント**（識別する際の形態・色彩・分布などの特徴） ⑭ **習性**（生息環境・生態・網性・生活史・産卵など） ⑮ **トピック**（興味深い話題・学名の由来など）

目次［contents］

扉…… 1
はじめに…… 2
体を表す用語…… 3
クモの生態や行動に関する用語と引用文献…… 4
本書の使い方…… 5
目次・網を表す用語…… 6
第１部 季節を問わず成体が見られるクモ …… 7 ～ 42
第２部 春に成熟するクモ …… 43 ～ 88
第３部 夏に成熟するクモ …… 89 ～ 130
第４部 秋に成熟するクモ …… 131 ～ 139
和名索引…… 140 ～ 142
あとがき…… 143

網を表す用語



垂直円網には造網行動と円網構造を考慮した名称が付けられている。「橋糸」は最初に造網のきっかけとなる糸で，クモは流した橋糸を往復して丈夫にする。「ワク糸」と同時に「タテ糸」を張り始め，タテ糸を次第に増やしていく。タテ糸を張り終えると網の中心に「こしき糸」を張り，それを外側に向かって広げて「足場糸」を張っていく。足場糸を外周まで張り終えると，今度は外側から内側へ向かってらせん状に「ヨコ糸」を張る。このとき足場糸を切るので，完成した円網には足場糸が見られない。ジョロウグモは足場糸を切らずに残している（粘球のないヨコ糸風の糸が足場糸である）。ヨコ糸には粘着物質が塗られ，粘着物質は表面張力で粘球となる。最終的にクモは中心に戻ってこしきを作り直す。橋糸・ワク糸・タテ糸は大瓶状腺，足場糸は小瓶状腺，かくれ帯はブドウ状腺，ヨコ糸の軸糸は鞭状腺，粘球は集合腺の糸で作られる。水平円網の場合も同様である。

《 第 1 部 》 季節を問わず成体が見られるクモ

・アシダカグモ
・ヒラタグモ
・ネコハグモ
・アダンソンハエトリ
・オオヒメグモ
・オニグモ
・ユウレイグモ
・ジグモ
・キシノウエトタテグモ
・カニミジングモ
・ハナグモ
・ネコグモ
・イタチグモ
・ムナアカフクログモ
・メキリグモ
・ヤマジグモ
16 種

♀　Photo：池田

眼縁に白線がある
※腿節の黒く囲まれた白点は
コアシダカグモと共通

卵嚢を持つ♀　Photo：石田

♂　Photo：石田

アシダカグモ 足高蛛　*Heteropoda venatoria* (Linnè 1767)	-- %		成熟：春 夏 **秋** 冬 ♀ 約 20 ～ 30 mm ♂ 約 10 ～ 25 mm
アシダカグモ科	屋内徘徊性		

【観察ポイント】大変大きなクモで，関東以西の屋内に見られる。山間では屋内に侵入したコアシダカグモがアシダカグモと間違われる。両種の外見は似ているが，眼縁の白線の有無で識別することができる。オスの背甲の心臓形の斑紋は本種に特徴的。

【習性】昼間は物陰に潜んでいるが，夜間隠れ場所から出て脚を広げて静止し，近くに来る昆虫を捕える。【卵嚢】円盤状の卵嚢を抱えて守る。300 ～ 600 卵（最小 188 ～最多 900 卵）。
【生活】求愛・交尾時期は 9 月，翌年 6 月に産卵。静岡以西ではメスは 10 回の脱皮で 1 年間で成体となる個体がいる［関口］。産卵後にも脱皮する。雌雄とも寿命が長いため年中成体が見られる。飼育下でメス 13 年，平均 7 年，オス平均 5 年［萱嶋］。

【トピック】ゴキブリ・ハンターとして有名。月に 19 頭のゴキブリを補食した例がある。幼体もゴキブリを捕る［萱嶋］。学名の「venator」は狩人を意味し，分類学の父リンネが名づけた。

コアシダカグモ（成熟：夏）
Sinopoda forcipata (Karsch 1881)　**アシダカグモ科**

♀ 約　18 ～　25 mm　　♂ 約　15 ～　20 mm

屋外に住み，夜間に捕食活動。徘徊性。アシダカグモ同様，カマドウマ，コオロギ，ガなどの昆虫を待ち伏せ捕食，基本的にじっとしていて動かない。クモバチ（ベッコウバチ）によく狩られている。【卵嚢】樹皮などに産卵し，おおいかぶさって守る。産卵期は 7 月。卵数や生育の記録は無し。【備考】地域による別種が報告されている。
＜♀ Photo：新井＞

アワセグモ（成熟：夏）
Selenops burusarius Karsch 1879　**アワセグモ科**

♀ 約　8 ～　12 mm　　♂ 約　8 ～　12 mm

アシダカグモの幼体に似る。徘徊性。昼間は壁の隙間，柱の割れ目，樹皮下などに潜む。夜間に壁面や樹皮上で獲物を待つ。【生活史】7 ～ 8 月に成熟。長崎県では 8 月 21 日に産卵。黄色の 78 卵を簡単に糸で固定し，その外に紙状の保護膜を張る。8 月 29 日に第 1 回脱皮，9 月 2 日卵嚢内で動く［大利］。【備考】東京都内では 40 年以上記録がなかったが，近年，杉並区で採集された。岩手県からも記録がある［貞元］。
＜♀ Photo：新海＞

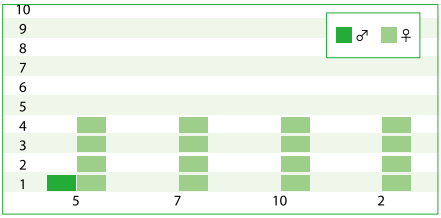
ヒトエグモ（成熟：夏）
Plator nipponicus (Kishida 1914)　**ヒトエグモ科**

♀ 約　6 ～　8 mm　　♂ 約　5 ～　8 mm

体が扁平で古い民家や寺院の屋内で発見される。屋外では大木の樹皮下に住む。徘徊性。昼間は壁の隙間, 柱の割れ目, 床の隙間等に潜んでいる。夜間隠れ場所から出て壁や畳を歩き回って小型の昆虫やクモ等を捕える。関西での発見が多い。【備考】アワセとヒトエは着物の袷（あわせ）と単衣（ひとえ）を意味する。ともに扁平なクモであることから岸田久吉が対にして名づけた。袷は単衣より厚い。＜♂ Photo：新海＞

♀　　Photo：石田

住居内の卵嚢　　Photo：池田



ヒラタグモ

扁平蜘蛛　*Uroctea compactilis* L.Koch 1878

ヒラタグモ科　　放射状受信糸網

90 %

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 8 ～ 12 mm

♂ 約 6 ～ 10 mm

【観察ポイント】形態独特で家に多く生息し識別しやすい。腹背の斑紋には変異があり，白色無紋の個体さえある。幼体と類似する種に屋内性のチリグモがある。

【習性】上下の膜で出来た白色円盤住居の間に入っている。【網性】住居表面は食べかす・ゴミ・脱皮殻で擬装される。住居の間から 10 ～ 30cm の受信糸を出している。最初は体を覆い隠すための上幕と，体を支えるためのわずかな拡がりを持つ下幕を作る。その後に放射状に受信糸を引き，下幕を拡くし，上幕を広く厚く整形していく。不都合がないかぎり，最初の住居網を捨てず，成長につれ，糸を張り添える〔中平〕。虫が受信糸に触れると，クモは住居からとびだし，腹部を持ち上げて第 4 脚で大量の糸を引出し，ラップして捕獲する。似たチリグモは篩板を持つが，ヒラタグモには篩板はない。【卵嚢】白色円盤状を 3 ～ 4 個，住居の中に作る。10 ～ 40 卵。産卵は 3 ～ 10 月の間に不定期に行うが、6 ～ 9 月が最も多い。

【トピック】ヒラタグモの円盤状住居は江戸時代に「壁銭（へきせん）」と呼ばれた。

チリグモ（成熟：春、夏）
Oecobius navus Blackwall 1859　**チリグモ科**

♀ 約　2 ～　3 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

屋内性。【網性】壁の隅や障子の桟などの隅に 5 ～ 10mm の小さなボロ網を張る。網の周囲には短い受信糸を引く。【産卵】4 ～ 9 月［宮下和］，橙色に赤味の濃い卵で［大利］，5 ～ 16 卵，一か月に 6 回産卵［中平］。【生活】雌雄が接触した後，オスは交尾用網を作成，網上に導かれたメスの腹面にもぐりこみ，交尾［稲葉］，通常メスの住居に侵入しメスに糸をかけ，動けなくなったメスに 1 秒間交尾，5 分間に 9 回交尾した［永井］。＜♀ Photo：安藤＞

ユカタヤマシログモ（成熟：夏）
Scytodes thoracica (Latreille 1802)　**ヤマシログモ科**

♀ 約　4 ～　7 mm　♂ 約　4 ～　7 mm

6 眼である。【網性】夜間屋内を徘徊。網を張らずに足先で探り，足に触れた虫やクモをめがけて口から左右ジグザグ状粘糸を吐き，獲物を取る。絶食に強く一年間絶食のまま生存した記録がある［白］。【生活】都内で 6 月 30 日に産卵された卵は 7 月 11 日に孵化，23℃・湿度 50 ～ 60% で飼育すると，オスは 350 日前後で成熟（短日で 6 回，長日で 7 回脱皮），メスは長日で 6 回脱皮［宮下和］。＜♀ Photo：池田＞

イトグモ（成熟：春）
Loxosceles rufescens (Dufour 1820)　**イトグモ科**

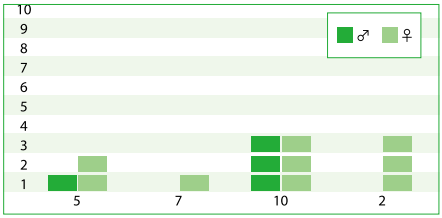
♀ 約　7 ～　10 mm　♂ 約　7 ～　10 mm

6 眼である。【網性】寺社や人家の物置の壁板の隙間などに棚網が古くなったようなボロ網を張るが，糸が薄く気付かないことが多い。ゴキブリの子供，蚊，蝿，他のクモなどを捕える［新海］。【生活】二度羽虫を与えただけで 2 年 4 ケ月生きた［福島］。成体になってから 3 ～ 4 年は生き，各年に産卵する。【備考】北米・南米には組織毒をもつドクイトグモが生息。日本のイトグモでは被害例が稀，最近，局部の壊死例が報告された［小松貴］。＜♀ Photo：新海＞

♀　Photo：安藤

近縁種には腹背に特徴的な紋様がある

♂　Photo：安藤



ネコハグモ

猫葉蛛　*Dictyna felis* Bös.& Str. 1906

ハグモ科

40 %

ボロ網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 4 ～ 5 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】人家性であるが野外にも造網する。ハグモ類は小形で斑紋や色彩の似た種類が多く，識別には生殖器を調べるなどの注意が必要である。

【習性】建物の窓枠の隅にボロ網を張って網の下にいる。葉上の網では天幕（テント）を作るものが多い。新海明の観察によると，親が放置した餌に子グモが群がっていた。【卵嚢】白色円盤状（直径 3mm），住居部のある壁面や葉上に置かれ，巣内に 4 ～ 5 個。葉上に張られた厚い天幕は防寒用と同時に産室を兼ねている。産卵期は越冬成体では 5 月頃，夏世代では 9 ～ 10 月。

【トピック】ハグモやガケジグモの仲間は篩板類と呼ばれ，前疣より前にある篩板の出糸突起から第 4 脚の毛櫛ですき出された篩板糸という糸で虫を捕る。篩板糸は粘球ではないが，非常に細かい糸が束になって，パフというかたまりを作り，虫をからめとることが出来る。オニグモ類の円網の粘球と比べると，乾燥しても接着力が残り，パフを張り替えない。

ヒナハグモ（成熟：春、夏）
Dictyna foliicola Bös.& Str.1906　**ハグモ科**

♀ 約　2 mm　♂ 約　2 mm

赤いハグモである。ネコハグモに似た斑紋もある。【網性】葉上にボロ網を張る。【卵嚢】円形錠剤形（直径 3.5mm 厚さ 1mm），6 月に 25 頭・7 頭出嚢。別のメスは 19 頭出嚢［鈴木成］。交尾後 3 日あるいは 10 時間で産卵。【生活】オスはメスを中心とした円周歩行して求愛。飼育下で 5 月 19 日・21 日に交尾。出嚢直後から親の捕獲したハエを集団捕食する。2 ケ月後も集団捕食する例があった［鈴木成］。＜♀ Photo：谷川＞

ヤマトガケジグモ（成熟：夏、秋）
Nurscia albofasciata (Strand 1907)　**ヤマトガケジグモ科**

♀ 約　7 mm　♂ 約　6 mm

無斑型は真っ黒だが，白点対斑がある個体が多い。対の数は多様。対の数は二対から六対まである。【網性】河川敷などの荒地や線路の枕木間の石の間にボロ網を張る。中平清によると，網にかかっていた虫はハエ，ハチ，アリ，カメムシ，ヤスデ。同様の荒れた環境に造網する他のクモもいる。【卵嚢】黄白色の球形の卵嚢を作る。産卵期は 6 ～ 9 月。
＜♀ Photo：山崎＞

クロガケジグモ（成熟：春、夏、秋）
Badumna insignis (L.Koch 1872)　**ガケジグモ科**

♀ 約　10 ～ 15 mm　♂ 約　5 ～ 10 mm

真っ黒な体に腹背には山形斑がある。【網性】軒下・壁・窓枠など人工物の隙間に管状住居を作り，そこから大きなボロ網を張り出している。【卵嚢】巣内に置かれる。幼体が親と同居している時期は 6 ～ 10 月，飼育下ではメスが 10 回脱皮し成熟［後藤岳］。メスは 3 年間に 8 個の卵嚢を作り，6 個が出嚢した。幼体数は約 50 頭［田中穂］。【備考】オーストラリアからの移入種である。
＜♀ Photo：新海＞

♂ Photo：伴

♀ Photo：荘司

白い首輪斑
肩も白い
腹背後方には対になった白点がある

アダンソンハエトリ *Hasarius adansoni* (Audouin 1826)	-- %	成熟：春 夏 秋 冬
ハエトリグモ科	屋内徘徊性	♀ 約 6 ～ 9 mm ♂ 約 5 ～ 7 mm

【観察ポイント】オスは触肢の白毛が目立つ。腹部は小さい。ハエトリグモはオスとメスが異なる性的二型の大きい種類が多いが，メスの白毛のパターンをよく見るとメスとオスは共通である。

【習性】屋内をよく徘徊している世界共通種。他の屋内性のハエトリグモも多くが世界共通種である。屋外の観察会ではほとんど発見されないため，記録率は空欄とした。西日本では外壁でもよく徘徊している。

【トピック】ハエトリグモの求愛はオスが脚をふりあげて求愛ダンスをする視覚的な行動の他に，メスの住居を訪れる触覚的な行動があり，状況に応じて変換することがジャクソンの研究（1978）により知られているが，日本では当時高校生の大利昌久により「メスは上下二重の住居を設け，雄の来訪を上の室で待つ。交尾は上の室で，卵は下の室に産み，出嚢までメスは上の室にいて保護する」と観察報告されている（1964）。また，性的二型の小さいハエトリはオスの視覚的誇示行動が目立たない［花井・川口］。

♂

♀

ミスジハエトリ　（成熟：四季）
Plexippus setipes Karsch 1879
ハエトリグモ科

♀ 約	7 ～	9 mm	
♂ 約	6 ～	7 mm	

屋内を徘徊。アダンソンの生息地では，アダンソンに追い出されて屋外にも住む。オスは額が赤く腹背中央に縦筋がある。メスは腹背中央に 3 つの縦条紋がある。
<♂ Photo：石田，♀ Photo：荘司>

♂

♀

チャスジハエトリ（成熟：春、夏、秋、冬）
Plexippus paykulli (Audouin 1827)
ハエトリグモ科

♀ 約	10 ～	12 mm	
♂ 約	7 ～	11 mm	

屋内を徘徊。オスは額が赤くなく、頭部前方も白くない。腹背後方に対になった白点がある。メスの背面縦筋の紋様の入り方は、オスと共通である。チャスジのメスは一見アダンソンのメスと見誤るが、縦筋パターンが異なる。チャスジハエトリの求愛・威嚇誇示行動は外国では詳しい記載がある。<♂♀ Photo：石田>

シラヒゲハエトリ（成熟：夏）
Menemerus brachygnathus (Thorell 1877)　**ハエトリグモ科**

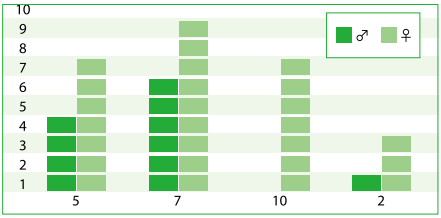
♀ 約	8 ～	10 mm	♂ 約	6 ～	9 mm

屋内と共に屋外でもよく見られる。性的二型が小さくオスの視覚的な誇示行動は小さい。【生活】お盆生まれの幼体オスは 1 ～ 2 回脱皮して越冬し，二年目に 3 回脱皮をして 7 ～ 8 月に成熟，メスは 1 ～ 2 回脱皮して越冬，二年目に 2 ～ 3 回脱皮して越冬，三年目の夏に 1 ～ 3 回脱皮して成熟［宮下和］。【色覚】山下茂樹と立田栄光は主眼が紫外光・青色光・緑色光・黄色光の 4 種を識別していることを報告した。<♂ Photo：荘司>

♀　Photo：池田

腹部は球形
色彩は多様
斑紋は類似種が多い

♂　Photo：谷川



オオヒメグモ 大姫蛛　*Parasteatoda tepidariorum* (C.L.Koch 1841)	100 %		成熟：春 夏 秋 冬 ♀ 約 5 ～ 8 mm ♂ 約 2 ～ 4 mm
ヒメグモ科	不規則網		

【観察ポイント】屋外でも人工物に造網していれば，オオヒメグモである場合が多い。樹間に造網する種はよく似た別種である可能性が高いので，識別には注意が必要。

【習性】屋内によく見られる。【網性】廊下の隅などに不規則網を張る。基盤に接する糸の端には微小な粘球が並ぶ。この粘球を「ガム・フット gum foot」，ガム・フットをもつ糸を「トラップ・スレッド trap thread」とよび，他の「支持糸 supporting thread」と区別する。中島晴子はヤモリがかかったのを観察している。【卵嚢】淡褐色の球形で通常 3 ～ 4 個を網の上部に作成，200 ～ 500 卵，母親は新しい卵嚢のそばにいる。

【トピック】ガム・フットに触れた虫は端から切れたトラップ・スレッドに吊りあげられる。吊り上げられた虫は投げつけ粘球でラップしてから捕食される。この投げつけ粘球の糸部分は鞭状腺から，粘球部分は葉状腺で作られる。葉状腺は集合腺の進化したものだから，ヒメグモ類が持つ投げつけ粘球はオニグモ類の網の横糸に相当する仕組みである。

カグヤヒメグモ（成熟：春、夏）
Parasteatoda culicivora (Bös.& Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

オオヒメグモよりも腹背の色彩は鮮やかであるが，オオヒメグモと見誤りやすい。正確な識別は生殖器に依る。千国（1989）の図鑑のカグヤヒメグモは別種である。糸疣の周囲に黒環があるが，黒環はヒロハヒメグモにもあるので要注意。【網性】建物の周囲ではなく公園や山麓の樹間に不規則網を造網。【卵嚢】長さ 6 ～ 9mm，幅 4 ～ 7mm の球形，オオヒメグモより淡色で，網内に通常 2 ～ 3 個吊るす。＜♀ Photo：森田＞

ツリガネヒメグモ（成熟：春、夏）
Parasteatoda angulithorax (Bös.& Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

黒い腹背の中央から後方に白いギザギザの横条がある。横条線はオオツリガネヒメグモにもあるが，オオツリガネはずっと体長が大きい。【網性】不規則網の中央に砂粒を集めた釣鐘型住居を作る。同様の住居を作るヒザブトヒメグモやオオツリガネヒメグモとは，本種が小さいことから識別できる。【卵嚢】2 ～ 3mm 長の桃黄色の卵嚢を釣鐘住居内に置く。
＜♀ Photo：安藤＞

オオツリガネヒメグモ（成熟：夏）
Parasteatoda tabulate (Levi 1980)　**ヒメグモ科**

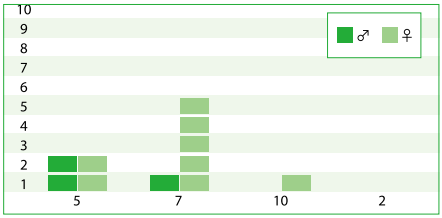
♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

ツリガネヒメグモを大きくしたような紋様と形であり，腹背中央から後方に白いギザギザの横条線がはっきり見える。識別には生殖器の精査が必要。【網性】不規則網の中央にツリガネヒメグモと同様の砂粒や枝片・草を集めた釣鐘型住居を作り，下方に伸ばしたトラップ・スレッドにはガム・フットを付ける。【卵嚢】山形県で 7 ～ 8 月頃，住居中で産卵する［吉田哉］。
＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：石田

肩がとがる

卵嚢　　Photo：新海



オニグモ

鬼蛛　　*Araneus ventricosus* L.Koch 1878

コガネグモ科

90 %

垂直円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 20 ～ 30 mm

♂ 約 15 ～ 20 mm

【観察ポイント】体色は黒褐色で肩がとがる。色彩・斑紋に変異がある。腹背には葉状斑がある。

【習性】網は夜間張られる。【網性】50cm から 1m に達する垂直円網を張る。関西では毎日のように網をたたみ，関東では時々網をたたみ，北方と沖縄では網をたたむ習性がない［植村，下謝名］。出現時刻は日入り時刻と共に早まり，潜伏時刻は日の出時刻と共に遅くなる［岡本］。成長するにつれ造網場所は高くなる［中平］。円網がなくても脚に虫が触れると抱え込んで捕獲する。ラッピングするときとしない場合がある［小笠原］。固形のキャットフードを食べた例がある［佐藤幸］。【卵嚢】こげ茶色の円形ケーキ型。産卵期は 8 ～ 9 月，約 2 回。翌春出嚢，孵化は 8 月中で第 1 回の脱皮もすんでいる。9 月に暖かいと出嚢し，夕方卵嚢内に戻る［細野］。出嚢数平均 973 頭，標準偏差 294.9 頭［宮下和］。【天敵】オオモンクロクモバチに狩られる。寄生バエが腹部に産卵する。

【トピック】種名はラテン語の「大きな腹の」という意味。「venter」は「腹」を意味する。

ヤエンオニグモ（成熟：夏）
Araneus maccacus Uyemura 1961　**コガネグモ科**

♀ 約　20 mm　　♂ 約　15 mm

オニグモより一回り小さい。オニグモやヤマオニグモに似るが，腹部の幅と長さがほぼ等しく、腹背の葉状斑は前方が幅広く、両縁は鋸歯状ではなく波状，葉状斑は褐色のヒシ形の斑紋として目立つ。【網性】夕方から網を張り出すが，一度張った網をボロボロになるまで使った［貞元］。1m 前後の比較的低い場所に垂直円網を張る。網には隠れ帯を付ける。【備考】最初の採集地が八王子市の野猿峠。＜♀ Photo：谷川＞

ヤマオニグモ（成熟：夏）
Araneus uyemurai Yaginuma 1960　**コガネグモ科**

♀ 約　17 ～ 20 mm　　♂ 約　11 ～ 13 mm

ヤエンオニグモやオニグモとよく似ているが，腹背の葉状斑の外側の白みが強いこと、脚の輪紋の白みが強いこと、腹部がやや細長い形態をしていることが特徴である。【網性】直径 30 ～ 50cm の垂直円網を張るが，昼は網にいない。オスの方が網にいる時間が長い。網は真夜中に張りかえる。産卵前後には網を張らない［林］。【卵嚢】8 月～ 9 月に 3 回産卵の例がある。
＜♀ Photo：安藤＞

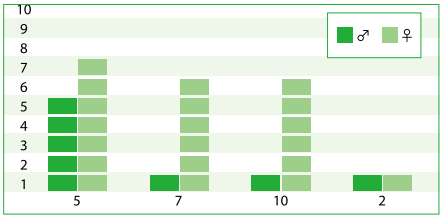
イエオニグモ（成熟：夏）
Neoscona nautica (L.Koch 1875)　**コガネグモ科**

♀ 約　8 ～ 12 mm　　♂ 約　5 mm

成体は 7 ～ 11 月に出現。腹部の形はコゲチャオニグモ・ヤマシロオニグモ・ヘリジロオニグモと類似。【網性】人家の軒下，駅舎の窓やホームの天井，商店等の店先や周辺，街路灯の蛍光灯の周囲などに垂直円網を張る。昼間は網の一端の建物の隅や陰に潜み，夕方から活動を始め，前日張った網を壊して張り替える。【卵嚢】白色のふわふわした卵嚢。卵嚢内越冬の幼体も多い。
＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：森田

♀・まどい　　Photo：池田



ユウレイグモ

幽霊蛛　　*Pholcus zichyi* Kulczyński 1901

ユウレイグモ科

100 %

不規則網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 5 ～ 6 mm

♂ 約 4 ～ 5 mm

【観察ポイント】第 1 脚は特に長い。前中眼が退化傾向にある。平地から山地帯まで分布，丹沢では標高 550m が上限。

【習性】獲物が網にかかったり，糸に振動があったりすると，体をゆらゆらと動かすが，危険を感じるほどの刺激を受けると体がぼやけてみえなくなるほど激しく動かして 相手を威嚇する。【網性】うす暗い場所に不規則網を張る。【卵嚢】15 ～ 40 卵を糸で簡単にかがり，口にくわえて保護。産卵は 6 ～ 8 月。【生活】7 月 12 日の出嚢幼体は自然及び長日条件では 45 ～ 85 日で成熟（4 ～ 5 回脱皮，8 ～ 9 月に成体），短日条件では 90 ～ 175 日（5 回脱皮，8 月に成体）［宮下和］。

【トピック】網末端の接着部には粘球があり，虫がかかると切れる。シモングモ，イエユウレイグモも同様だった［新海明］。粘球を出す腺は不明。卵嚢のための管状腺は退化。単性域類である。単性域類はメスの貯精嚢の交尾口と受精口がひとつの型で，後に交尾したオスの精子が優先的に使われると考えられたが，実際には先に交尾したオスと後に交尾したオスの精子は混合して使われていた。

イエユウレイグモ（成熟：春、夏、秋）
Pholcus phalangioides (Fussulin 1775)　**ユウレイグモ科**

♀ 約　8 ～　10 mm　♂ 約　7 ～　8 mm

ユウレイグモより大きい。危険を感じると体を激しく揺らす。【網性】屋内や床下，建物周辺に不規則網を張る。網は大きいものでは70cm以上。群れを成すこともある。【卵嚢】長崎県で7月4日に51卵の記録がある［大利］。トラップ・スレッドがあるというが詳細や糸腺は不明である。粘球とは別にスクリュー・スレッドがあるという報告もある。

＜♂ Photo：新井＞

アケボノユウレイグモ（成熟：春、夏）
Spermophora akebona (Komatsu 1961)　**ユウレイグモ科**

♀ 約　2 ～　2 mm　♂ 約　2 ～　2 mm

微小種。シモングモによく似ているが本種は屋内に侵入することはなく，シモングモが白っぽいのに対し，本種は暗色の個体が多い。アケボノユウレイグモの生態はよく分かっていない。シモングモはフランスの分類学者の名に因むが，腹背にある対斑のうち四つが目立つ（つまり四紋に見える）ことも特徴。属名の Sperma は精液，phero は持つを意味するギリシア語。

＜♀ Photo：初芝＞

シモングモ（成熟：春、夏、秋）
Spermophora senoculata (Dyges 1836)　**ユウレイグモ科**

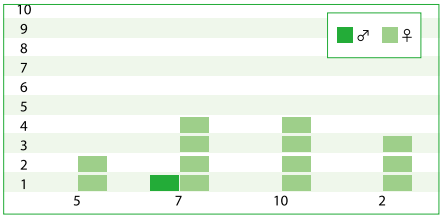
♀ 約　2 ～　3 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

屋内性の微小種だが，野外にも見られる。【網性】不規則網はオオヒメグモのようなトラップ・スレッドを持つ。【卵嚢】卵を糸でかがる。産卵期は5月～11月，産卵は二度，16～27卵。1回目の脱皮まで4～7日，1～3日で分散［佐藤幸］。【生活】10月20日に出嚢幼体を飼育，自然条件及び長日条件の発育の結果は4回脱皮，2～3月に成体。短日条件では50～70日遅れて成熟（4～5月に成体）［宮下和］。＜♀ Photo：谷川＞

♀ Photo：安藤

背甲が四角く、脚が黒い

♂ Photo：新海



ジグモ

地蛛　*Atypus karschii* Dönitz 1887

ジグモ科

90 %

地中性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 12 ～ 20 mm

♂ 約 10 ～ 15 mm

【観察ポイント】巣による同定は容易。顎が大きい。丹沢では標高 700m 以上の山地帯にも生息する。

【習性】下半分が地中にある袋巣の中に住み，袋巣の表面を歩く虫を巣の中からかみついて中に引きこむ。食べカスは外に捨てる。

【生活史】オスの成熟は梅雨期でメスの巣に同居する。7 ～ 9 月に産卵された卵嚢は袋巣の中に置かれ，やがて 9 ～ 10 月に幼体が出嚢し，2 度脱皮する。幼体は母親と同居を続け，翌春に巣を出て分散する［青木］。分散幼体のオスはその後 8 ～ 9 回脱皮し、生後 3 年目に成熟，メスは 9 ～ 11 回脱皮し，3 年目の春・秋と 4 年目の春に成熟［宮下］。空中分散前に歩行して低木間にシート状に糸をたくさん引くが，この糸は後疣からの原ブドウ状腺由来のもの。大瓶状腺由来の前疣からのしおり糸と同じものではない。

【トピック】刺激すると牙で自分の腹を刺してしまう習性からハラキリグモなどの異名をもつ。メスは成熟後も脱皮する。ジグモは糸疣が 4 節だが，糸疣が 3 節のヒラヤジグモが奄美大島等に生息する。

袋巣と卵嚢

ジグモの住居。袋巣の英名は purse web。中のクモが発育するにつれて巣長と巣幅は大きくなる。巣幅と巣内のクモの背甲幅には強い正の相関があった。また，6 月中旬からは大きな巣には脱皮殻が目立つ［花井］。

＜巣及び卵嚢 Photo：池田＞

ワスレナグモ（成熟：秋）

Calommata signata Karsh 1879　**ワスレナグモ科**

♀ 約　13 ～　18 mm　♂ 約　5 ～　8 mm

【網性】地上部の袋巣は無い。孔の入口で外を伺い，付近を徘徊する虫を待ち構えて捕える。巣の口径とクモのサイズは相関しない［畑守］。【生活】ジグモ同様孵化から 2 回の脱皮を経て分散する［桑田］，空中分散の時期は 6 月 3 日～ 9 月 3 日の晴れた日［関口，浜村，成田，桑田］。【備考】和名の由来はベーゼンベルグ（1906 年）以降，採集されていなかったが，大正 2 年（1913）に岸田久吉によって「忘れぬように」と名付けられた。

＜ワスレナ♀と巣 Photo：山崎＞

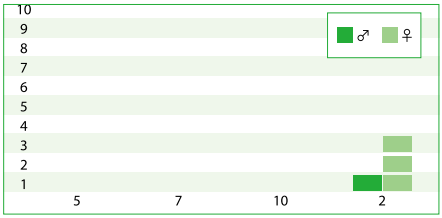
虫を顎ではさめない地中性クモ

ジグモやワスレナグモ，トタテグモなど地中に住む古いクモの仲間は，顎を左右に開閉することは出来ない。顎は上下にしか動かない。つまり，虫をはさんで捕獲することが出来ないのである。また，ジグモを除くと，糸を使った虫捕獲もしていない。糸は巣作りや卵の保護に使われている。

♀　　Photo：新井

腹背に 4，5 本の白い横縞
中窩が U 字形

扉　　Photo：谷川



キシノウエトタテグモ

岸上戸建蛛　*Latouchia typica* (Kishida 1913)

トタテグモ科

60 %

地中性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 12 ～ 20 mm

♂ 約 10 ～ 15 mm

【観察ポイント】紫色の腹背に白い横縞がある。片開きの扉をもつ。

【習性】神社や寺の境内，家の土台石の脇，植え込みの地面に縦穴の管状住居を作る。クモはこの扉のすぐ内側にいて，扉の前を昆虫，ワラジムシなどの小動物が通ると，とびだしていって捕らえ，一瞬のうちに住居の中に引きこむ。【生活】9 ～ 10 月にかけてメスの住居に移動する途中のオスを発見する。クモタケに寄生される（6 月の梅雨期に発生）。生活史が判明しているため観察会では発育段階未確認の場合が多い。都下で①オスの出巣・交尾時期は 9 月上旬－ 11 月中旬，産卵期は翌年の 7 月中下旬，産卵メスの割合は 20% を占める。7 月下旬－ 8 月中旬に孵化した幼体は母親の巣内に留まり，翌春の 4 月上中旬に出巣・分散する。②経産メス・大型メスの産卵率は 50% であることが判明した。③母親と同居する 2 令幼体は平均 74 頭［鈴木成］。野外では分散後 3 ～ 4 年で成熟する［中西］。

【トピック】最初に岸上鎌吉により採集されたのは東京大学の医学部前の植え込みであった。発見から 100 年後の 1989 年 6 月 17 日にも同じ場所に生息していた。

扉

キノボリトタテグモ（成熟：夏）
Conothele fragaria (Dönitz 1887)
トタテグモ科

♀ 約 10 ～ 12 mm
♂ 約 8 ～ 10 mm

【網性】網はない。マツ，スギ，ヒノキなどの木の表面をけずって長さ 2 ～ 3cm ほどの袋状住居を作り，入口に扉。住居と扉は樹皮や苔，土などを付着させて偽装する。【卵嚢】30 ～ 130 卵［中平］，産卵期は 8 ～ 10 月。
<♂及び扉 Photo：新井>

扉

カネコトタテグモ（成熟：春、夏）
Antrodiaetus roretzi (L.Koch 1878)
カネコトタテグモ科

♀ 約 12 ～ 15 mm
♂ 約 10 ～ 13 mm

【網性】網はない。地中巣に観音開きの扉を持つ。丹沢では 700 m以上の山地帯にも生息する。【生活】オスは 3 月下旬ないし 4 月 21 日から夜間徘徊。4 月 30 日オスは第 1 脚で地表を叩き，メス住居の扉を開いて侵入，約 2 分間巣内にいて後ずさりし外へ出た［牧］。8 月 28 日孵化卵が約 40［笹岡］。飼育下で産卵（8 月 12 日）と親の卵嚢捕食（8 月 27 日）を観察［牧］。<♀ Photo：腰高，扉：谷川>

キムラグモ（成熟：夏、秋）
Heptathela kimurai Kishida 1923　**ハラフシグモ科**

♀ 約 9 ～ 13 mm　♂ 約 9 ～ 13 mm

腹部に体節痕をもつ生きた化石。種名は発見者の木村有香に因む。この仲間は南は西表島から北は福岡県まで生息。空中分散せず移動力が小さいため地域的に種分化している。【網性】網はない。地中に穴を掘って住むが，糸は住居扉と卵の保護に使われていて巣の裏打ちはされていない。【備考】本種は本州には産しないが，クモの進化を考察するうえでもっとも重要な種なので，写真を掲げた。<♀ Photo：谷川>

日本に上陸した有毒なクモ

【観察ポイント】ゴケグモ属は腹部腹面に赤い砂時計形の模様を持つ。背甲に赤い模様をもつ類似種が多いが，砂時計模様がない場合にはゴケグモではない。<解説図：池田>

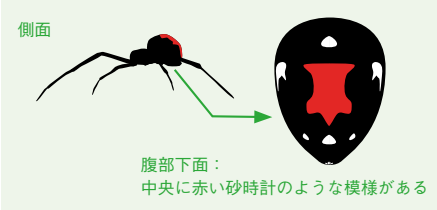
【習性】側溝や墓地など人工物に生息する有毒蜘蛛。クモ自身からヒトにかみつくことはないが，不用意に触れると咬まれることがある。ゴケグモ属のメスは人体に害をなす神経毒を持つ。オスは小形で無毒。【網性】不規則網。【生活】一年中，成体が見つかる。オーストラリアでは10℃以上で成長，成熟までの日数はオス28～45日（通常5齢），メス45～74日（7-8齢）[最適温度25℃の例。Forster 1984による]。冬季の四日市での卵数は56～293卵，平均164卵[太田]。

【トピック】1995年11月に本種が大阪府で発見されて以来，西日本を中心に分布を拡大している。関東でも局地的に発見されている。脊椎動物に対するゴケグモの毒成分はαラトロトキシンだが，1950年以降世界中で死亡例は一例もない。半世紀前のオーストラリアでの重症例は野外トイレの便座にクモがいたのに気づかず座ってしまい，性器を咬まれてしまった場合などだった。大阪府や三重県では抗毒血清が用意されている。抗毒血清はゴケグモの種類がちがっても効果がある。ただしウマ血清なのでこれにアナフィラキシーを起こすかどうか事前のチェックを必要とする。日本での咬症被害は軽症だった。なお，ヒトのような脊椎動物と昆虫のような無脊椎動物では神経伝達物質が異なり，一般のクモは脊椎動物を麻痺させる神経毒は持っていない。

♀　Photo：高橋

セアカゴケグモ（成熟：春、夏、秋、冬）
Latrodectus hasselti Thorell 1870　**ヒメグモ科**

♀ 約　7 ～　10 mm　♂ 約　4 ～　6 mm



♂　Photo：新海

卵嚢　Photo：新海

ハイイロゴケグモ（成熟：春、夏、秋、冬）
Latrodectus geometricus C.L.Koch 1841　**ヒメグモ科**

♀ 約　7 ～　10 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

大阪でセアカゴケグモの移入が判明した直後の 1995 年 11 月，神奈川県横浜市の本牧埠頭公園で初めて移入が確認された。熱帯から来た有毒蜘蛛。毒はセアカと同等。【卵嚢】コンペイ糖様の小突起がある。横浜の平均 147 卵［木村］。小突起はハエの寄生を減らす効果がある。【網性】不規則網【生活】世界中の熱帯地方に分布し，人工物（窓枠，建物の突起部，ベンチレーターの中，パイプの蔭，ひさしの下など）に網を張って生活する。メスは出嚢後 7 回脱皮して 9 齢で成熟するまでに 10-28 週間，平均 24 週間。オスは出嚢後 3 回脱皮して 5 齢で成熟するまでに平均 5.5 週間を要した。未交尾成体オスの寿命は 2 週間程度と短命。＜♀と卵嚢 Photo：新井＞

無毒のゴケグモ類似種

ハンゲツオスナキグモ（成熟：春、夏）
Steatoda cavernicola (Thorell 1890)　**ヒメグモ科**

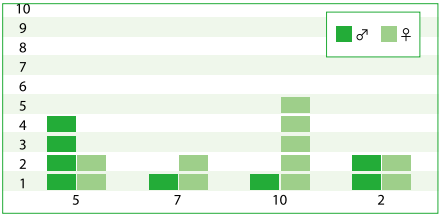
♀ 約　6 ～　7 mm　♂ 約　5 ～　6 mm

ハンゲツオスナキグモの名前は腹部前端の半月紋とオスが発音器をもつことから命名された。この仲間のクモ（カガリグモ属）は造網場所として河川敷や人工物を好むこと，ヒメグモ科であること，体色がクロゴケグモに似ていること等から，外国では毒蜘蛛と間違われることが多い。しかし，まったく無毒無害である。似た仲間にゴマダラヒメグモやシロホシヒメグモ，マダラヒメグモがいる。いずれの種も攪乱地にパイオニアとして侵入することの多い種である。
＜♀ Photo：新井＞

♀ Photo：安藤

腹背に碇形と波の黒紋がある

♂ Photo：谷川



カニミジングモ

蟹微塵蛛　*Phycosoma mustelinum* (Simon 1888)

ヒメグモ科

100 %

アリ専食

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 3 ～ 4 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】腹背に碇形と波形の模様がある。背甲に頸溝がある。丹沢では標高700m 以上の山地帯にも生息する。

【習性】ミジングモは微塵という名前の通り微小種や小形種で識別は難しい。しかし，カニミジングモとシモフリミジングモは斑紋の特徴が明瞭で他の種と容易に識別できる。ただし，斑紋には変異が多い。平地から山地まで広く生息する。【網性】網はない。公園，雑木林，草原，林道などの樹木の枝や葉裏，草の葉裏や茎で待機し，接近してくるアリに粘糸を投げつけて捕える。アリは空中に吊るして食べる。この投げつけ粘球はオニグモ類の横糸と粘球に相当するものである。粘球を作るのは葉状腺（集合腺が進化した糸腺），投げつけ粘球の糸は鞭状腺由来である。ミジングモはアリ専食クモである。カニミジングモは大形のアリから小形のアリまで捕獲する。

【トピック】ミジングモ類は頭を側面からみたときに眼の下にくぼみがある。アリは翅を失くしたハチに相当し，もっとも進化した昆虫である。そのアリを餌に特化したミジングモ類も進化したクモである。

シモフリミジングモ（成熟：春、夏）
Dipoena punctisparsa Yaginuma 1967　**ヒメグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　3 mm

腹部は丸く，腹側面は黒い。両肩の間にシモフリ斑紋が凹になっている箇所がある。この凹が本種の特徴。枝間でよく見つかる。サイズに二型があり約5mmのメスもいる。【網性】網はない。アリ専食で，ケアリ属（特にトビイロケアリ）を一度に多く捕食する。梅の果樹などで採集されることが多い［梅田ほか］。

<♂ Photo：池田>

ボカシミジングモ（成熟：春、夏）
Yaginumena castrata (Bös.& Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ボカシミジンは全身と脚が黒い。脚が黄色で第１脚腿節に黒環ありはキベリミジングモ，黒環なしはクロミジングモ。【網性】網はない。アリ専食で，１頭のアリを捕獲していることが多い。大型と小形のケアリ（単独で餌探しをする種類）が半々［梅田ほか］。糸上で待ち伏せしていて突然，近づいたアリの前脚先を 0.1 ～ 0.3 秒かむ。アリが麻痺して動きが弱ると，次に触覚のつけ根を咬む。マダラミジングモは数回かむ［安藤］。

<♀ Photo：安藤>

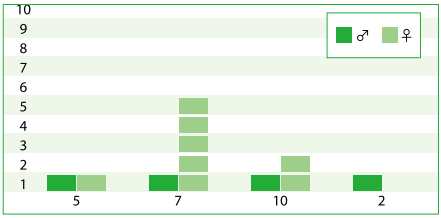
コアカクロミジングモ（成熟：春、夏）
Yaginumena mutilata (Bös.& Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　3 mm　♂ 約　1 ～　2 mm

ミジングモのなかでも特に小さい種。全体的に黄褐色から褐色で赤みを帯びる。【網性】網はない。アリ専食で，夜間に葉と茎の間，葉と地面の間などに糸を引いてぶら下がり，接近してくるアリの脚をかむ。弱ったアリに粘糸を投げかけて吊り上げる［新海］。【生活】ミジングモ類の交尾や繁殖，産卵，卵嚢や卵数の記録は無い。

<♀ Photo：安藤>

♀　コハナグモは背甲に刺毛を持つが本種にはない　Photo：石田



♀斑紋あり　Photo：山崎

♂　Photo：石田

ハナグモ

花蛛　*Ebrechtella tricuspidata* (Fabricius 1775)

カニグモ科

100 %

葉上徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 5 ～ 7 mm

♂ 約 3 ～ 5 mm

【観察ポイント】背甲に刺毛がなく滑らかな点でコハナグモと区別できる。腹背斑紋がない個体もいる（幼体や秋に成熟するメスなどに多い）。日本での上限は標高 1500m。高山帯を除いたいたるところに見られる普通種であるが個体数は減少している。

【習性】斑紋には変異がある。葉上徘徊性で，花の上で待ち伏せ捕食をする。横歩きするものの，ほとんど動かない捕食戦術のおかげで，他の虫にとっては危険なハチや蜂に擬態したアブ，鱗粉のために取り逃がすことが多い蛾・蝶などの捕獲を主にしている。【卵嚢】100 ～ 200 卵。出嚢幼体は 2 ケ月弱で成熟するため，年中成体が出現する。6 ～ 7 月と 9 ～ 10 月に最も成体が出現，産卵もその期間に集中している。カニグモ類は卵嚢を母グモがガードする習性がある。糸腺は瓶状腺・ナシ状腺・ブドウ状腺・管状腺を備える。

【トピック】「人面蜘蛛」として話題になるのは腹背に人面様の斑紋のあるハナグモである。

コハナグモ（成熟：春、夏）
Diaea subdola O.P.-Cambridge 1885　**カニグモ科**

♀ 約　4 ～　8 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

背甲に刺毛がある点でハナグモと区別可能。刺毛は幼体でもルーペで確認できる。成体は 6 ～ 9 月。コハナグモは 1000m を越えるとハナグモより多くなる。徘徊性（潜伏型）。ハナグモ同様の普通種だが，交尾・繁殖・産卵・卵数などの生態は記録・報告が無い。飼育による報告も無い。【備考】コハナグモと同属のクモに高標高に生息するギョウジャグモがいる。

＜♀ Photo：谷川＞

クマダハナグモ（成熟：春）
Ebelingia kumadai (Ono 1985)　**カニグモ科**

♀ 約　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

色彩は褐色でヤミイロカニグモとハナグモを合わせたような色合いであるが，体長はずっと小さい。腹部の地色は黄色・黄白色・淡桃色などの変異がある。徘徊性（潜伏型）で花に潜んで待ち伏せる。交尾・繁殖・産卵・卵数などの生態報告はほとんど無い。【備考】和名は発見者の熊田憲一氏にちなむ。

＜♀ Photo：谷川＞

アマギエビスグモ（成熟：春）
Lysiteles coronatus Grube 1861　**カニグモ科**

♀ 約　2 ～　4 mm　♂ 約　3 mm

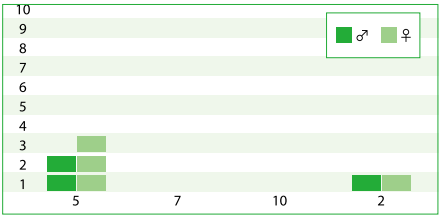
小型種である。腹背斑紋で識別するが，タカネエビスグモ，チクニエビスグモなど類似種が多い。メスは背甲の両側にある幅の広い黒色斑が目立つ。山地に多く生息。バルーニングの能力が高く，700m 以上の山地帯で多く発見される。徘徊性（潜伏型）。【備考】和名のアマギは伊豆半島の天城山にちなむ。

＜♀ Photo：腰高＞

♀ Photo：浅間

背甲は黒褐色、腹背は
背甲より薄い黒褐色
第４脚の環紋は明瞭

♂ Photo：谷川



ネコグモ

猫蛛　*Trachelas japonicus* Bös.& Str. 1906

ネコグモ科　草間枝上徘徊性

90 %

成熟：春 夏 秋 冬

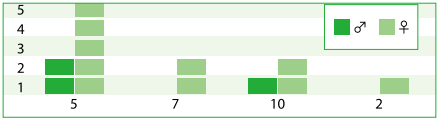
♀ 約 3 ～ 5 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】全体褐色だが，腹背のキ字状の黒色斑紋に特徴がある。落葉層を徘徊する。類似種にヒメグモ科のスネグロオチバヒメグモがいる。スネグロは背甲が黒くなく茶色であること，第１脚のケイ節だけが黒いことなどで識別できる。

【習性】平地から山地まで広く生息している。草間，灌木の枝上を徘徊する。越冬は幼体から成体まで。越冬巣としてオオミノガのミノをよく利用している［徳本・鍛冶秀雄］。7月12日長崎で，巻かれた葉の中に産卵している例があった［大利］。普通種だが、交尾・繁殖・産卵・卵数など生態報告はほとんどなく，飼育記録もない。類似の別種がいる可能性もあるため（平塚市でオスが採集されている），識別は慎重に行う。

【トピック】ネコグモは「猫」のように敏捷に走り回るという意味の命名だろう。ネコグモが所属するネコグモ科の系統は，最新のデータでは徘徊性のクモのなかで，以前所属していたウエムラグモ科よりもエビグモ科に近縁とされているが，いまなお流動的である。



スネグロオチバヒメグモ（成熟：春、秋）
Stemmops nipponicus Yaginuma 1969　**ヒメグモ科**

♀ 約　3 mm　　♂ 約　3 mm

【卵嚢】白色球形の卵嚢は 3.5 ～ 5.5mm 大で網上部の葉裏に作られる［新海］，5 ～ 8 月に 2 ～ 3 個を作成［山川・熊田］，108 卵［松本］。母グモは未受精卵を食べる［鈴木勝］。【網性】落葉中に不規則網を張る。【生活】6 月中旬に交尾を観察［稲葉］。静岡県袋井市の水田で「ゴキブリほいほい」で 6 月下旬～ 7 月上旬に採れるクモの最優占種［池田］。

＜♀ Photo：新井＞

オビジガバチグモ（成熟：夏）
Castianeira shaxianensis Gong 1983　**ネコグモ科**

♀ 約　7 ～　9 mm　　♂ 約　7 mm

第 1 脚を上下に振りながら敏捷に動く姿はアリに似ている。平地から山地に生息する。公園, 庭, 草原，河原，崖地，樹林地の周辺，林道などの草間の地表付近，石の間，石垣，堤防，落葉の中, 時には家の中などでも見られる［新海］。【卵嚢】小田原市で採集したメスは 7 月 8 日深夜に産卵。卵嚢に糸かけ終了後，飼育箱のプラスチックのフタをかじりとろうとした。11 日に 2 個目を産卵。トビムシをよく捕食［安藤］。　＜♀ Photo：谷川＞

ハタケグモ（成熟：春、夏、秋、冬）
Hahnia corticicola Bös.& Str. 1906　**ハタケグモ科**

♀ 約　2 ～　3 mm　　♂ 約　2 ～　3 mm

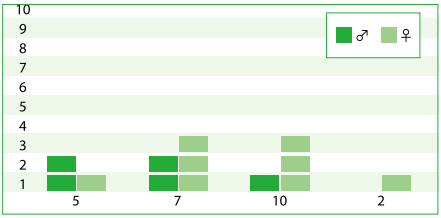
横並びの糸疣に特徴がある。【網性】畑地のくぼみ，草地の地表面などに，膜を張ったような 2 ～ 3cm の小さな膜状棚網を張る。クモは網の下の地表面に潜む。網には露がつくと目立つ。壊れやすい［新海］。【生活】7 月 5 日から 41 日間に 9 個の卵嚢を作成，出嚢数は 9・5・0 頭，ふ化まで平均 12 日，第 1 脱皮までは 4.5 日。翌年の 2 月 14 日に 5 回目の脱皮で成熟［佐藤幸］。

＜♂ Photo：安藤＞

♀ Photo：谷川

腹背の中央に 7 対以上の点斑がある

♂ Photo：新井



イタチグモ

鼬蛛　*Itatsina praticola* (Bös.& Str.1906)

ウエムラグモ科

90 %

地表徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 5 ～ 9 mm

♂ 約 5 ～ 8 mm

【観察ポイント】地表を徘徊している。体色の濃淡には変異がある。地味な紋様で覚えにくいし，タンボグモと混同された過去もあった。背甲の独特な形と腹背の点斑の紋様が決め手となる。

【習性】地表，落葉中を徘徊する代表的なクモ。獲物はトビムシ，ワラジムシ，昆虫の幼虫などで，体の堅い動物は好まない［新海］。飼育下でイタチグモは薄いシート状の網を張り，網の振動を手がかりにして虫を捕獲する［酒井春彦］。キカマキリモドキに外部寄生される。キカマキリモドキの宿主はイタチグモの他，ヤチグモ類・シボグモ・コアシダカグモなど落葉層に生活するクモ。ヒメカマキリモドキは腹柄に 1 頭だけ寄生するが，キカマキリモドキは複数寄生できる。

【トピック】記録率は 90%なのに成体はあまり採れていない。交尾や繁殖などの生態データもほとんどない。幼体でも類似種がいないので識別可能。

カムラタンボグモ（成熟：夏）
Agroeca kamurai Hayashi 1992　**ウエムラグモ科**

♀ 約　2 mm　　♂ 約　2 mm

イタチグモもタンボグモも特徴のつかみにくいクモである。イタチグモのメスは脚があまり長くないためクモ自体がずんぐりに見えるし，タンボグモは脚がきゃしゃな感じである。タンボグモ類は各地に生息していると思われるが落葉徘徊性のクモなので発見されにくい。体形からワシグモと誤解される例が多いが，糸疣の形態がワシグモとは異なるので区別できる。
＜♀ Photo：安藤＞

コムラウラシマグモ（成熟：春、秋）
Otacilia komurai (Yaginuma 1952)　**ネコグモ科**

♀ 約　2 mm　　♂ 約　2 mm

地表及び落葉徘徊性だが，脚が長く背面の紋様もしっかりしている。腹背には淡紫色の地に，大きな黒目模様と，頬・鼻下・顎に対に髭をはやしたような紋様がある。アリの巣穴で見つかることがよくあり［小松］，アリとなんらかの関係があると思われるが，詳しいことは分かっていない。
＜♀ Photo：安藤＞

オトヒメグモ（成熟：夏）
Orthobula crucifera (Bös.& Str. 1906)　**ネコグモ科**

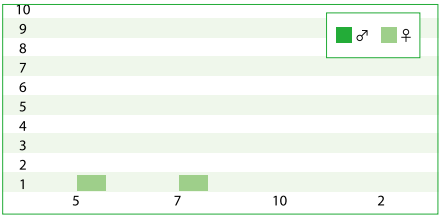
♀ 約　2 mm　　♂ 約　2 mm

地表及び落葉徘徊性だが，腹背中央に黒い特異な斑紋があるので区別できる（図参照）。斑紋が薄い個体もある。【卵嚢】卵嚢作成後，尻から水のような粘液を出し，卵嚢表面に塗り伸ばす行動を見せた。この液体はネコグモの糊状液とは異なる。卵嚢には大粒の砂も付ける。トビムシを飽食させると，6 月 28 日から 7 月 9 日までに 2~3 日おきに 5 回産卵した［安藤私信］。【備考】ウラシマグモと近縁なので乙姫蜘蛛と命名。＜♀ Photo：安藤＞

♀　　Photo：新井

背甲は赤褐色
腹部中央の点斑が特徴

ヤマトフクログモ♀　　Photo：新井



ムナアカフクログモ

胸赤袋蛛　*Clubiona vigil* Karsh 1879

フクログモ科

70 %

葉上徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 8 ～ 13 mm
♂ 約 8 ～ 13 mm

【観察ポイント】平地から山地まで広く生息する。フクログモのなかでは腹背模様に特徴があるが，ヤマトフクログモ，マダラフクログモも同様の模様である。

【習性】夜間，樹葉間や草間を徘徊，昼間は葉の上に袋状の住居を作ってひそむ。【生活】葉をまげてその中に産卵する（6～8月）。30～70卵。母親は卵嚢をガードする。
【越冬態】成体または亜成体，冬期は樹皮下に袋状住居を作る。ヤマトフクログモと共に冬季ワラ巻内の優占種。

【トピック】袋蛛という名称は袋状住居を作ることに由来する。フクログモ属は色彩・斑紋とも類似していて，識別は生殖器に依ることが必要。ムナアカフクログモとヤマトフクログモでさえも正しい識別は生殖器で行う。ハマキフクログモ，コフクログモ，ヒメフクログモ，トビイロフクログモなど河川敷や平地でも類似種がたくさん生息している。コマチグモ類はフクログモに比べると脚が長いものの，幼体では間違えやすい。

♀

ヤマトフクログモ（成熟：春）
Clubiona japonica L.Koch 1878　**フクログモ科**

♀ 約　8 ～　13 mm　♂ 約　8 ～　13 mm

形態や習性はムナアカフクログモとほとんど同様。ムナアカとは胸板が赤いという意味だがヤマトフクログモと区別できない。

＜Photo：新井＞（左がムナアカ，右がヤマト）

ヤハズフクログモ（成熟：春、夏）
Clubiona jucunda (Karsch 1879)　**フクログモ科**

♀ 約　6 ～　8 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

腹背は黄色または黄褐色で矢はず状の暗色斑紋がある。斑紋が薄い個体や中央に赤い条がある個体も見られる。斑紋が明瞭な個体は識別が容易である。成体出現期は 5 ～ 8 月。林の周辺，林道などの枝や草上を夜間，徘徊する。冬期は樹皮下，スゲ植物の間，落葉下などに袋状住居を作り越冬する。＜♀ Photo：新井＞

ヒメフクログモ（成熟：春、秋）
Clubiona kurilensis Bös.& Str. 1906　**フクログモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

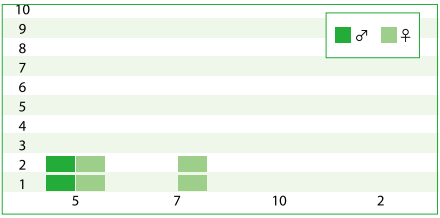
水田の周辺と河原草原に多く，細いイネ科植物の葉を巻いて住居を作りその中に潜む。関東北部の水田にはハマキフクログモより多い。【生活】5 月 14 日産卵，5 月 29 日孵化。まどいは 20 頭。6 月 4 日に卵嚢内で 1 度脱皮。6 月 6 日に出嚢・分散した。親はこの段階まで卵嚢をガードする。約 4 ケ月で成熟した。年 2 ～ 3 世代と推定［林・千国］。

＜Photo：安藤＞

♂　　Photo：新井

背甲中央に蝶模様が見える
腹背は黒茶色、糸疣が突出

ヨツボシワシグモ♀　　Photo：新井



メキリグモ	40 %	成熟： 春 夏 秋 冬
目切蛛　*Gnaphosa kompirensis* Bos.& Str. 1906		♀ 約 6 ～ 14 mm
ワシグモ科	地表徘徊性	♂ 約 5 ～ 8 mm

【観察ポイント】ワシグモ類は黒っぽい体色で識別が難しい。メキリグモ属は背甲中央に蝶々模様が見えるが，メキリ，カワラメキリ，モリメキリ等６種は模様だけでは区別できない。生殖器の構造に依る確認が必須である。

【習性】河原，池や沼の周辺，草原，林道等の石の間，石や倒木の下，地表面，草間の地表付近，落葉の中を歩き回って獲物を探す。産卵は，主に石の下のくぼみに白色の卵嚢を作り，その上で保護する。

【トピック】「メキリ」は後牙堤歯が鋸状であることから岸田久吉が命名した。ワシグモ科は糸疣が後端に突出するのが特徴だが，クサグモやハタケグモの糸疣も同様に目立つので特に幼体では誤る可能性がある。ワシグモは糸疣の前対と後対が円筒形で、かつ前対が互いに広く離れている点が特徴。地表や落葉層から偶然に見つかる例が多い。東京蜘蛛談話会の会誌名 Kishidaia の由来となったヨツボシワシグモ *Kishidaia albimaculata* (S.Saito1934) は腹部に四つ星紋（白紋）をもつ樹上性ワシグモである。

エビチャヨリメケムリグモ（成熟：春、夏）
Drassyllus sanmenensis Platnick & Song 1986　**ワシグモ科**

♀ 約　5 ～　8 mm　♂ 約　5 ～　7 mm

全身が黒くてそのほかの特徴が不明瞭。日本産ケムリグモやヨリメケムリグモの識別は難しく斑紋では識別できない。ヨリメケムリグモはケムリグモよりも後中眼が大きい。平地から山地に広く生息する。草原，河原，樹林地の周辺，林道等の落葉の中，草間の地表付近，地表面，石や倒木の間を歩き回って獲物を探す。5 ～ 11 月に成体。幼体にアリ卵を与えると食べる [稲葉]。
<♂ Photo：池田>

クロチャケムリグモ（成熟：秋）
Zelotes asiaticus Bos.& Str. 1906　**ワシグモ科**

♀ 約　4 ～　8 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

京都市にて成体は春と秋，亜成体は春に出現。春の幼体は小形，夏にかけて大きく，秋には再び小形。産卵期は 5 ～ 7 月で，17 ～ 34 日後出嚢，幼体は秋まで成長し (2 ～ 5 齢)，越冬に入る。翌春，成長を始め，夏に亜成体，秋に成熟 (8 回脱皮)，成体越冬後，春に交尾，その後産卵。2 年 1 化 [加村]。神奈川県平塚市で 7 月 31 日出嚢幼体 (2 齢) は飼育下で 6 齢まで（10 月 4 日）生存 [渋谷]。<♀ Photo：新海>

フタホシテオノグモ（成熟：夏）
Callilepis schuszteri (Herman 1879)　**ワシグモ科**

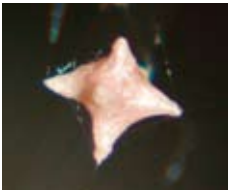
♀ 約　5 ～　7 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

背甲と腹背前方に金色の毛をもち輝くワシグモ。腹背の斑紋が目立つ。メスがやや大きい。5 月下旬から 7 月に成体。詳しい生態は不明。外国のテオノグモの一種ではアリを狩る様子が詳しく報告されている。正面から第 1 脚を振り上げて向かい，アリの触覚の根元に脚を差し込んで進み，触覚の根元を咬む。
<♀ Photo：新井>

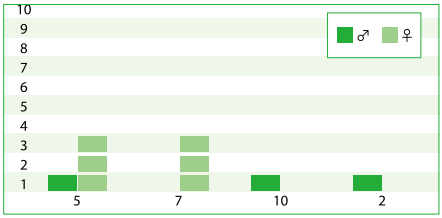
♀　Photo：新井

網の中央にいる
やや黄色い

餌捕食　Photo：森田



卵嚢　Photo：新井



ヤマジグモ

山路蛛　*Ogulnius pullus* Bos.& Str. 1906

カラカラグモ科

60 %　立体円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 1.0 ～ 1.5 mm

♂ 約 1.0 ～ 1.5 mm

【観察ポイント】 野外では網または卵嚢でやっとみわけられるほどクモは小さい。クモは網の中央にいる。

【習性】 体長 1.0 ～ 1.5mm の極小種である。【網性】湿気の多い暗い林内の地表近くの草間に水平円網がくずれたような立体円網を張る。この立体円網は円網の変形とみなせる。網は縦糸 8 本, 横糸 4 本で, 枠糸はない。網の中央から四方へ放射状でこしきは無い。餌捕獲行動は縦糸を「宙吊り状態」でゆっくり進み，接点で横糸をつたい，餌に乗りかかって包んだ。糸に餌をつけたままで，糸を切断したり，引き伸ばしたりしながら網の中央方向へ運んだ。行動はナルコグモとの類縁を示す [新海明]。平地での出現率は低いが，クモが小さいために見落としが多いように思われる。【卵嚢】7 ～ 8 月に白色の 4 角形の卵のうを作る。2 ～ 3 ケ月で成体になるので 1 年に 2 世代以上の可能性がある [新海]。

【トピック】 和名のヤマジは「山路」の意味である。属名はローマ人の名前，種小名の意味は「芽，雛」を意味する。

カラカラグモ（成熟：春、夏）

Theridiosoma epeiroides Bos.& Str. 1906　**カラカラグモ科**

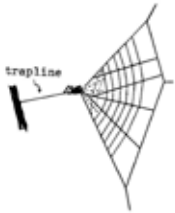
♀ 約　2 mm　♂ 約　2 mm

クモは微小。【網性】網は林道や渓流沿いの石や岩の間，草原の下部，湿った崖地などに張られる。垂直円網，水平円網，円錐形垂直円網の 3 種類の網を張る。垂直円網，水平円網は主に幼体期の網で，成体は直径 5 ～ 10cm の垂直円網を張って，中心より直角または斜めに引いた糸をたぐって造られた円錐形垂直円網を張る。網の形が傘に似ていて「傘状円網」と呼ぶ。造網法は典型的な円網だが，最後にこしきの部分がかみ切られて，無こしき網となる [新海・新海明]。＜♀ Photo：谷川＞

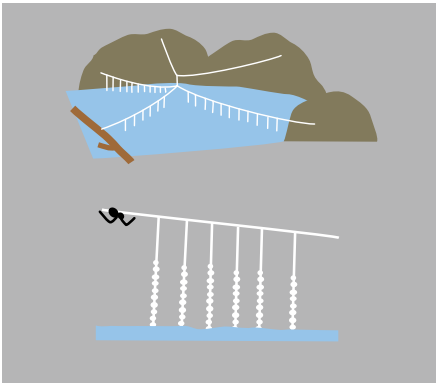
カラカラグモ【卵嚢】

コケの間や下草の間など湿った環境にカラカラグモの卵嚢が目立つ。発生・発育の研究はない。

＜卵嚢（上）：谷川，幼体は水平円網を張る（下）：新海＞



カラカラグモの
円錐形の網の図



＜鳴子網の図（新海 1997 より描く）＞

鳴子網

水面上に垂糸を下す鳴子網を張る**ナルコグモ**

Wendilgarda nipponica Shinkai 2009（♀ 2mm, ♂ 1 ～ 2mm）

もカラカラグモ科である。クモはごく小さい。

＜ナルコグモ photo：新海＞

雌雄成体の見分け方

オスは成熟すると，膨らんだ触肢の先が発達して交尾器が現れてくる。したがって，オス成体は一見して区別できる。膨らんでいても割れていなければまだ成熟前である。この交尾器にはスポイトのゴム球のような血嚢と注射針に当たる移精針があって，メスの生殖孔に精子を送り込むことが出来る。<写真１：血嚢が膨らんでいる>

一方，精子を受け取るメスの生殖孔は腹部腹面にあり，外雌器と呼ばれている<写真２>。外雌器を確認するためには，採集したクモを裏返す必要があるが，クモは反転させられた状態では静止していないため，確認は面倒である。成熟する直前の齢の亜成体では構造はあるが孔が開いていない。通常，孔が開くだけでなく暗色になったりして明瞭になる。ハエトリグモなどではメスの触肢が膨らんでいるように見える種類が多く，雌雄の判定に迷う場合がある。それでもハエトリグモは雌雄が色彩の異なる二型を示すので区別可能だが<写真３>、二型が小さいシラヒゲハエトリのような種類もいるし，オスが亜成体まではメス型を示すハエトリも多い。触肢が膨らんでいない，外雌器もできていないという場合には成熟前の幼体。

写真１：ネコハエトリ♂触肢　Photo：荘司

写真２：ナカヒラハエトリ♀外雌器　Photo：荘司

写真３：ヨダンハエトリ♀

♂

幼体　Photo：荘司

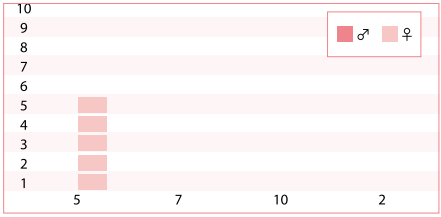
《 第 2 部 》 春に成熟するクモ

・カラフトオニグモ
・アオオニグモ
・ギンメッキゴミグモ
・ゴミグモ
・ズグロオニグモ
・ウロコアシナガグモ
・アシナガグモ
・カタハリウズグモ
・センショウグモ
・ユノハマサラグモ
・クスミサラグモ
・バラギヒメグモ
・ホシミドリヒメグモ
・ウヅキコモリグモ
・ササグモ
・アズマキシダグモ
・シャコグモ
・ヤミイロカニグモ
・ワカバグモ
・ネコハエトリ
・アリグモ
・ヤハズハエトリ
22 種

♀　　Photo：池田

腹部寸胴撫肩
（サガオニグモはとがる）

サガオニグモ♀　　Photo：谷川



カラフトオニグモ

樺太鬼蛛　*Plebs sachalinensis* (S.Saito 1934)

コガネグモ科

100 %

垂直円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 5 ～ 9 mm

♂ 約 4 ～ 5 mm

【観察ポイント】腹部はずん胴形でなで肩。背甲は白毛が密生。サガオニグモの肩はとがる。

【習性】春先に姿を現すクモ。低地帯から山地帯に広く生息，針葉樹林や広葉樹林の林道沿い等の林縁や林内に多くみられる。【網性】枝間や樹間に垂直円網を張る。幼体は棒状の隠れ帯を付けていることがある。円網の直径は 15 ～ 20cm。クモは昼夜を問わず，いつも網の中心にいる。【卵嚢】半球状の黄色卵嚢を，樹皮・葉・建物などに作る。産卵期は 6 ～ 8 月。

【トピック】和名のカラフトは最初に確認・記載された場所にちなんでいるが，カラフトオニグモ自体は日本各地に広く分布している。丹沢丘陵の山道では早朝道をはばむほど多くの網を見ることが出来る。
類似種サガオニグモ *Plebs astridae* (Strand 1917) 春に成熟（♀ 6 ～ 10mm，♂ 5mm）は肩（腹部前端）がとがって張り出すのでカラフトオニグモと区別できる。

メガネドヨウグモ（成熟：春、夏）
Metleucauge yunohamensis (Bos.& Str. 1906) **アシナガグモ科**

♀ 約　8 ～　11 mm　　♂ 約　5 ～　7 mm

メガネ形は背甲部の暗色斑紋。都市公園や寺社の池付近でも採集される。腹部腹面に黄色の三日月紋が左右にあり腹面からでも見分けられる。【網性】大型 (最大 2m，通常は 50cm ～ 1m) の水平円網。クモは網の一端の枝下に静止し待ち伏せる。網にかかった昆虫はすべて捕食。横糸と横糸の間隔が広く，ほとんど 1 本の横糸だけで捕えられる。【卵嚢】未確認だが，産卵期は 6 ～ 7 月と推定。　＜♀ Photo：森田＞

タニマノドヨウグモ（成熟：春、夏）
Metleucauge kompirensis (Bos,&Str. 1906)　**アシナガグモ科**

♀ 約　10 ～　14 mm　　♂ 約　7 ～　8 mm

頭部暗色斑が眼鏡形にならず腹背前方に暗色部（内は白斑）がある。【網性】渓流上に大型の水平円網を張る。メスは 18 時頃から造網し，翌朝 6 時頃から破網する。日中はイタドリ上などで静止している［吉田真］。【生活】幼体で越冬し，春から成長し始めて 6 月に成体。幼体が他の網に侵入し，餌を盗む例が多い［吉田真］。
＜♀ Photo：新海＞

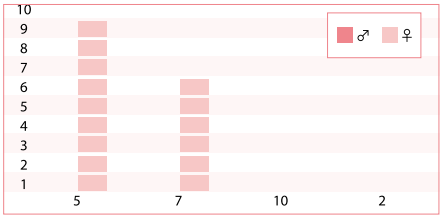
キザハシオニグモ（成熟：春）
Araneus abscissa (Karsch 1879)　**コガネグモ科**

♀ 約　6 ～　10 mm　　♂ 約　5 ～　8 mm

初春に成熟するオニグモ。肩の前後に横一線の仕切りがあるのが特徴だが，斑紋が薄い個体でははっきりしない。【網性】草間の地上 20 ～ 50cm の所に水平の正常円網を張る。オニグモ類で常に水平に正常円網を張るクモは日本では本種［新海］。【卵嚢】未確認。【備考】キザハシとは階段を意味する古語。腹背の斑紋が前後で段が付いていることから命名された。
＜♀ Photo：高野＞

♀　Photo：森田

♂　Photo：森田



アオオニグモ

青鬼蛛　*Araneus pentagrammicus* (Karsch 1879)

コガネグモ科

90 %

キレ網

成熟：春 夏 秋 冬

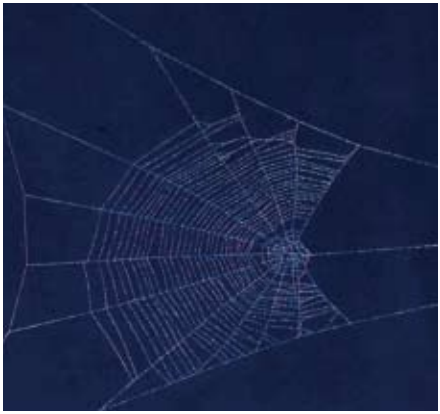
♀ 約 9 ～ 11 mm

♂ 約 5 ～ 6 mm

【観察ポイント】ビジョオニグモに似るが腹側面も青いところが異なる。また，ビジョオニグモの成熟季は秋であるが，アオオニグモの成熟季は春である。

【習性】平地から山地まで広く生息し，丹沢では標高 700m 以上の山地帯にも生息していた。【網性】庭の樹枝間にキレ網を張る。葉に住居を作って潜み、虫がかかると呼糸を伝って飛び出して来る。繁殖習性は記録がない。網データは直径 20cm，縦糸 13 ～ 20 本，横糸 14 ～ 28 本。

【トピック】無色透明の網糸は時間がたつと金色に光るようになる。オニグモやコガネグモなどの垂直円網種は腹部内に 7 種類の糸腺を持つ。円網の縦糸・枠糸は大瓶状腺，隠れ帯は小瓶状腺，横糸の基軸は鞭状腺，粘球は集合腺，卵嚢は管状腺（オスにはない），捕帯はブドウ状腺，付着盤はナシ状腺といったように機能分化がされている。



キレ網

垂直円網の一部に横糸がなく，一部が切れている網をキレ網と呼ぶ。切れている部分から出ている糸をたどると裏にクモが潜んでいる。網の振動を感じる受信糸を呼糸と呼ぶ。アオオニグモのほか、ビジョオニグモ，ヘリジロオニグモ，ヤマキレアミグモなどもキレ網を張る。ヘリジロは円網を張った後で網の一部を切り取る。アオオニグモやビジョオニグモは最初から切れる部分で折り返す。

＜網標本：船曳和代＞

ビジョオニグモ（成熟：秋）
Araneus mitificus (Simon 1886)　**コガネグモ科**

♀ 約　8 ～　10 mm　♂ 約　5 ～　6 mm

形態・網型・生態はアオオニグモに似るが，成熟時期は秋（9 月）と異なる。【生活】産卵期は 10 ～ 11 月。越冬態は卵で，3 ～ 4 月に発生が開始され，3 月下旬～ 5 月上旬にふ化する。100 ～ 450 卵。卵嚢内の発育にバラつきがあり，出嚢後，まどいをせず温かい日に分散していく。子グモはキレ網でない円網を張る［佐藤幸］。

＜♀ Photo：腰高＞

ハツリグモ（成熟：夏）
Acusilas coccineus Simon 1895　**コガネグモ科**

♀ 約　8 ～　10 mm　♂ 約　5 ～　6 mm

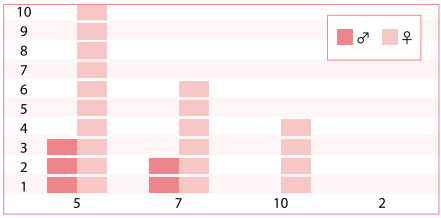
腹部がずん胴形で体色は黄褐色に茶褐色の縦スジがある。【網性】キレ網に似た上側に横糸を欠く円網で，中央に葉を吊り，クモはその中に潜む。林床の下草の間に造網している。網は下半分が大きく，横糸は下の方に多い。網データは縦糸 14 ～ 20 本，横糸 6 ～ 17 本。【卵嚢】葉の中に 1 ～ 2 個作る。産卵期は 7 ～ 8 月。出嚢は 8 月で，62 卵［大利］の記録がある。

＜♀ Photo：腰高＞

♀　　Photo：森田

腹部長は頭胸部の倍程度
体色が黒一色の場合もある

♂　　Photo：谷川



ギンメッキゴミグモ

銀鍍金塵芥蛛 *Cyclosa argenteoalba* Bös.& Str. 1906

コガネグモ科

100 %

擬装円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 3.5 ～ 7 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】垂直網の中心で頭を上にして占座する銀色のゴミグモである。銀色部分（腹部）は変異が多く，銀色と黒色部が半々の個体や，全体黒色のものも見られる。

【習性】都市部の公園から山地まで見られる普通種。網の中心部に直線状の隠れ帯をつける。また，枠糸や縦糸にも白い糸をつける個体も多い。

【網性】多様な隠れ帯をもつ円網で網径 11cm ～ 24cm，縦糸 33 ～ 74 本，ヨコ糸 25 ～ 72 本［船曳］【生活】年 2 化。

【トピック】網は上半分が大きく，刺激に対する反応開始時間は上の刺激に対しては 2.60 秒，下の刺激に対しては 4.79 秒と，上に対する刺激が早かった。ただし，上についた虫は網から落ちやすい［秋元維那・秋元昇］。類似種オオクマギンメッキゴミグモ *Cyclosa okumae* Tanikawa 1992（♀ 5 ～ 6mm，♂ 4mm）は福岡県の標本で記載された小型種だが，北海道と熊本県にも分布，他地域では未記録。

クマダギンナガゴミグモ（成熟：夏）
Cyclosa kumadai Tanikawa 1992　**コガネグモ科**

♀ 約　5 ～　8 mm　♂ 約　4 mm

ギンメッキゴミグモよりも腹部は細長い。山地性でヨツデゴミグモやギンメッキゴミグモより標高の高いところに住む。中部以北に多く，関東南部以南はほとんどギンナガゴミグモ（*Cyclosa ginnaga* Yaginuma 1952 秋田県にはギンナガが分布）。クマダギンナガゴミグモとギンナガゴミグモの区別は難しく，雌雄とも生殖器の構造に依る。
<♀ Photo：千国>

カラスゴミグモ（成熟：春、夏）
Cyclosa atrata Bös.& Str.1906　**コガネグモ科**

♀ 約　7 ～　10 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

全身黒く，網の中心に横向きに占座することが多い。カギヅメカラスゴミグモ *Cyclosa hamulata* Tanikawa 1992 との混同があり，メスの区別は生殖器の内部構造によるため難しい。【生活】オスは成熟すると網を張らず，メスの網に侵入・同居, 宮崎県では 5 月下旬～6 月始めに交尾する。オスは 6 月中旬に姿を消し，メスは 6 月中下旬に産卵 [松山]。【備考】カギヅメはオス触肢の特徴より命名 [谷川]。<♀ Photo：谷川>

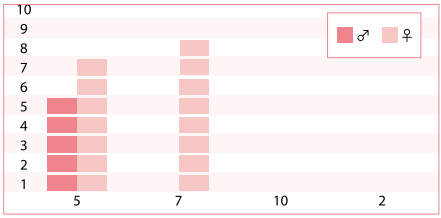
ヤマトゴミグモ（成熟：夏）
Cyclosa japonica Bös.& Str.1906　**コガネグモ科**

♀ 約　4 ～　7 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

類似種があるが，本種の背甲長は背甲幅の 1.1 ～ 1.2 倍。腹部末端は鈍く丸く終わるか後方に細長く伸びて終わる。シマゴミグモでは背甲が細長く，背甲比＝背甲長／背甲幅は 1.3 を超えている。背甲が黒くふち取られているため数値以上に細長く感じられる。ミナミノシマゴミグモでは背甲比は 1.2 ～ 1.3 程度で，オスだけでヤマトゴミグモとの識別はかなり困難。
<♀ Photo：新海>

♀　Photo：森田

♂　Photo：森田



ゴミグモ

塵芥蛛　*Cyclosa octotuberculata* Karsch 1879

コガネグモ科

90%

擬装円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 10 ～ 15 mm

♂ 約 8 ～ 10 mm

【観察ポイント】腹背 2 個，末端に突起が 6 個あり，合わせて 8 個は本種だけの特徴である。

【習性】5 月に成熟する。【網性】網直径 20 ～ 40cm の垂直円網の中央に，メスはゴミ・リボンを付け，その上にじっとしている。【卵嚢】卵嚢をゴミ・リボンに擬装し，下から古い順に並べる（3 ～ 6 個 ,30 ～ 130 卵。300 卵の記録もある）[新海，西野]。母グモは通常はもっとも新しく産卵された卵嚢のそばにいる。【生活】ゴミグモのオスは成熟すると横糸を欠く網を張る。オスはメスを探索し，メスの網に交尾糸を引き，はじいて求愛する。メスを交尾糸上に誘い出して交尾する。福岡市油山の森では幼体の 20%がコブクモヒメバチに寄生され食べ尽くされた [桝元]。

【トピック】網の中央に並べたゴミは，食べかす，脱皮がら，木くず，など網にかかった小さなゴミで作られていて，網を張りかえる時はゴミも一緒に持ち運ぶ。種名のラテン語「八の octo」「小突起 tuberculatum」は腹部形態に由来する。

ヨツデゴミグモ（成熟：春、夏）
Cyclosa sedeculata Karsch 1879　**コガネグモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　4 mm

腹部後端に「ヨツデ」の由来となった 4 個の突起がある。【網性】垂直円網に糸で円を描いたような隠れ帯を付けることが多い。【卵嚢】淡褐色の卵嚢を網中央に上から並べ(3 ～ 5 個, 10 ～ 30 卵)，クモは列の下にいる［新海］。【生活】5 月中下旬にオスはメス網の中心に引いた交尾糸をはじいて求愛。交尾糸上に誘い出されたメスは交尾直後に交尾糸を切る。55 分間に 12 回交尾［池田・谷川］。＜亜成体♂ Photo：腰高＞

ヤマトカナエグモ（成熟：春、夏）
Chorizopes nipponicus Yaginuma 1963　**コガネグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　3 mm

腹部後端には 4 突起があり、ヨツデゴミグモに似るが，頭部がヘルメット状に盛り上がり、胸部が小さい点で異なる。【網性】網を張らずに，造網性種の網に侵入し，宿主のすきを狙って急襲，噛みついて， 捕食する「クモ食い」である。【生活】7 月頃，10cm 程の吊り糸で茶褐色の卵嚢をスギの葉先などに付ける。
＜♀ Photo：安藤＞

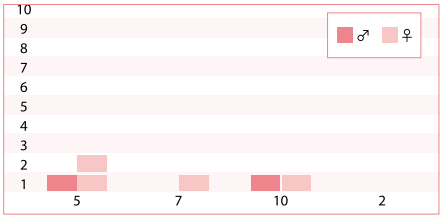
キジロゴミグモ（成熟：夏）
Cyclosa laticauda Bös.& Str.1906　**コガネグモ科**

♀ 約　6 ～　10 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

腹背前方に一対，腹部後方に 4 個の突起がある。腹部を側面から見るとキジロゴミグモのメスは糸疣のあたりから急に細くなる。オスの識別は難しい。【網性】樹林地の周辺，草原，林道などの樹木の枝葉間，草間に垂直の擬装円網を張る。網の中央には縦にゴミを並べて，クモはその中心に止まる。海岸から山地まで広く生息するが，個体数は少ない。
＜♀ Photo：田中和徳＞

♀　Photo：池田

♂　Photo：谷川



ズグロオニグモ

頭黒鬼蛛　*Yaginumia sia* (Strand 1906)

コガネグモ科　住居つき垂直円網

70 %

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 7 ～ 13 mm

♂ 約 7 ～ 10 mm

【観察ポイント】ズグロとは頭が黒いという意味である。夜間，垂直円網を張るのでオニグモ類である。一見カレハヒメグモに似た斑紋なのでよく間違えられる。しかし，眼の中眼と側眼が大きく離れているなどコガネグモ科の眼列なのでヒメグモ科とは異なる。

【習性】橋の欄干や軒下などに多く，駅構内，電話ボックスなどの照明の下に夕方垂直円網を造網する。昼間は呼糸の先の住居に隠れている。造網は古い網を破網しながら進む。ある橋では 8 月 5 日 18：00 には 2 頭だったのが，20：30 には 152 頭が造網していた［八幡秋山］。幼体の間で網の乗っ取りが行われた。乗っ取られた方が小さかった［平松］。【生活】宮崎県での越冬態は幼体・成体・卵，越冬卵は住居巣内にあり，5 月 12 日に孵化，3 ～ 4 日後に脱皮，その 4 日後に分散。卵嚢には橙色卵が 50 ～ 300 卵［石野田］.

【トピック】住居を作るオニグモは小さな管瓶で飼育しやすい。属名は日本のクモ学発展の最大の功労者である故八木沼健夫にちなむ。種小名の sia は女神を意味する。

カレハヒメグモ（成熟：春）
Enoplognatha abrupta (Karsch 1879)　**ヒメグモ科**

♀ 約　6 ～　8 mm　♂ 約　4 ～　7 mm

腹背斑紋はズグロオニグモに似ているし，人工物に造網する点も同じ，くぼみに作る簡易管状住居も似ている。ただし，カレハヒメグモの前眼は一列に並んでいるのに対し，ズグロオニグモは中眼と側眼が離れている。【網性】カレハヒメグモの場合には住居から不規則網が張り出されている。【卵嚢】卵型で不規則網に吊るされている。5 月 7 日から 6 月 11 日まで 7 回産卵した。卵嚢は次第に小さくなる［大利］。＜♀ Photo：安藤＞

ヤマトコノハグモ（成熟：夏）
Enoplognatha caricis（Fickert 1876）　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　7 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

水田や野菜畑に多くカレハヒメグモに生態も形態も類似する。【卵嚢】産卵期は堺市で 6 月初旬と 8 月中旬の 2 化。8 月上旬に亜成体の世代では 7 個産卵 (10 日間間隔で 70 日間)，約 120 卵，卵嚢期間約 12 日。【生活】雌雄とも 5 回脱皮，6 令目に成体となる (卵嚢脱出時を 1 令とした)，メスはふ化後約 63 日で成体，オスは約 58 日で成体［田中穂］。

＜♀ Photo：谷川＞

シロスジ型

フタホシ型

シロスジショウジョウグモ（成熟：春）
Hypsosinga sanguinea (C.L.Koch 1844)
コガネグモ科

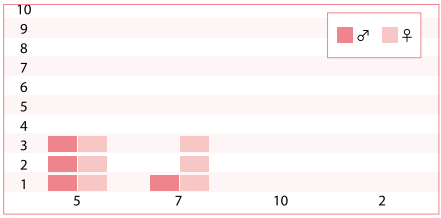
♀ 約　3.5 mm
♂ 約　3 mm

赤色ふた星型が多く，白条型は少ない。【網性】草間・樹枝葉間に小さな円網（約 5 ～ 10cm）を張る。向きも垂直だったり水平だったり色々である。横糸間隔は網が小さい割に広い。身近なクモでありながら生態はわかっていない。

＜シロスジ型♀：新海，フタホシ型♀：谷川＞

♀　Photo：腰高

♂　Photo：池田



♂は赤い斑紋があることで識別できる

ウロコアシナガグモ

鱗足長蛛　*Tetragnatha squamata* Karsch 1879

アシナガグモ科

90 %

水平円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 4 ～ 6 mm

♂ 約 3 ～ 6 mm

【観察ポイント】類似種にエゾアシナガグモがいてメスでは区別できない。メスの腹背は全体に金色が強い。ウロコアシナガグモのオスはエゾアシナガグモと違い，赤い斑紋があることで識別できる。丹沢では 700 m以上の山地帯でも生息する。

【習性】葉裏や葉先に足場程度の小さな水平円網を作り，虫を捕獲する。アシナガグモの仲間の水平円網の中央には円い穴が開いている。このような「開こしき」は造網段階の最後に網の中央に戻ってきたクモがこしきを咬み破ることで作られる。【卵嚢】葉の裏に白色か淡緑色の綿あめ様の 6 ～ 7mm の卵嚢を作る。平均 41 卵, 2.2 回産卵［吉田真］。産卵期は 5 月下旬～ 6 月。

【トピック】虫の捕獲に網を使わないで，つかみ取りする方法はアシナガグモ類にはよく見られる。ハワイ島では狭い地点ごとに網を張らないアシナガグモが種分化していることが知られている。

エゾアシナガグモ（成体：春、夏）
Tetragnatha yesoensis S.Saito 1934　**アシナガグモ科**

♀ 約　6 ～　7 mm　♂ 約　4 ～　8 mm

メスはウロコアシナガグモと区別できないが，オスは腹部背面の赤色部分がないことや上顎が長いこと，触肢の構造で容易に区別できる。ウロコアシナガグモとは分布が重なっているため注意が必要である。【網性】ウロコアシナガグモ同様の小さな水平円網を張る。【産卵】エゾアシナガグモの卵数の記録では神奈川県秦野で 151 卵がある［池田］。＜♂♀ Photo：安藤＞

キララシロカネグモ（成体：夏）
Leucauge subgemmea Bös.& Str. 1906　**アシナガグモ科**

♀ 約　6 ～　7 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

7 月に成熟。【網性】草原，山地の草間に水平円網を斜めに張る。葉裏に荒く糸を張って住居としている［中平］。【瞬間的体色変化】金色の腹部は刺激を与えると瞬間的に褐色に変化する［植村］。金銀色のグアニン結晶を含む細胞（グアノサイト）が筋収縮によって褐色の中腸で隠されることで体色が変化する。このような仕組みはグアノサイトを持つクモでは多かれ少なかれ起こる。
＜♀ Photo：森田＞

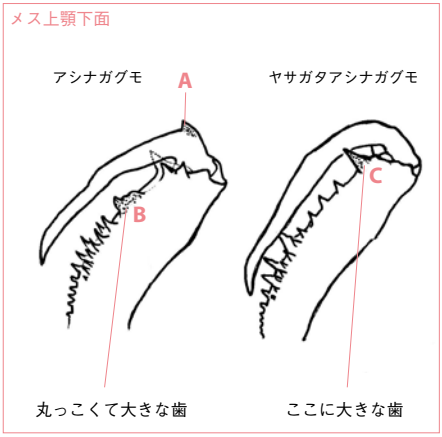
キンヨウグモ（成体：夏、秋）
Menosira ornata Tikuni 1955　**アシナガグモ科**

♀ 約　8 ～　10 mm　♂ 約　6 ～　7 mm

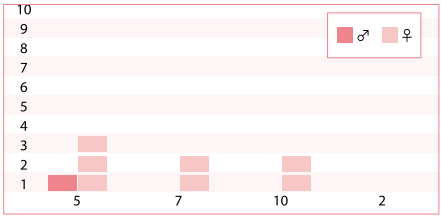
8 月に成熟。里山から山地に分布する。丹沢では 700 m以上の山地帯にも生息する。林道，渓流沿いの樹木の葉裏に見られる。【網性】3 ～ 4 齢までの幼体期は水平円網を張るが，その後は網を張らない［新海］。昼間は葉裏でじっとしているが，夜間，樹葉間に引いた数本の糸で獲物を待ち，近くを通る飛翔性昆虫を長い脚で引きよせ捕食する。また他のクモの網に侵入し，網主を補食している個体もいる［新海明］。
＜♀ Photo：池田＞

♀ Photo：新井

腹背の前方の黒紋が明瞭で後方の黒い線の途切れが少ない
腹部腹面や腹側が黒くない。ヤサガタは腹面が黒褐色



上顎　　原図：谷川を改写



アシナガグモ

足長蜘蛛　*Tetragnatha praedonia* Karsch 1879

アシナガグモ科

70 %

水平円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 8 ～ 14 mm

♂ 約 5 ～ 12 mm

【観察ポイント】腹部は細長い。オスの顎は長い。類似種が多く斑紋や色彩だけの識別は困難。顎が分類の鍵である。腹背の前方の黒紋が明瞭で後方の黒い線の途切れが少ない。腹部の腹面や側面が黒くない。ヤサガタは腹面の黒褐色が特徴。ヤサガタアシナガグモとの識別は難しい。アシナガグモは雌雄ともに牙の基部に A の突起があり，メスの顎には乳房状の大きな歯 B があることで識別できる。

【習性】水田や川辺に網の中央に円く穴の開いた水平円網を張る。横糸の間隔は比較的広い。水面から羽化してくる水生昆虫を捕獲している。【生活】アシナガグモの 6 月 26 日出嚢幼体は約 2 ヵ月弱で成熟した。アシナガグモは世界中に広く分布する世界共通種。空中分散能力が高いためである。

【トピック】種名にラテン語由来の「略奪する praedo」が使われているが，実際によく他個体や他の円網種の網に侵入し餌を略奪しているのが観察される。

ヤサガタアシナガグモ（成熟：夏）
Tetragnatha maxillosa Thorell 1895　**アシナガグモ科**

♀ 約　7 ～ 14 mm　♂ 約　4 ～ 10 mm

アシナガグモに比べて腹背後方の黒紋は途切れがちで，腹部腹面は黒褐色である。湿地を好む傾向がある。アシナガグモとの共存域ではヤサガタアシナガグモは足場として草を使う割合が高いため，より低位置 (10 ～ 50cm) に造網する [吉田真]。【卵嚢】平均 114 卵，産卵 2.7 回，総卵数 310 個。アシナガグモと比較して小卵多産型である [吉田真]。
＜♀ Photo：森田＞

シコクアシナガグモ（成熟：春、夏）
Tetragnatha vermiformis Emerton 1884　**アシナガグモ科**

♀ 約　7 ～ 11 mm　♂ 約　5 ～ 10 mm

アシナガグモよりやや小さい黄色系のアシナガグモである。草間に足場により水平から垂直までいろいろな角度に円網を張る。成体は 5 ～ 8 月 [新海]。ウンカの日捕食量は 10 ～ 13 頭と報告されている。イネ株上を飛びかうニカメイガ，フタオビコヤガ，コブノメイガ，ウンカ，ヨコバイ類，アブラムシ類などイネの主要害虫を捕食する。5 月下旬～ 7 月上旬に産卵する（平井一男「天敵大事典」）。　＜♀ photo：谷川＞

ハラビロアシナガグモ（成熟：夏）
Tetragnatha extensa (Linnaeus 1758)　**アシナガグモ科**

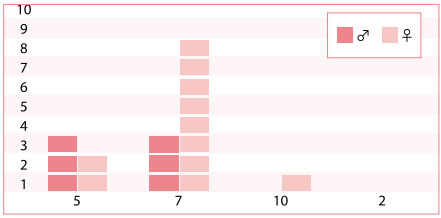
♀ 約　8 ～ 12 mm　♂ 約　5 ～ 9 mm

水田の水路を好み，河川や山際水路でも出現するが，山地渓流には生息しない [吉田真]。本州では高地で見られる [新海]。
他に細長い体のアシナガグモ科では，ウロコアシナガグモ（54 頁）やシロカネグモ属（98 頁）などがよく見られる。交尾の際にオスの顎はメスの顎を抑える。
＜♀ photo：谷川＞

♀　　Photo：安藤

肩下が高く盛り上がる（ウズグモ類の特徴）
背甲・腹背の色が薄い背甲中央に白い線条

渦状の隠れ帯　　Photo：石田



カタハリウズグモ

肩張渦蛛　*Octonoba sybotides* (Bös.& Str. 1906)

ウズグモ科

90 %

擬装円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 4 ～ 6 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】ウズグモ類ではもっとも普通種である。「肩張」という特徴はウズグモに共通である。ウズグモに比べて色が薄い。

【習性】越冬世代が 5 月，夏世代が 7 月に成熟，夏世代は小さい。一腹卵数は母親の体重と相関し，30mg で 100 卵ほどになった［渡部］。幼体とオスはシート状円網（横糸がなく，縦糸間にこまかい糸を張りつめたもの）を張る［新海明］。丹沢では上限が標高 610 m で，ほぼクサグモと同じである。篩板類で円網を作るが，オス成体では篩板糸線が消失する。網を利用しての餌が採れなくなると思われる。

【トピック】毒線をもたないため，虫を麻痺させることは出来ない。網で捕えた虫をラッピングして動きを止める。ウズグモの糸腺にはコガネグモ科にある鞭状腺や集合腺がなく，代わりに偽鞭状腺・篩板腺・側篩板糸腺がある。篩板糸円網の横糸には粘球がなく，縮れた糸を丸めたパフがあり，虫にからむ。ラップした虫を頭の先にしばらく持つ習性がある。飼育実験下ではキイロショウジョウバエを捕食したが，野外でどんな種類の虫を捕獲しているのかは調査されていない。

ウズグモの隠れ帯の二型と機能

ウズグモ類の隠れ帯には渦状と棒状の二型がある。その意味が分かったのは近年であった。観察と実験により，棒状の帯より渦状の帯のほうが縦糸の張力を増して微小な振動を検知しやすくしており，かかった虫への反応が早いことが分かった。餌が少なく飢えているクモは渦状の帯を付け（横糸間隔狭く），小さな餌も逃さない。飽食のクモは棒状の帯を付け，大型の餌を狙う［渡部］。

＜棒状の帯 Photo：腰高＞

ウズグモ（成熟：春、夏）
Octonoba varians (Bös.& Str. 1906)　**ウズグモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

属の変更に伴いウズグモからヤマウズグモへの改名が提唱された。カタハリウズグモに比べて黒っぽい場合が多いが識別は困難。都市部より山地，乾燥地より湿地に見られる。類似種のトウキョウウズグモ *O.sinensis* (Simon 1880)（♀ 4 ～ 6mm，♂ 4 ～ 5mm）は都会や市街地の建物の周囲に多く，山地にはみられない。外雌器の形態図は左からカタハリ・ウズ・トウキョウ［吉田哉原図を改写］。

＜♀ Photo：谷川＞

エゾウズグモ（成熟：夏）
Octonoba yesoensis (S.Saito 1934)　**ウズグモ科**

♀ 約　5 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

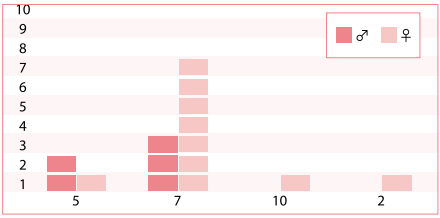
腹部中央の高まりはかなり高く，側面からは腹部が三角形のように見える。体色は灰色から黒色まで変異が多い。エゾという名称に関わらず，北海道から山陽地方まで分布する。ウズグモにはエゾウズグモのように分布の広い種ばかりでなく，タカラジマウズグモやイヘヤウズグモ，ミヤコウズグモ，クメジマウズグモ，センカクウズグモなど島固有の分布をする種もある。

＜♀ Photo：新海＞

♀　　Photo：森田

腹部は箱形で黒色の
点斑が全身にある

卵嚢　　Photo：千国



センショウグモ

戦勝蛛　　*Ero japonica* Bös.& Str. 1906

センショウグモ科　　網へ侵入しクモ食い

100 %

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 4 ～ 5 mm

♂ 約 3 mm

【観察ポイント】腹部は箱形で黒色の点斑が全身にある。クモ本体がいなくとも卵嚢はよく見られる。

【習性】他のクモの網に侵入し，その主を攻撃し，補食する。主に網を張るクモを襲う。ヒメグモ科，サラグモ科，コガネグモ科のクモがよく襲われる。クモの網に入ると，ゆっくりと網主に近付く。網主が気づいて向かってくると，前 2 脚を高く持ち上げ，相手の脚を防ぎながら，頭胸部の下面にまわりこんで，基節付近にかみつくことが多い。ヒメグモ科のクモは投げつけ粘糸をかけてくるが，粘糸が前脚にかかっても気にせず，突進して捕らえる。【卵嚢】5mm 程の黄褐色の卵嚢を雨の当たらない場所へ吊るす。産卵 5 月下旬～8 月。20～35 卵[新海]。

【トピック】「戦勝」は岸田久吉による日露戦争の勝利に因む命名である。同様の戦勝祈願の命名には植村利夫による日中戦争勝利のカチドキナミハグモがある（1938 年）。センショウグモの属名の「ero」はラテン語の「放浪者 erro」か「詰め篭 aero」の意味だろう。

ムナボシヒメグモ（成熟：春、夏）
Platnickina sterninotata (Bös.& Str.1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　3 mm　　♂ 約　3 mm

腹背に肩から始まるハート形の黒い紋様が見える。背甲中央にも黒い縦条がある。ハート形の黒紋の下方は左右に広がらずに中央で合わさりそうになっている（中図左）。生息市街地の森林の最優占種でかん木の間や葉上に生息，【網性】足場程度の網しか張らずに，クモ食いである。【生活史】オスは 5 月下旬から 6 月下旬，メスは 6 月下旬に多い。オスは 8 月下旬には見られない。産卵期 6 月，越冬態は幼体。<♀ Photo：新海>

サトヒメグモ（成熟：春）
Platnickina mneon (Bös.& Str.1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　4 mm　　♂ 約　2 ～　3 mm

腹背の肩からのハート型の模様は下側で左右に開いて「割れたハート」になっている（中図右）。ムナボシヒメグモと間違えやすい。【網性】足場程度の網しか張らずに，クモ食いである。【卵嚢】白っぽい暗赤色で 10 月 15 日と 12 月 1 日に産卵された [熊田]。【トピック】クモ食いグモ同士を競わせた実験ではムナボシヒメグモが最強だった [加藤む]。
<♀ Photo：新海>

クロマルイソウロウグモ（成熟：夏）
Spheropistha melanosoma Yaginuma 1957　**ヒメグモ科**

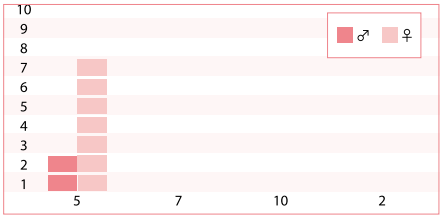
♀ 約　3 mm　　♂ 約　2 ～　3 mm

捕食後に腹部は丸くなる。空腹時の腹部は細長い。【網性】足場程度の網しか張らずに，オオヒメグモやカグヤヒメグモ，ヒメグモの網に侵入し，網主や卵嚢から出嚢する子グモを食べつくす。ジョロウグモの網に居候した例も記録されている。【卵嚢】高知県で 7 月，シロカネイソウロウグモの卵のうを少し大きくし，赤褐色にしたような卵のうを宿主の網に吊るす [中平]。【分布】南方種だが，北上しつつある。<♀ Photo：谷川>

♀　Photo：森田

腹背，腹側面に黒点が並ぶ
（点はつながらない）

♂　Photo：新井



ユノハマサラグモ

湯の原皿蛛　*Turinyphia yunohamensis* (Bös.& Str. 1906)

サラグモ科

80 %

ドーム型皿網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 4 ～ 6 mm

♂ 約 4 ～ 6 mm

【観察ポイント】腹背中央に縦に黒斑が並ぶのが明瞭。サラグモ類は体のサイズを小さくして空中分散能力を高めたり，成長コストを低下させて増殖力を高めたものの，オスの触肢は小型化に限度があったため，体に比べて大きいままである。

【習性】早春に成熟する。【網型】枝先にドーム型の皿網（直径約 10 ～ 15cm，深さ約 1 ～ 5cm）を張り、ドームの天井の下にクモがいる。サラグモの皿網には円網種のような粘球がないし，篩板糸もないので，接着力はない。腹部の糸腺には円網種の横糸をつくる鞭状腺や粘球をつくる集合腺があり，研究例は少ないが，皿網のシート部や迷網部に鞭状腺糸が使われているし，集合腺分泌物も糸に塗られるものの，すぐに乾いてしまい，接着力は無くなってしまう。皿網では，これらの糸腺の糸は交差する糸の補強や網の安定性の増強に役立っているようだ。【越冬態】亜成体，4 月に成熟する。オスの出現期間は短く 10 日間前後で姿を消す［新海］。

【トピック】ユノハマは基準産地の佐賀県湯の原（ユノハル）の綴りを間違えたもの。

アシナガサラグモ（成熟：夏）
Prolinyphia longipedella (Bös.& Str. 1906)　**サラグモ科**

♀ 約　5 ～　7 mm　♂ 約　5 ～　7 mm

ユノハマサラグモは春のクモだが、アシナガサラグモは夏の山地の代表的なクモ。自然度の高い平地林から山地に生息。【網性】ドーム網（直径 10 ～ 15cm，深さ 5 ～ 8cm）はユノハマサラグモより深い。成熟 7 月。【求愛】南陽市で 6 月 2 日昼どき，雌雄同居網で求愛・交尾を観察。15 分間に 180 回交尾。更に 2 時間交尾は続いた [錦]。
＜♀ Photo：森田＞

ヘリジロサラグモ（成熟：夏）
Neriene oidedicata (Helsdingen1969)　**サラグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

【網性】都市部の公園から山地まで広く生息。草間の地表付近に皿網を張る。皿網はシート状に張られる。直径 8 ～ 15cm。【求愛】神奈川県愛川町にて求愛・交尾行動を観察（8 月 17 日）。2 時間かけて二度交尾した [諏訪]。【卵嚢】幼体 100 頭余 [安藤]。
＜♀ Photo：浅間＞

コウシサラグモ（成熟：夏）
Neriene clathrata (Sundevall 1829)　**サラグモ科**

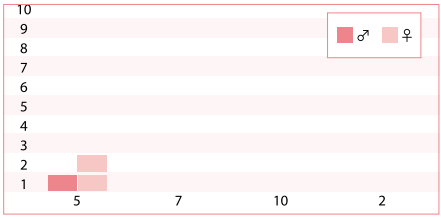
♀ 約　3 ～　5 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

ヘリジロサラグモは都会に見られるが類似種コウシサラグモは山地に生息する。個体数は少ない。【網性】林道，樹林内の下草の根元付近，落葉間，崖のくぼみ，倒木や石の間などにシート網を張り下面に静止する。腹部黒色が薄く斑紋が格子状に見える。
＜♀ Photo：安藤＞

♀　　Photo：森田

腹側は茶色。ムネグロサラグモも同じ紋様だが，本種はやや輪郭がぼける

ムネグロサラグモ♀　　Photo：高野



クスミサラグモ

クスミ皿蛛　*Neolinyphia fusca* Oi 1960

サラグモ科　　ハンモック型の皿網

20 %

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 3 ～ 5 mm

♂ 約 3 ～ 5 mm

【観察ポイント】網を見るとクモが判定できる。ただし一か月遅れで成熟するムネグロサラグモが同所に生息することが多い。

【習性】枯れ枝先端に網を張るため，春先の山道の樹木の萌芽期に成熟する。成熟は 4 月。【求愛】求愛・交尾は三重県での報告があり，交尾途中で精液が不足すると，精網を作って補充し，交尾を続ける［貝発］。北米の近似種の Bowl and doily spider（網の形をボウルとドイリーと表している）では，オスの短い生涯や亜成体メスをめぐるオスどうしの闘争がゲーム理論で解析されている。【卵嚢】サラグモ類は卵嚢不明種も多いが，本種は飼育下で卵嚢が確認されている。5 月 13 日産卵の卵は 5 月 21 日ふ化，5 月 23 日 2 令，5 月 28 日出嚢 32 頭［鈴木勝］。

【トピック】あまり敏捷でない虫，蚊，ガガンボ，カワゲラ，カゲロウ，アリマキが餌となる［新海明］．丹沢大倉では 4 月下旬に交尾の最盛期，5 月下旬にオスは消失していて，似た模様のオスはすべてムネグロサラグモだった。平地では珍しい。

クスミサラグモ・ムネグロサラグモの
ハンモック型の皿網

網はハンモック状でハンモックの底が所々下側に引っ張られて突出し，下のシートに結びつけられているのが特徴で，逆吊りテントといった感がある。網の上側には複雑に糸が引き回されていて，飛んできた虫がこの糸にぶつかって網の底に落ちる。クモは網の底の下側に仰向けの姿勢で陣取り，網越しに虫を捕らえる。オスの寿命は短くメスの網を探して求愛する。繁殖期は短い。

＜ムネグロサラグモの網 Photo：安藤＞

ツリサラグモ（成熟：春、夏）
Neolimyphia japonica Oi 1960　**サラグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

山道で見られ, 平地では珍しい。【網性】ハンモック型の皿網（直径 5 ～ 7cm，深さ 2.5 ～ 4cm）を張る。網の底の内側で腹背を上に向けて待ち伏せしているのでクスミサラグモなどと区別できる。ツリサラグモの網は下向きの突出がほとんど無く滑らかである。【求愛】5 月 28 日交尾（八王子市），7 月 27 日に雌雄同居（秩父市）[池田，新海明]。

＜♀ Photo：安藤＞

ハンモックサラグモ（成熟：夏）
Neolimyphia angulifera (Schenkel 1953)　**サラグモ科**

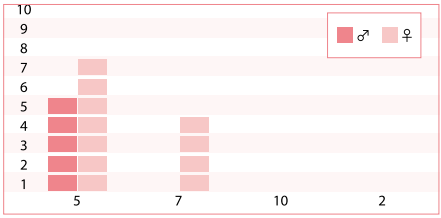
♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

北海道以外では 700m 以下の地域ではほとんど見られない。山地性のクモ。ハンモック型の皿網を張る。ハンモックサラグモをヤガスリサラグモ *N.albolimbata* (Karsch 1879) と混同する例があるが，ヤガスリサラグモはヘリジロサラグモに似たシート型の皿網を張る点で区別される。ハンモックサラグモは積雪上で採集されるクモとして記録が多い [新海明]。ハンモックサラグモの腹背紋様は網目が明瞭 [安藤]。＜♀ Photo：安藤＞

♀　　Photo：新海

腹背面に網目模様

卵嚢を作る　　Photo：新海



バラギヒメグモ

蔷薇木姫蛛　*Takayus chikunii* (Yaginuma 1960)

90 %

ヒメグモ科　　テント状不規則網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 4 ～ 5 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】腹背には独特の網目模様がある。出現時季と模様で見分けることが出来る。類似種ヒロハヒメグモとの識別点はバラギヒメグモは糸疣周辺に黒点が 3 個なのに対し，ヒロハヒメグモは糸疣周辺が黒環で囲まれることである（図参照：八木沼による）。

バラギヒメグモ　　ヒロハヒメグモ

【習性】春に都市部から高山まで広く生息。【網性】庭木の間などに簡単な住居を作り，そこからシート網と不規則網を合わせたような「テント状不規則網」を張り出す。【卵嚢】産卵 5 ～ 8 月。白色球形（3.5 ～ 5.5mm 大），メスは糸疣につけて運ぶ。

【トピック】種小名（*chikunii*）は長野県のクモ研究者千国安之輔に因む。和名は最初にバラの木で採集されたことから付けられた。千国氏（故人）は 1980 年代に偕成社から『写真日本クモ類大図鑑』を始め，『クモの一生』『クモたちの狩り（上下）』『クモの親と子』『オトシブミ』といった名著を刊行したが，これらのほとんどが絶版・入手不能である。

ヒロハヒメグモ（成熟：春）
Takayus latifolius (Yaginuma 1960)　**ヒメグモ科**

♀ 約　5 ～　6 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

バラギヒメグモよりやや大きい。平地から山地まで広く生息する。糸疣の周辺は黒環で囲まれる。【網性】木の枝, 葉裏に不規則網を上部に持った平面的な網をはり，不規則網の上に簡単な占座箇所を作るテント網を作る。【生活】バラギヒメグモが姿を消す 10 月中旬頃に交替に現れる。越冬態は幼体または亜成体。
<♀ Photo：千国>

タカユヒメグモ（成熟：夏）
Takayus takayensis (S.Saito 1939)　**ヒメグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　3 mm

北海道では平地から山地まで広く分布し，本州では 600m 以上の山地に生息。腹部背面後方に 4 個の黒点が横に並ぶ。【網性】樹木の枝や葉裏，草の葉裏に不規則網を張る。【卵嚢】メスが白色球形（3 ～ 4.5mm）の卵嚢を口にくわえている。産卵は 8 ～ 9 月［新海］。
<卵嚢と♀ Photo：千国>

♀

亜成体♂花粉食

アシブトヒメグモ（成熟：春、夏）
Anerosimus crassipes Bös.& Str. 1906　**ヒメグモ科**

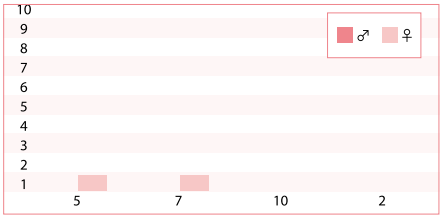
♀ 約 3 ～ 5 mm　♂ 約 3 ～ 4 mm

アシブトはオスの脚の特徴から名付けられた。腹背中央の連続する斑紋が特徴。【網性】海浜部の樹木に特に多く，目のこまかい不規則網を張る［新海］。【生活】越冬世代と夏世代の年二化である。オスは 6 月下旬から 1 ケ月間は観察されない［谷川］。石野田辰夫の観察の通り本種は花粉食いをする［浅間］。6 月 10 日に求愛行動・交尾行動を観察［高橋祐］。母親は捕えた餌を子グモに与える［新海明］。
<♀ Photo：池田，亜成体♂：浅間>

♀　　Photo：谷川

背甲が緑色
球形だが腹端が尖る

ヤホシヒメグモ　　Photo：谷川



ホシミドリヒメグモ

星緑姫蛛　*Chrysso foliate* (L.Koch 1878)

40 %

ヒメグモ科　　垂糸付不規則網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 4 ～ 5 mm
♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】斑紋変異が多い。緑色型，白色型，黄色型，橙色型，赤色型，緑白色型，黒色の条を持った型など。腹部の色の一部は捕食した餌の体液による。小笠原幸恵は飼育下のヤホシヒメグモ幼体の腹部が赤いハダニや双翅類を食べると赤に，緑色のアブラムシでは緑色・黄緑色に変化したと報告。平松毅久はアオバハゴロモを捕食したヒメグモは緑色になると言う。池田は母親と同居したヒメグモ幼体が虫の捕食後に黄色から褐色になることを観察している。また，黄色と赤色は同じ色素キサントマチンの酸化型と還元型である。

【習性】亜成体越冬し，5 月に成熟。産卵期は 6 月。【生活】80 ～ 90 頭の出嚢幼体と同居する母グモにハエを与えると，母が捕食して後，5 ～ 6 頭の子グモが一緒に捕食する［新海明］。

【トピック】出現率は 40％だが，平地に少なく丘陵性だからである。ヤホシヒメグモ *Chrysso octomaculata* (Bös.& Str. 1906)（♀ 2 ～ 3mm，♂ 2mm）は分散力が大きく，水田，草原によく見られる。

コガネヒメグモ（成熟：夏）
Chrysso scintillans (Thorell 1895)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　8 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

【網性】広葉樹やササの葉裏に粘性のない不規則網とそこから垂下する粘性をもつ糸を張る。丘陵～山地に生息するクモで平地には少ない。【生活】母親の子グモへの吐き戻し給餌が日本で最初に確認された種。吐き戻し給餌は母親が消化してミルク状になった餌（スパイダー・ミルク）を同居する子グモに口移しで与える行為。出のう直後は吐き戻し給餌，その後親が採った餌を子グモが捕食，分散まぎわには親と共同で餌捕獲をする。子グモが母親を捕食することもある。産卵期は 7 ～ 8 月，子グモは 70 頭ほど [新海明]。子グモの保護のコストとベネフィットを評価すると，保護した場合には子グモの成長率と生存率が高い一方，母グモの体重は顕著に減少した [長崎]。ヒメグモでは餌を食した子グモの体色が黄色から茶色に変わるので，餌を食べた子と食べない子を識別できる。コガネヒメグモでも識別可能だと思われる [池田]。＜♀と卵嚢 Photo：新井＞

ギボシヒメグモ（成熟：春、夏）
Chikunia albipes (S.Saito 1935)　**ヒメグモ科**

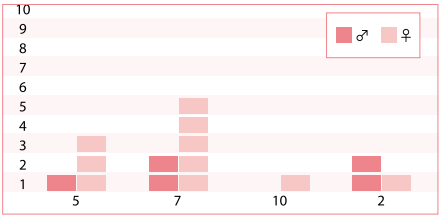
♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　2 mm

【網性】不規則網の部分は住居で，夜間に粘性のある垂糸網を張り、朝方取り壊す。【生活】産卵期は 6 月上旬と 8 月上旬，出嚢までは 14 ～ 21 日間，分散まではさらに 10 ～ 14 日間を経過する。母子の同居中，母子による集団餌捕獲，吐き戻し給餌を観察した [新海明]。8 月 12 日の出嚢幼体を飼育，3 回脱皮して 9 月 8 日に親になった [加藤む]。＜♀と卵嚢 Photo：腰高＞

ギボシヒメグと同等の大きさのヤホシヒメグモでは，卵嚢中の卵数が平均 16.4 個，出嚢から成熟まで平均 19.5 日，サヤヒメグモ *Coleosoma blandum* O.P.-Cambridge 1882 では 1 メスが産んだ 8 個の卵嚢の平均卵数が 8.6 卵，出嚢から成熟まで 24.1 日という小笠原幸恵による記録がある。

♀　Photo：石田

♂　Photo 池田



ウヅキコモリグモ

卵月子守蛛　*Pardosa astrigera* L.Koch 1878

コモリグモ科

100 %

草間徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 6 ～ 10 mm

♂ 約 5 ～ 9 mm

【観察ポイント】コモリグモの識別は難しい種類が多いが，明瞭な特徴のある種もいくつかある。そのひとつが本種。雌雄ともに背甲中央にT字模様がある。これがI字形の中形種はハリゲコモリ類，I字の大形種はハラクロコモリグモ（73頁），Y字型の小形種はキバラコモリグモ属である（119頁）。ウヅキコモリグモのオスはさらに第1脚しょ節に立毛の束がある。

【習性】卵月は陰暦四月を表す。実際には越冬亜成体が初春に成熟，2月から成体が見られる。夏世代はやや小さい。網を張らずに草間を徘徊する。生息地では多数徘徊。【卵嚢】母グモに運ばれ，内部の発育が進むと緑色に変化する。モナカ状の継ぎ目を母親がかみ破る。出嚢した子グモは，卵嚢内で二度の脱皮を終えた3齢である（多くのクモは2齢で出嚢）。【子育て】4月産卵された夏世代は産卵後約24日で出嚢，7日間母グモの背中で暮らす。その後6回脱皮し，7月中旬成体。8月産卵された越冬世代は約18日で出嚢，5日間まどい，その後7～8回脱皮して，亜成体で越冬［鈴木勝］。餌が少ないと脱皮回数が増え，発育期間も長くなる。

ハリゲコモリグモ（成熟：春、夏）
Pardosa laura Karsch 1878　**コモリグモ科**

♀ 約　4 ～　7 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

ハリゲコモリグモ類はメスでは識別できない。オスの触肢腿節にある白毛の有無である程度見当をつけることが出来る。関東では触肢が真黒ならばイナダハリゲコモリグモ，白毛があればハリゲコモリグモかハタハリゲコモリグモである．さらに前脚腿節下半部が黒ければハタハリゲコモリグモの可能性が高い。
<♂ Photo：池田>

イナダハリゲコモリグモ（成体：春、夏）
Pardosa agraria Tanaka 1985　**コモリグモ科**

♀ 約　5 ～　8 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

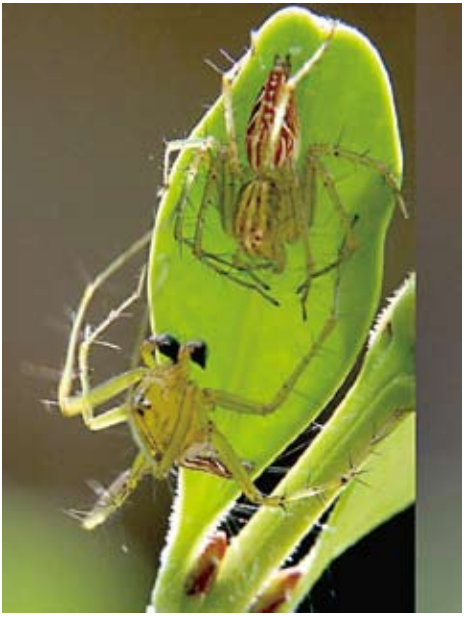
水田に多い。脱皮が夏世代はオス 5 回，メス 5 ～ 6 回。越冬世代はオス 7 ～ 9 回，メス 8 ～ 9 回 [宮下]。<♂ Photo：安藤>

■ウヅキコモリグモの生活史
ウヅキコモリグモでは夏世代を短日条件で飼育するほど脱皮回数が増え，成熟までの日数が増加した。16L で 90 日，12L で 144 日，8L で 126 日 [浜村]。卵嚢内の卵数はウヅキでは 40 ～ 140 卵 [田中穂]。

キクヅキコモリグモ（成熟：春、夏、秋）
Pardosa pseudoannulata (Bös.& Str. 1906)　**コモリグモ科**

♀ 約　7 ～　12 mm　♂ 約　6 ～　8 mm

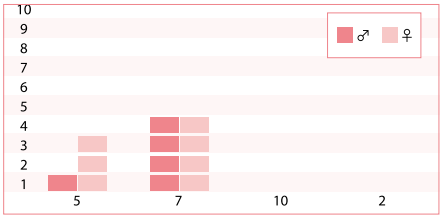
菊月は陰暦九月である。背甲に特異な紋様があり，胸板の縁にそって 3 対の黒点がある。この黒点は幼体にもあり，識別に役立つ。【生活】年 2 ～ 3 世代，幼体で越冬。京都市では 5 ～ 11 月に卵嚢保持のメスが観察された [飯田・藤崎]。25℃での卵嚢期間は約 20 日，幼生発育期間は約 50 ～ 80 日。メスは 3 ～ 6 回産卵し，1 卵嚢内の卵数は 30 ～ 120 卵 [田中幸]。
<♀ Photo：千国>



♀（上）♂（下）　Photo：石田

腹側面と腹背中央に赤茶色の紋様。脚は緑色

ササグモ卵嚢保護　Photo：千国



ササグモ

笹蛛　*Oxyopes sertatus* L.Koch 1878

ササグモ科

80 %
草間徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬
♀ 約 9 ～ 11 mm
♂ 約 7 ～ 9 mm

【観察ポイント】脚と全体に刺毛が目立つ。背甲中央に二条の縦条がある。

【習性】夜間は葉の裏にとまっている．昼間活動して，ハエ，カ，カノコガ，カゲロウなどの昆虫を捕らえる。5 月に成熟，【卵嚢】6 月～ 9 月に葉上に白色の卵嚢を作り，親が保護している。40 ～ 70 卵。ツヤクロジガバチに狩られる。

【トピック】交尾後，オスがメスの外雌器の一部を外して交尾栓とすることがある。オスの触肢の先は黒い。笹の葉に似ていると の連想から命名された。類似種にコウライササグモがいる。【生物農薬】スギの害虫スギタマバエの防除にササグモが有効利用できるとの研究報告がある［萱嶋］。対照区に比べて 60% 余の効果があったという。クモの生息場所とスギタマバエの生活の場（林の周辺）と一致するし，捕食選好も適当である．ササグモはかみついては次々に捕獲するのでハエを殺処理することが可能である．また，農薬に対して敏感で退避が早いこと，人工増殖ができることなどが利点である。

コウライササグモ（成熟：春、夏）
Oxyopes koreanus Paik 1969　**ササグモ科**

♀ 約　4 ～　9 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

宮城県から宮崎県まで全土に局所的に分布。ササグモより小形で体色は淡いが，形態や斑紋での区別はできず，雌雄とも生殖器での識別を必要とする。【備考】コウライは韓国で記載された種であることにちなむ。<卵嚢保護♀ Photo：安藤>

ササグモ
3: 触肢／ 5: 外雌器
コウライササグモ
6: 触肢／ 8: 外雌器

クリチャササグモ（成熟：春、夏、秋）
Oxyopes licentineus Schenkel 1953　**ササグモ科**

♀ 約　8 ～　9 mm　♂ 約　6 ～　7 mm

斑紋が茶褐色のササグモである。山地の樹林地や草原に生息。マツやスギなどの針葉樹林地内に局地的に多産する地域もある。草や木の葉上，葉裏に潜み，獲物が近づくのを待つ。幼体はササグモによく似ている。1000m 以上の山地ではササグモより多くなる。【生活史】成熟期は 5 ～ 7 月。年 1 化と考えられるが，春 (4 ～ 5 月) と秋 (9 ～ 10 月) に成体が多く見られる。7 ～ 10 月上旬に卵嚢を保持する［松井］。<♀ Photo：安藤>

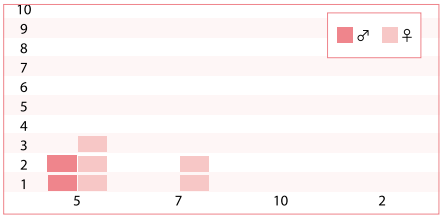
シマササグモ（成熟：夏）
Oxyopes macilentus L.Koch 1878　**ササグモ科**

♀ 約　9 ～　13 mm　♂ 約　9 ～　10 mm

ササグモより大きく、腹背に途切れの無い縦条が入る。オスの脚は黒い。南方系のクモで，四国・九州においても南部に多く分布する。ササグモと同じような環境（庭園の草木の葉上, 草原, 水田, スギ林，林道の草間など）に生息，平地から山地まで広く分布するが，柑橘類の果樹園，植林地などにも多い。8 月，葉上に白色扁平の卵嚢を作り，母親はその上で保護する。刺激すると腹部の白色部が灰色に変化する。<♀ Photo：谷川>

卵嚢と♀　　Photo：浅間

♂亜成体ヤマジ型　　Photo：池田



背甲中央の条は頭の外まで突き出る
背甲は円形に近い

アズマキシダグモ

東岸田蛛　*Pisaura lama* Bös.& Str. 1906

キシダグモ科

90 %

草間徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 8 ～ 12 mm

♂ 約 8 ～ 12 mm

【観察ポイント】背甲中央の縦条は頭の前へ突き出る。背面の模様には多様な変異があり，以前は別種とされた。

【習性】5 月中旬に成熟，繁殖期は 6 月。求愛オスはハエ等を糸でまいてギフト（贈り物）としてメスへ差し出す習性がある。このようなオスの行動を婚姻贈呈と呼ぶ。メスが贈呈された餌を食べている間に交尾する。数 10 秒から数分でオスの触肢は左右を交替する。交尾はギフトがある限り続き，4 ～ 5 時間かかることもある。メスはオスが餌を持っている間はギフトを受け取る。交尾終了後にメスは餌を食べる。ギフトを持たないオスは交尾できないとされていたが，ヨーロッパ種の実験ではギフトを持たないオスも 40%は交尾できた。

【トピック】オスは鱗翅目幼虫を糸でラップしなかった。ギフトの大きさにより交尾時間が変わり，2 時間以上交尾することもあったが，精子量は交尾の初期に十分な量が移精されていた。近縁種のハヤテグモ *Perenethis fascigera* (Bös.& Str. 1906) も婚姻贈呈を行うことを発見した。婚姻贈呈をするクモは世界でも例が少ない［板倉泰弘］。

＜上段タテスジ型：池田，　キスジ型♀：高野，　黒点型：新海＞
＜下段　マダラ型：新海，　アズマ型：高野＞

アズマキシダグモの色彩変異

アズマキシダグモの変異型は，以前はヤマジキシダグモやキスジキシダグモという別種として記載されていた。生殖器の構造が共通で色彩や斑紋以外に相違点がないことから，八木沼健夫により同種の色彩変異とされた。同種と判断されたことによって，多型への興味も関心も薄れているが，多型を維持するしくみには焦点を当て直してみてもよい分野だと思われる。

アオグロハシリグモ（成熟：夏）
Dolomedes raptor Bös.& Str. 1906　**キシダグモ科**

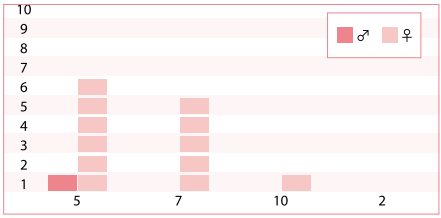
♀ 約　22 ～　16 mm　　♂ 約　11 ～　14 mm

都市部の下水道，河原，渓流付近など水辺を徘徊する。他のハシリグモ類と比較すると体色が黒っぽく，荒々しい印象がある。【生活】出生後，オスは 2 年目に成体になるが，メスでは 2 年目に成熟する個体，亜成体後期に越冬し 3 年目に成熟する個体，亜成体後期に脱皮 5 回，越冬を二度行って 4 年目に成熟する個体などバラつきがある［中平］。

＜♀ Photo：初芝＞

♀　　Photo：荘司

スジシャコグモ♀　　Photo：谷川



シャコグモ

蝦蛄蛛　*Tibellus japonicus* Efimik 1999

エビグモ科

100 %

草間徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 7 ～ 10 mm

♂ 約 5 ～ 7 mm

【観察ポイント】特異な細長い形態で識別は容易。類似種のスジシャコグモ *Tibellus oblongus* は山地性・北方系のため分布が限られる。シャコグモはスジシャコグモと分布が重なり，平地から標高 800m まで分布する。昼間に葉裏で休息しているコガネグモダマシが，シャコグモに間違えられる。

【習性】平地から山地まで広く生息。草原，水田の周囲，河原，樹林地の周辺，林道などの草や低木の葉上，茎や枝上に静止して，接近してくる小昆虫を捕える。不規則網内の吊り鐘状住居の中にいるオオツリガネヒメグモを捕食した記録がある［池田泉］。【生活】5 月に成熟。8 月頃，草葉上面に産卵し，卵嚢を保護する。

【トピック】スジシャコグモ *T. oblongus* の種小名のオブロングスはラテン語の「細長い」という意味である。和名は海産の節足動物シャコの細長い体形の印象から命名された。岸田久吉はエビグモ科の中の属名にはエビ（海老）グモ属・ヤドカリ（宿借）グモ属・シャコ（蝦蛄）グモ属と海産の節足動物名を付けた。

ヤドカリグモ（成熟：春、秋）
Thanatus miniaceus Simon 1880　**エビグモ科**

♀ 約　5 ～　7 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

成体は 10 ～ 6 月。全体灰白色で，腹部前方の心臓斑の位置にある長菱形の黒色斑が目立つ。頭胸部両側には幅の広い黒色斑があるが，個体により濃淡が見られ，全体灰色のものもいる。オスは特に腹背中央のヒシ形が目立つ。網を張らずに草上を徘徊するが，秋冬には落葉上を歩くことが多い［新海］。局地的に多産することがある。産卵は 5 ～ 6 月［山川・熊田］。

＜♂写真：安藤＞

ヤマトヤドカリグモ（成熟：夏、秋）
Thanatus nipponicus Yaginuma 1969　**エビグモ科**

♀ 約　6 ～　8 mm　♂ 約　5 ～　6 mm

成体は 8 ～ 4 月。全体灰褐色であるが，頭胸部の両側，腹部前方の心臓斑，後方の一対の波状線は色が濃い［新海］。腹背中央の心臓斑はヒシ形というよりもラッコが泳いでいるような形である。網を張らずに草上を徘徊する。ヤドカリグモとも詳しい生態は不明である。

＜♀写真：安藤＞

コガネグモダマシ（成熟：春、夏）
Larinia argiopiformis Bös.& Str. 1906　**コガネグモ科**

♀ 約　7 ～　11 mm　♂ 約　6 ～　7 mm

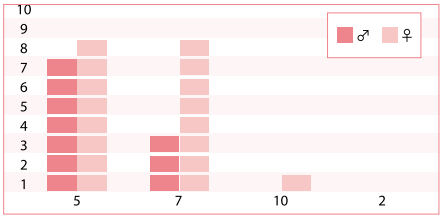
4 ～ 10 月に成体が見られる。コガネグモ科だが，昼間は網を張っていないためシャコグモと見誤るひとが多い。【網性】網は上下対称形に近い垂直円網。昼間は通常，葉裏に潜み，夕方造網する。草原にふつうに生息する。地域によっては類似種がいるので識別には注意が必要。【生活】福岡県で越冬令は 3 令以上の幼体で，出嚢 2 令幼体は 7 ～ 9 月に出現した［大熊］。アカクモヒメバチの一種に寄生されると迷網を作る［桝元］。

＜♂写真：新井＞

♀　Photo：石田

背甲に縦筋。前方に対の黒点。腹背に黒褐色の横斑（ヤミイロカニグモ類はすべて共通）

♂　Photo：池田



ヤミイロカニグモ

闇色蟹蛛　*Xysticus croceus* Fox 1937

カニグモ科

100 %

草間徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

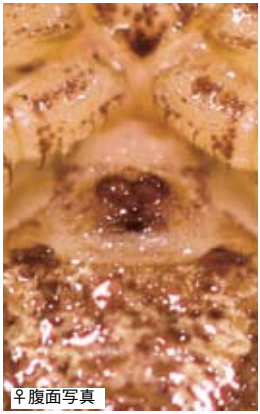
♀ 約 5 ～ 10 mm

♂ 約 4 ～ 7 mm

【観察ポイント】斑紋・色彩に類似種が多く，識別は難しいが，本種のメス外雌器は上下につぶれたハート型で肉眼でも確認できるほど明瞭。オス触肢も横向きに出る中突起が目立つ。中突起が出るのはカラカニグモも同様だが，カラカニグモは夏に成熟するのに対し，本種は春に成熟する。ヤミイロカニグモのなかでは春もっとも早く成熟するようだ。成体が見られる時季も長い。

【習性】草間を徘徊して虫を捕るカニグモ類の代表的な種類。【卵嚢】葉の上に丸い座蒲団のような白色の卵嚢を作り守る。産卵期は 5 ～ 6 月，70 ～ 120 卵［新海］。

【トピック】オスはメスより小さく背甲が真っ黒で雌雄の区別は明瞭である。ヤミイロカニグモより小形なのに和名がオオヤミイロカニグモだった種は，ゾウシキカニグモ *Xysticus saganus* Bös.& Str. 1906（♀ 5 ～ 10mm，♂ 3 ～ 6mm）という和名に変更された。


♀腹面写真

♂触肢図

ヤミイロカニグモの生殖器

本書は生殖器の構造にはできるだけ触れない方針だが，ヤミイロカニグモは生殖器で手軽に判別可能なため写真で示す。メスの外雌器の開口部は上下にややつぶれたハート型である。メスと同じ時期に採れたオスの触肢では横に飛び出た中突起が目立つ。

＜♀腹面 Photo：池田，♂触肢図：小野より描く＞

キハダカニグモ（成熟：春）
Basaniana decorata (Karsch 1879)　**カニグモ科**

♀ 約　3 ～　8 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

樹肌に擬態した色彩である。樹肌が荒く，はげ易いクス・ヤナギ等の樹幹にじっと静止している。【卵嚢】樹皮上に作られ，母グモに保護される。【類似種】樹肌に擬態するクモに他にキハダエビグモ（79 頁）やコカニグモ *Coriarachne fulvipes* (Karsch 1879)（♀♂ 3 ～ 5mm）がいる。

＜♀ Photo：新井＞

コカニグモ（成熟：夏）
Coriarachne fulvipes (Karsch 1879)　**カニグモ科**

♀ 約　3 ～　5 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

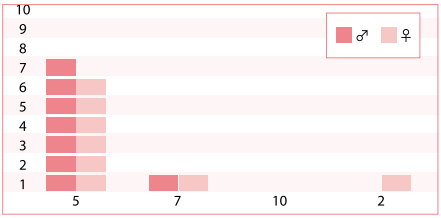
里山に多く見られる。神社，寺院，樹林地のスギ，マツなどの樹皮下に潜み，夜間になると樹皮下から出て，樹皮面や枝葉間，草間を歩き回って獲物を探す。冬期は樹皮下で越冬。【卵嚢】7 月 8 日に 15 頭出嚢［緒方］。松の幹に多い。プラタナスの樹皮下で亜成体越冬する［植村］。

＜♀ Photo：新海＞

♀　　Photo：森田

肢に環紋がないが節端に赤点がある

交尾　　Photo：谷川



ワカバグモ

若葉蛛　　*Oxytate striatipes* L.Koch 1878

カニグモ科

100 %

葉上徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 9 ～ 12 mm

♂ 約 6 ～ 11 mm

【観察ポイント】全身が若葉色のクモで識別は容易。平地から山地まで生息する。丹沢では上限が標高 850 mの山地帯まで分布。

【習性】成体は 4 月から 10 月まで見られる。夕方 5 時頃になると葉の表面に上り，第 1 脚を高く持ちあげて飛んでくる昆虫を待っている。羽音がすると，その方向に体を向け，持ちあげている第 1 脚を左右上下に動かすので，この脚に感覚器官があると思われる。庭木等のサクラの若葉に特に多く出現し，サクラの蜜腺に集まるオオクロバエやトビイロケアリ等をさかんに捕食する。都市部から山地まで広い。【卵嚢】葉裏に淡黄色に作られ保護される。40 ～ 60 卵，産卵期 5 月中旬～ 7 月。

【トピック】オスは成体になると頭胸部前方と第 1 ・ 2 脚の基節，腿節が黒色または赤褐色に，第 3 ・ 4 脚の膝節より前方が赤色に変わる。また，全体的に褐色が強くなる個体も見られる。視覚的な求愛は行わない。メスがしおり糸にぶら下がった状態で交尾が行われることもある。種小名の striatus は線のある，pes は足を意味する。

セマルトラフカニグモ（成熟：夏）
Tmarus rimosus Paik 1973　**カニグモ科**

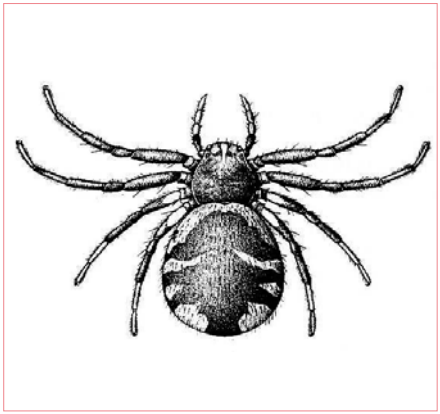
♀ 約　5 ～　8 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

記録率はセマルトラフカニグモ 80%，トラフカニグモ 80%であった。「セマル」は腹部後端の尻の部分が丸いことに由来する（図の右）。次種のトラフカニグモは凹形である（図の左）。この比較で名づけられた。飛翔性昆虫よりもアリを捕獲する。網を張らず，夜間，糸の途中からしおり糸で下がる個体を見かける。
<♀ photo：森田>

トラフカニグモ（成熟：春）
Tmarus piger (Walckenaer 1802)　**カニグモ科**

♀ 約　4 ～　8 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

セマルトラフカニグモは都市部公園にも生息するが，トラフカニグモはより丘陵性でやや小形である。セマルトラフカニグモより早く 5 月に成熟する。アリを捕獲している。カニグモ類（ハナグモやヤミイロカニグモ）は植生層上層で捕食する機会が多いため，コモリグモ類とニッチは重ならない。しかし植生層が刈られると地表に降りたカニグモ類はコモリグモを捕食する[ナイフェラーら 1979]。トラフは如何？<♂ photo：新海>



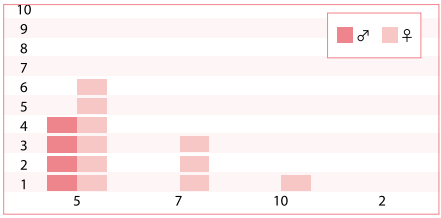
フノジグモ（成熟：春）
Synema globosum (Fabricius 1775)　**カニグモ科**

♀ 約　5 ～　8 mm　♂ 約　3 ～　5 mm

腹背に黒文字の「不」が見えるため不字蛛と呼ぶ。腹部の地色は赤，黄，灰白色。クロオオアリを捕食することがある。【卵嚢】葉先を折りまげた産室で保護される。6 月に 4 回産卵。卵数平均は 118 卵 [小笠原]。岸田久吉の遺したみごとなフノジグモの図がある。
<♀図：岸田久吉>

♂　Photo：石田

幼体　Photo：石田



ネコハエトリ

猫蠅取　*Carrhotus xanthogramma* (Latreille 1819)

ハエトリグモ科

100 %

草間徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 7 ～ 13 mm

♂ 約 7 ～ 13 mm

【観察ポイント】オスの腹背には黄味から赤味を帯びるものなど変異が多い。メスはマミジロハエトリと見誤る例が多い。区別点はマミジロハエトリの項に記す。平地から山帯まで生息しており，両種とも標高1000m 以上にも生息している。

【習性】庭の常緑樹の垣根などにメスが葉をつづって住居を作る。オスがメスを探索して徘徊。【卵嚢】産室で産卵するため，特別な卵嚢は作らない。平均 36 卵，最大 3 回産卵［吉田裕之］。【生活】オスはメスの住居の上に小屋掛けをして求婚する［斉藤］。求愛ダンスも行う。求愛誇示中のオスは顎を前へ突き出すが，この顎出しはオスどうしの威嚇誇示行動では見られない。越冬態は亜成体である。春に 8 齢か 9 齢で成熟［前川隆敏］。

【トピック】オスどうしの威嚇誇示行動は房総半島や横浜の蜘蛛合戦のひとつ「ホンチ遊び」という伝承行事になっている。通常のクモで卵嚢を作る糸を出す管状腺はハエトリグモでは退化している。

♂

♀

マミジロハエトリ（成熟：春、夏、秋）
Evarcha albaria (L.Koch 1878)
ハエトリグモ科

♀ 約　6 ～　7 mm
♂ 約　6 ～　7 mm

年中，眉間（マミ）の白いオス成体を見る。本種のメスはネコハエトリのメスと似ているが，腹背後方に一対の黒点がある（オス幼体もメス型である），頬（前側眼下部）に白毛だけでなく黒い横スジがある，頭胸部の首輪斑が太い等の特徴で区別できる。【卵嚢】6 月 10 日採集メスは飼育下で 4 回産卵，幼体数は 29 頭（1 回め）～ 11 頭（3 回め）。産卵メスは産室に入って絶食する［日下部］。
<♀♂ Photo：石田>

♂

♀

マミクロハエトリ（成熟：春、夏）
Evarcha fasciata Seo 1992
ハエトリグモ科

♀ 約　7 ～　11 mm
♂ 約　6 ～　7 mm

オスは額が黒くマミジロハエトリとの識別は容易だが，メスは難しい。斑紋では判断を誤る。メスの第 4 脚蹠節が第 3 脚蹠節より長ければ本種，等しければマミジロ。太平洋側は西日本から千葉県まで確認されている。6 月～ 9 月初旬まで産卵を見る。7 月 26 日産卵の孵化数 29 ～ 58 頭［斎藤］。<♀ Photo：斎藤慎一郎>

♂

♀

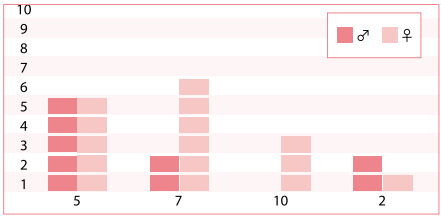
デーニッツハエトリ（成熟：春、夏、秋）
Plexippoides doenitzi (Karsch 1879)
ハエトリグモ科

♀ 約　8 ～　9 mm
♂ 約　6 ～　7 mm

メスは背甲や腹背の条にオレンジ色が混ざる。平地から山地まで広く生息，標高 1000m 以上の山地帯にも生息。生活史に宮下和喜の報告がある。オスの求愛は花井・川口が報じた通り儀式的な誇示行動なしに急襲する型である。
<♂ Photo 荘司，♀ Photo 池田，>

♀　　Photo：新井

脱皮直後♂　　Photo：池田



アリグモ

蟻蛛　*Myrmarachne japonica* (Karsch 1879)

ハエトリグモ科

40 %

葉上徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 6 ～ 8 mm

♂ 約 6 ～ 8 mm

【観察ポイント】一見，蟻と見間違えるほど蟻に擬態したクモ。糸を出すことで蟻と区別できる。頭胸部の頭部と胸部の境が細くくびれる（頸溝）ことで，蟻とよく似る。幼体は赤色で腹部中央に黒色環が入る。頸溝の深さはヤサアリグモほど深くない。オスの上顎は頭胸部長を超えない。

【習性】庭の草木から山地の樹木の葉上まで普通に見られる。オスは最終脱皮で顎が劇的に長くなる．脱皮直後は顎の色が薄いが，やがて黒くなる．初夏から成熟個体が見られ，産卵期は 7 ～ 8 月，20 ～ 37 卵。葉面に住居巣を作る。【越冬態】幼体で越冬。樹皮下に糸で袋を作りその中にひそむ。

【トピック】アリを捕食することはない。アリグモに似たクモには他にクワガタアリグモ *M.kuwagata* Yaginuma 1967 があるが，個体数が少なく，上顎形と腹部形に独自の特徴があるので識別可能である。アリグモ属は後牙堤に歯数が多い「多歯ハエトリ」であるが，肉眼では確認できない。斑紋が鮮やかで「裂歯ハエトリ」のアメイロハエトリや微小なアリガタハエトリグモもアリに似ている。

♀

♂

ヤサアリグモ（成熟：夏）
Myrmarachne inermichelis Bös.& Str. 1906
ハエトリグモ科

♀ 約　5 ～　6 mm
♂ 約　4 ～　6 mm

アリグモのメスとの識別は困難だが，アリグモより一回り小形で黒くつやがある。頸溝はアリグモより深い。オスの上顎は頭胸部長を超える。生態はアリグモに似る。求愛は 7 月。7 月 12 日に 30 卵前後が出嚢［小松］。

<♀ Photo：荘司；♂ Photo：伴>

タイリクアリグモ（成熟：春、夏、秋）
Myrmarachne formicaria (DeGeer 1778)　**ハエトリグモ科**

♀ 約　5 ～　6 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

アリグモより明るい色彩で茶色の地に白と黒の斑紋があり，成体の区別はつけやすい。草や枝の上を徘徊するが，地表面，落葉上でもよく見られる。オスの上顎の途中には突起があるが，アリグモやヤサアリグモ，ヤガタアリグモには上顎突起はない。日本での繁殖習性は未記録。

<♂ Photo：荘司>

ヤガタアリグモ（成熟：春、夏、秋）
Myrmarachne elongata Szombathy 1915　**ハエトリグモ科**

♀ 約　5 ～　6 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

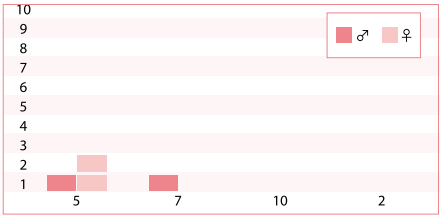
年中成体が採れる。赤っぽい個体は腹背中央の矢形模様が目立つが，黒色個体では不明瞭となる．タイリクアリグモと区別が難しいが，より赤色が強く，ヤガタアリグモは全体に細長い。2004 年の日本蜘蛛学会第 36 回大会において池田博明により日本新記録種として発表され，その後，北海道を除く各地で採集されている。

<♀ Photo：池田>

♂ Photo：石田

♀ Photo：千国

♂ Photo：千国



ヤハズハエトリ

矢筈蠅取　*Mendoza elongata* (Karsch 1879)

ハエトリグモ科

40 %

草間徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 6 ～ 11 mm

♂ 約 7 ～ 9 mm

【観察ポイント】類似種４種の見分け方を示した千国の写真による。腹背の斑紋，特に点斑の数や位置だけでなく，脚の黒さにも注目。メスの違いは小さいので要注意である。左からオスクロハエトリ，ヤハズハエトリ，シナノヤハズハエトリ，キタヤハズハエトリ。上段はメス成体, 下段はオス成体である。

【習性】イネ科の細い葉の上などにいる。水田の積みわらなどでもよく見つかる。オス成体は亜成体まではメス型に近い色彩・斑紋である。【求愛】細長い枝上などでも行動する。オスは第１脚を両方ともふりあげて前後に動く。

【トピック】かつては別種の雌雄がペアだと誤認されていた。正しく雌雄関係を整理したのは千国安之輔である。ヤハズハエトリとオスクロハエトリは沖縄を除く全国に分布するが、シナノヤハズハエトリは本州の山岳地域に，キタヤハズハエトリは北海道と本州北部に多く生息している。

♀

♂

チャイロアサヒハエトリ（成熟：夏）
Phintella abnormis (Bös.& Str. 1906)
ハエトリグモ科

♀ 約　5 ～　7 mm
♂ 約　5 ～　7 mm

都市公園や雑木林内でよく見かける。葉上を徘徊する。雌雄二型が大きく，成体オスは脚がメスよりずっと長い。学名の *abnormis* は「異常な」という意味でメスに比べて同種のオスと思えないほど脚が長いので，異常に感じたのではないだろうか。<♂♀ Photo：荘司>

♀

♂

アオオビハエトリ（成熟：春、夏）
Siler vittata (Karsch 1879)
ハエトリグモ科

♀ 約　5 ～　7 mm
♂ 約　4 ～　6 mm

アリを捕まえるハエトリグモ。第１脚を歩きながらよく振っている。構造色で青く光るハエトリグモ。アリの行列が運ぶ卵や幼虫を横取りして捕食することがある。
<♂♀ Photo：石田>

♀

♂

ウススジハエトリ（成熟：夏）
Yaginumaella ususudi Yaginuma 1972
ハエトリグモ科

♀ 約　5 ～　7 mm
♂ 約　5 ～　7 mm

本種は平地から高山まで広く生息し，山地のハエトリグモでは優占する。斑紋には色彩変異があり、腹背に斑紋がない個体も見られる。雌雄ともに頭胸部の形態が独特である。
< ♂ Photo：伴，♀ Photo：荘司 >

見つけにくいクモ

(1) 隙間に隠れているクモ

ミヤグモ　神社や寺院のハメ板の隙間などに管状巣を作り入口から四方に受信糸を伸ばしている。細長い体形で第 3 脚が前を向くのが特徴で，同様の種類に別種のコマツエンマグモとシマミヤグモがある。

古い樹のうろなどに潜むヤチグモ類やアシヨレグモ，セスジガケジグモなども網は見つかるがクモは発見しにくい。

(2) 渓流付近の石の下にいるクモ

住む場所が特殊なうえに体長 3mm 以下と小さいため見つけにくいのがヨリメグモである。中眼が接する（前中眼は小さい）。網は円網の変形で水上に張られる。

(3) 極小種

体長 1mm と小さいのがナンブコツブグモである。地表近くに球状円網を張り，中央に占座する。狩蜂ナンブジガバチモドキが狩るクモとして発見された。

ヒメグモ科の極小種ハイイロヒメグモは地表近くの草間に住む。意外によく採集される。腹部黒色個体もある。

(4) コサラグモ類

同定困難な種類が多い。写真で示したのは地表近くの草間に多いチビアカサラグモで全身オレンジ色。識別は専門家にまかせないと難しい。

ミヤグモ巣

ミヤグモ♀　Photo:谷川

ヨリメグモ♀　Photo：谷川

ナンブコツブグモ♀と卵嚢

球状円網　Photo：安藤

ハイイロヒメグモ♀ Photo：安藤

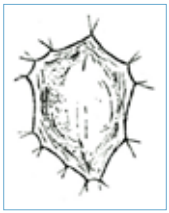
チビアカサラグモ♀ Photo：谷川

《 第 3 部 》 夏に成熟するクモ

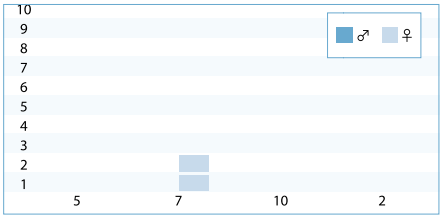
・コガネグモ
・ヤマシロオニグモ
・ワキグロサツマノミダマシ
・ドヨウオニグモ
・コシロカネグモ
・オオトリノフンダマシ
・オナガグモ
・ヒメグモ
・ヤリグモ
・シロカネイソウロウグモ
・ムラクモヒシガタグモ
・クサグモ
・イオウイロハシリグモ
・シボグモ
・カバキコマチグモ
・ヤバネウラシマグモ
・アサヒエビグモ
・アズチグモ
・トゲグモ
19 種

♀　　Photo：新井

♂　　photo：谷川



卵嚢図　　図：関口



コガネグモ

黄金蛛　　*Argiope amoena* L.Koch 1878

コガネグモ科

70 %

垂直円網

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 20 ～ 30 mm

♂ 約 5 ～ 7 mm

【観察ポイント】腹背に黄色の帯と茶褐色の帯が並ぶ。

【習性】日当たりの良い樹間・草間に直径 50cm ～ 1m の垂直円網を張り中心に占座。X 字形またはその一部を省略したかくれ帯をつける。南方系で市街地周辺では近年減ってきている。【卵嚢】淡緑色の多角形，平均 3 個，草の葉や樹木の間に作る，産卵期は 7 ～ 9 月。250 ～ 1800 卵，平均 1000 卵。

【トピック】種名はラテン語由来の「優美な *amoena*」の意味。ローレッツが愛知県立病院の窓越しに発見した美しいクモを標本を基にしてコッホが記載した。ローレッツの感動が名前に現れている［新海］。網は早朝にたたむことがある。幼体は網の半分を張り直すことがある［細野］。【蜘蛛合戦】鹿児島県姶良市加治木町や高知県中村市にはコガネグモの♀どうしを戦わせる伝承行事がある。加治木町では 6 月の第 3 日曜日，横棒の上に人々が持ち寄った二頭のクモを乗せ、勝負させる。勝ち技は「相手の尻に糸を掛ける」「相手の尻に噛みつく」「相手を棒から落とす」「棒からぶら下がった相手の糸を切る」。勝負の判定は行司が行う。

チュウガタコガネグモ（成熟：春、夏）
Argiope boesenbergi Levi 1983　**コガネグモ科**

♀ 約　15 ～　18 mm　♂ 約　5 ～　6 mm

腹背の黄色帯が分断されているためコガネグモとの識別は容易。本種はコガネグモより山地に多い。全国に分布するが，東北地方の採集記録はきわめて少ない。【網性】山道の樹間・草間に垂直円網を張る。網の中心にX字形あるいは一部を省略したかくれ帯を付ける。【卵嚢】灰緑色・多角形。6月頃産卵。

<♀ Photo：安藤，卵嚢：池田>

コガタコガネグモ（成熟：夏、秋）
Argiope minuta Karsch 1879　**コガネグモ科**

♀ 約　6 ～　12 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

腹背には黄色とオレンジ色（あるいはオレンジ色を含んだ褐色）の帯がある。刺激に敏感で，すぐ地上に落下し，落葉の下や葉の裏にもぐる。【網性】樹幹などに垂直円網を張る。網の中央にX字形のかくれ帯を付ける。平地から山地まで生息する。【卵嚢】淡褐色で，濃灰色の条斑がある。産卵は9月。

<♀ Photo：山崎>

ムシバミコガネグモ（成熟：夏）
Argiope aetheroides Yin et al. 1989　**コガネグモ科**

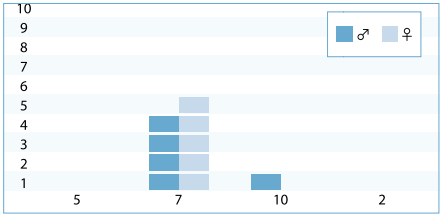
♀ 約　9 ～　18 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

「ムシバミ」の由来は腹部のへりがでこぼこしていることから。【網性】垂直円網を張る。かくれ帯は1～2本のものが多く，X字形はほとんど見られない。コガタコガネグモより大きく，振動などに対して敏感ではない。平地から里山に生息。分布は愛知県以南。【卵嚢】多角形でコガタコガネグモの卵嚢より細長い［新海］。

<♀ Photo：高野>

♀普通型　Photo：森田

アトジロ型♀　Photo：森田



ヤマシロオニグモ

山城鬼蛛　*Neoscona scylla* Karsch 1879

コガネグモ科

90 %　垂直円網

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 9 ～ 16 mm

♂ 約 7 ～ 12 mm

【観察のポイント】肩がなで肩。ただし同様のなで肩には平地ではイエオニグモ・コゲチャオニグモ・ヘリジロオニグモがある。メスの腹背斑紋は変異が著しい。

【習性】里山から山地に生息する。【網性】樹林地の周辺，林道などの樹間，草間に夕方垂直円網を張り，中心に止まる。昼間は網の一端の枝や葉裏に潜んでいる場合もあり，その時はキレ網を張ることが多い。翌朝網をこわして木蔭に隠れるが，個体により，昼間も網を張ったままのものがみられ，時には網の中心にいることもある［新海］。オスの成熟時期は神奈川県松田町で 6 月下旬で円網を張らずに夜間メスを探す。メスは夕方造網し，翌日午前中に破網する。7 月 3 日及び 8 日の夜 22 時頃にオスの求愛を観察。求愛はメスの網のこしきにつながる交尾糸を張る場合と縦糸を利用する場合があった。オスは糸を主に第 1 脚，第 2 脚ではじき，メスに信号を送るがメスは応答せず。メスの網上でオスが威嚇し合うことがある［池田千］。【卵嚢】黄色で黒いすじのある細長い卵嚢を草上や建物の周囲に作る 150 ～ 300 卵［新海］。

【トピック】種名の *scylla* はギリシア神話の娘の名前。「ヤマシロ」は山城国（京都府）に因む。

変異型

ヤマシロオニグモのメスの腹背の変異型にはセジロ型，アトグロ型，茶色型など様々な型が知られている。オスの斑紋は普通型が多い。腹部後方が他のヒメオニグモ類（*Neoscona* 属．コゲチャオニグモやサツマノミダマシなど）より少し長い。

＜無斑型♀ Photo：新井；アトグロ型 Photo：谷川＞

コゲチャオニグモ（成熟：夏）
Neoscona punctigera (Doleschall 1857)　**コガネグモ科**

♀ 約　9 ～　16 mm　♂ 約　7 ～　9 mm

腹部の色彩には茶色・灰色・赤褐色・黒褐色など様々。葉状斑のある個体も見られるが，大部分は単色である。【網性】雑木林内の樹間や草間に夜間，垂直円網を張る。昼間も網を張ったままの個体もある。【生活】1 月樹皮下に潜む。2 月 20 日，タラヨウの葉を折り曲げて裏に潜む亜成体を採集したところ，巣の中に他の小型のクモや昆虫の食べかすがあった［植村］。

＜♀ Photo：石田＞

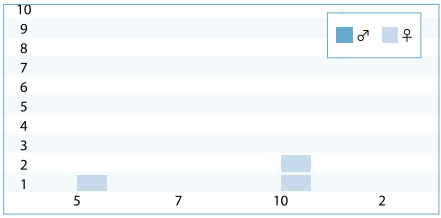
ニシキオニグモ（成熟：夏）
Araneus variegatus Yaginuma 1960　**コガネグモ科**

♀ 約　12 ～　18 mm　♂ 約　9 ～　10 mm

背甲は黒褐色，腹背は黒褐色に黄色の斑紋があり，生体では色彩でみわけられるが，退色した標本ではイエオニグモと見誤る。【網性】山地の神社・寺院に多く見られ，建物の周囲，灯篭，鳥居，および周辺の樹間に垂直または斜めに円網を張る。クモが隠れている位置と網の角度によって「正常円網」「呼糸円網」「キレ網」の 3 種類を張る［新海］。【卵嚢】緑色で，産卵は 10 月下旬から 11 月中旬まで。＜♀ Photo：高野＞

♀　　Photo：新井

若いハゼの実　　Photo：緒方清人



ワキグロサツマノミダマシ

脇黒偽薩摩　*Neoscona melloteei* (Simon 1895)

コガネグモ科

100 %　垂直円網

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 7 ～ 10 mm

♂ 約 6 ～ 9 mm

【観察ポイント】類似種サツマノミダマシは成熟がひと月早い。腹部の前部に突部がある。腹側面は黒褐色（サツマノミダマシは緑色）。

【習性】成熟は 7 月下旬に始まり，最盛期はお盆の頃。過去の記録のうち 5 月成体の例は不自然である。【網性】垂直円網の夕方の造網に要する時間は 20 ～ 30 分でオニグモ類の中では最も早い。網は早朝に破網され葉蔭に戻る個体が多い。刺激に敏感で採集しようとすると飛び下りる。平地から山地まで広く生息。都会の公園，神社，旧家の庭などでも見ることができる。【卵嚢】黄色のお椀形。産卵期 8 ～ 9 月。【生活】8 月 17 日～ 21 日の夜半から未明にかけて数回オスの求愛行動を観察［平松］。オスはメスの網の縦糸に網の外から交尾糸を張り，求愛信号を送る。

【トピック】京都府北東部，福井県西部地域周辺ではハゼノキのことをサツマと呼ぶ。サツマノミとはハゼの実のことである。腹部がハゼの実に似ていることからの命名。

サツマノミダマシ（成熟：夏）
Neoscona scylloides (Bös. & Str. 1906)　**コガネグモ科**

♀ 約　7 ～　11 mm　♂ 約　8 ～　9 mm

腹部側面が黒くないだけでなく，成熟時期も幼体の出現時期もワキグロよりひと月早いことで区別できる。【網性】垂直円網で上半分と下半分がほぼ均等な円網を夕刻に張る。朝には破網する。昼間は葉裏にひそむ。【生活】生態はワキグロと似ていると思われるが，生態報告は乏しい。オオモンクロクモバチに狩られる。アカクモヒメバチによる寄生もある。

＜♀ Photo：石田＞

ハラビロミドリオニグモ（成熟：夏）
Araneus viridiventris Yaginuma 1969　**コガネグモ科**

♀ 約　5 ～　7 mm　♂ 約　4 mm

腹部の形態からトリノフンダマシの仲間と見誤る。山地に生息。成体は 6 ～ 8 月に出現。【網性】日当たりの良い林道や渓流沿いの樹間の高い場所（2 ～ 3m）に垂直円網を張る。斜めや水平の円網を張る個体も見られる［新海］。生態報告は乏しい。

＜♀ Photo：熊田＞

ムツボシオニグモ（成熟：春、夏）
Araniella yaginumai Tanikawa 1995　**コガネグモ科**

♀ 約　5 ～　8 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

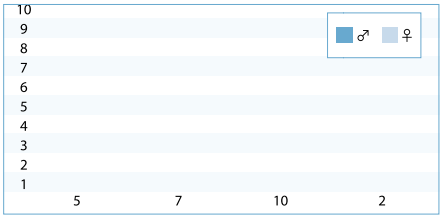
腹背後方の黒点は 3 対 6 個だが，2 対～ 4 対の個体もいる。オスは脚が黒い。【網性】樹林地の周辺，林道の広葉樹やクマザサなどの枝葉間，葉の表面や葉裏に小さな水平円網を張る。類似種に山地に見られるトガリハナオニグモ *Araniella displicata* (Hentz 1847) があり，酷似する。識別は生殖器による必要がある。【卵嚢】5 月に葉を巻いたなかに作られる。

＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：森田

腹背の色彩斑紋は特徴的で虎の顔を連想させる

花の上の♂　　Photo：谷川



ドヨウオニグモ

土用鬼蛛　*Neoscona adianta* (Walckenaer 1802)

コガネグモ科

10 %

垂直円網

成熟：春 **夏** **秋** 冬

♀ 約 6 ～ 10 mm

♂ 約 4 ～ 6 mm

【観察ポイント】色彩と斑紋で識別できる。腹背の色彩斑紋は特徴的で虎の顔を連想させる。斑紋はナカムラオニグモに似ているものの，ドヨウオニグモは腹部の黄色に対してナカムラオニグモは灰褐色。

【習性】夏の水田に普通だが，都市公園や雑木林では見かけないため平地での観察会での出現率は 10％と意外に低い。【網性】円網の向きは垂直から水平まである。【卵嚢】夏は 3 ～ 5 個を作り総卵数は 325 個，秋は 3 ～ 5 個を作り 259 個［宮下和］。【生活】春の幼体は 5 回の脱皮で 5 ～ 6 月に成熟。この成体が 7 月に産卵した出嚢幼体は 5 回の脱皮で 8 ～ 9 月に成熟。

【トピック】和名は陰暦「土用」の頃に目立つクモという意味である。キンヨウグモはドヨウオニグモより発生が早いので，「ドヨウ（土曜）」があるのだから「金曜」グモがあってもいいだろうという意味での冗談による命名であったが，ドヨウオニグモは「土曜」の意味ではない。

ナカムラオニグモ（成熟：夏）
Larinioides cornutus (Clerck 1758)　**コガネグモ科**

♀ 約　9 ～　12 mm　♂ 約　7 ～　9 mm

成体は 1 年中見られる。山間部の草原や建物の周囲に多い。分布は福井県以北の日本海側各県および長野県では普通種。【網性】垂直円網を張り，その一端に袋状の住居を作る。【備考】リンネより先に最初に二名法の学名でクモを記載したスウェーデンのクラークの論文に記載されていて，ヨーロッパとの共通種である。クラークはリンネの友人だった。

＜♀ Photo：高橋＞

ヌサオニグモ（成熟：夏）
Araneus ejusmodi (Bös. & Str. 1906)　**コガネグモ科**

♀ 約　6 ～　8 mm　♂ 約　5 ～　6 mm

特異な斑紋から識別は容易である。「ヌサ」とは腹背の斑紋が幣（ぬさ）状であることから岸田久吉の命名。幣は神社の祭壇中央に祭られる神代の飾りもの。【網性】夕方円網を張り，早朝に破網，破網しない個体もいる［中平］。産卵期は 5 月下旬。

＜♀ Photo：谷川＞

ヤミイロオニグモ（成熟：春、夏）
Alenatea fuscocolorata (Bös. & Str. 1906)　**コガネグモ科**

♀ 約　5 ～　6 mm　♂ 約　4mm

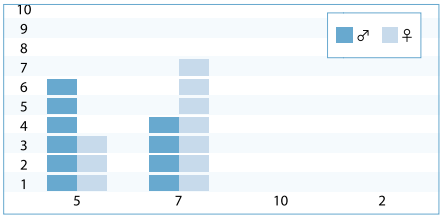
腹背の肩から心臓形の紋様が見える。これがヤミイロオニグモやオオクマヤミイロオニグモの共通の特徴。オオクマヤミイロオニグモと酷似する。【網性】林道の樹間，草間に垂直円網またはキレ網を張り，中心に占座する。昼間は網の一端の枝や葉裏に簡単な住居を作り潜む。【卵嚢】黄色の半球状で，葉上や樹皮面に作られる。40 ～ 70 卵［新海］。産卵期は 5 月下旬～ 7 月。

＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：森田

腹背の黒条は他のシロカネグモも同じ
肩の黒点部がこぶ状でない

チュウガタシロカネグモ♀　　Photo：石田



コシロカネグモ

小白銀蛛　*Leucauge subblanda* Bös. & Str. 1906

アシナガグモ科

90 %　水平円網

成熟：春 夏 秋 冬
♀ 約 8 ～ 9 mm
♂ 約 5 ～ 7 mm

【観察ポイント】成熟時期がコシロカネグモは5月中旬から，オオシロカネグモは6月下旬から，チュウガタシロカネグモは4月と9月である。オスに二型がある。腹背の黒条は他のシロカネグモも同じである。

【習性】オオシロカネグモよりも乾燥に強い。山地渓流にも見られる。【網性】草間に水平円網を張る。丹沢では上限は標高610 m，オオシロカネグモの上限は570 mである。

【トピック】属名はギリシア語で「白く光っている」という意味で，種名はチュウガタシロカネグモ「blandaに似ている」という意味。刺激により黒い条斑は太くなる（他のシロカネグモも同様である）。これは刺激で皮下の銀色結晶を含むグアノサイトが収縮して褐色の腸管が目立つためである。シロカネグモ類に限らず，クモの腹部の銀色の元はグアニン結晶である。グアニンは塩基で窒素排出物でもあり，結晶は紫外線を反射する効果がある。

オスの二型

コシロカネグモのオスにはメス成体同型と，淡斑茶色の型（オオシロカネグモのオスに類似する）の二型がある。サイズの小さい個体に前者の型が，大きい個体に後者の型が多い。特に後者の型のオスはオオシロカネと見誤る例が多い。同日（5 月 29 日）同所で採集したオス亜成体，メス型オス，オオシロ型オスを並べて示した [池田]。

チュウガタシロカネグモ（成熟：春、秋）
Leucauge blanda (L.Koch 1878)　**アシナガグモ科**

♀ 約　9 ～ 13 mm　♂ 約　6 ～ 10 mm

一対の肩の黒点がこぶの上にある。オオシロカネグモやコシロカネグモでは黒点はあってもこぶ状に盛り上がることはない。南方種であったが，1980 年代以降，関東南部まで北上した。【生活】神奈川県小田原市では4月と9月に成熟する。比較的乾燥に強いようである。産卵後に卵が無くなっても腹部が縮小しないため，妊娠時期を長めに見誤る [池田]。

＜♀ Photo：森田＞

オオシロカネグモ（成熟：夏）
Leucauge celebesiana (Walckenaer 1842)　**アシナガグモ科**

♀ 約　11 ～ 15 mm　♂ 約　7 ～ 12 mm

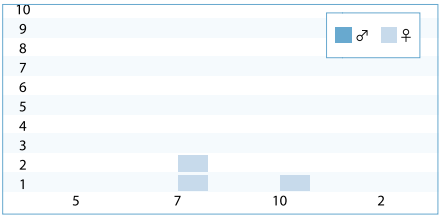
オオシロカネグモの体長は通常 10mm 以上あるが，体長だけからコシロカネグモと識別するのは間違いのもとになる。越冬態は幼体で，地表近くのカンスゲ株の下方で越冬する [加藤輝]。メスの外雌器は左からオオシロカネ、チュウガタシロカネ、コシロカネである [谷川原図を改写]。

＜♀ Photo：石田＞

♀♂　　Photo：新井

背甲が茶色で黒くない
腹背に白い領域がない

トリノフンダマシ♀　　Photo：新井



オオトリノフンダマシ

大偽鳥糞　*Cyrtarachne akirai* Tanikawa 2013

ナゲナワグモ科　　同心円状水平円網

70 %

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 10 ～ 13 mm
♂ 約 2 ～ 7 mm

【観察ポイント】トリノフンダマシ類が網を張ることがわかったのは 1950 年代で，夜間観察による。オスはメスに比べて大変に小さい。

【習性】昼間は葉の裏に潜む。【網性】湿度の高い夜，6 時頃から同心円状水平円網（厳密には同心円ではない）を張る。午前4時頃に破網し，丸めた網糸を食べる［新海明］。幼体は網を張らずに虫をつかみ取りで捕獲する［熊田ら］。造網は湿度の上昇によることが判明［宮下，谷川，馬場］。湿度が低いと急速に粘球の粘着力が低下する。オニグモ類の粘球の粘着力の低下はトリノフンダマシ類ほどではない。【卵嚢】黄褐色の卵嚢 2 ～ 4 個（最高 7 個）を作り，自分が潜む葉の近くにつるす。200 ～ 400 卵（最大 600）。求愛は 7 月末。秋に出嚢［新海］。

【トピック】類似種にトリノフンダマシ *C. bufo* (Bos.&Str. 1906) がいて，背甲が黒褐色で腹背に白い領域がある。関東地方ではトリノフンダマシは 9 月に成体，9 月中旬に産卵，産卵後 3 週間をして出嚢，ツバキの葉裏などで 2 令幼体で越冬する［鈴木勝］。

アカイロトリノフンダマシ（成熟：夏）
Cyrtarachne yunoharuensis Strand 1918　**ナゲナワグモ科**

♀ 約　5 ～　7 mm　♂ 約　2 mm

生態はオオトリノフンダマシと同様である。【網性】同心円状水平円網で平均で縦糸 10 本，横糸 6 本，ワク糸 4 本であった。横糸は交互に半円状に張られるが，その出発点となる縦糸は，必ず網の最下方のものが選択される。横糸に虫がかかると，一方の縦糸との接点が切れる構造になっている［新海明］。

＜♀ Photo：新井＞

アカイロトリノフダマシのソメワケ型

ソメワケトリノフンダマシという別種と思われていたが，アカイロの色彩変異であった。

＜黒色型♀：森田，ソメワケ型♀ Photo：新井＞

シロオビトリノフンダマシ（成熟：夏）
Cyrtarachne nagasakiensis Strand 1918　**ナゲナワグモ科**

♀ 約　5 ～　8 mm　♂ 約　1 ～　2 mm

腹背に横に白帯が入る型である。網形や生態は他のトリフン類と等しい。【求愛】メスの 1 本の交尾糸上に置かれたオスは 2 秒ほど体を振動させた。メスは 1・2 脚で手招く。オスは接近し交尾後，交尾糸上に戻った。この行動を 4 度くり返した。交尾は 3 ～ 6 秒間だった（8 月 11 日）。8 月 12 日は 5 回交尾したが，13 日は雌雄ともに反応しなかった．8 月 14 日にメスは産卵，夜 5 回交尾。8 月 15 日 1 回交尾。8 月 24 日オス死亡［泉］。また、クロトリノフンダマシとされていた個体はシロオビの色彩変異（黒色型）だった。

＜♀ Photo：初芝＞

日本のナゲナワグモ科の研究（Ⅰ）

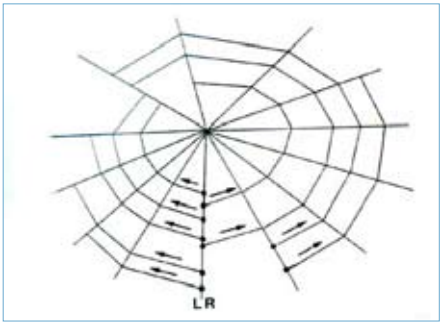
夜間観察による発見

鳥の糞に似た形態をもつトリノフンダマシ。以前は，網を張ることが確認されていなかった。熱帯地方でウォーレスやベーツによって観察されていた鳥の糞に擬態したクモが，網を張らないカニグモの仲間だったことも，このような見方に影響していた。

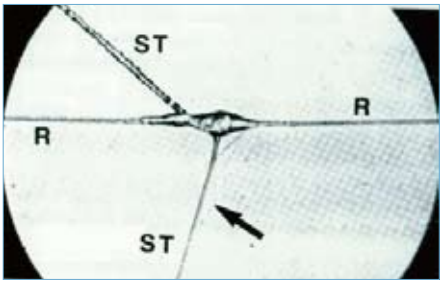
けれども，実際にはトリノフンダマシはワク糸が 1 m以上にもなる大きな同心円状（同心円ではない）水平の円網を張るのだった。そのことが発見されたのは，いまから半世紀以上も前，1950 年 8 月 19 日 23 時のことだった。発見者は当時 18 歳だった大熊千代子氏である。トリノフンダマシが網を張るのは夜だった。クモを夜間観察する習慣がなかったので誰も気づかなかったのである。大熊さんは夜を徹して網の生態を調査，9 月 12 日までに三度の観察で，造網時刻や破網時刻，造網法，餌の捕り方などを観察した。高等女学校を卒業して福岡県の衛生試験場に勤務していた大熊さんを九州大学に紹介した萱嶋泉氏は大熊さんの話に注目した。さっそく夜間観察をして網を確認，日本蜘蛛学会関西支部報 Arachnological News 創刊号（1952 年）に「トリノフンダマシ *Cyrtarachne bufo* (Boes. et Str.) の網について」を報じた。ガリ版印刷 3 ページの報告だったが，蜘蛛研究者に衝撃を与えた。

網の構造と造網

新海明氏の研究でアカイロトリノフンダマシの網の構造を見てみよう。網は平均で縦糸 10 本，横糸 6 本，ワク糸 4 本であった。造網の際にオニグモ類の垂直円網の張り方とは異なり，足場糸は張られない。縦糸が張られた後で，網の最下方の縦糸から横糸が交互に半円状に張られていく。このとき蛾がかかると決った端が切れる接合（low shear joint）になっていた。



アカイロトリノフンダマシの網とヨコ糸の造網過程（新海明）
ヨコ糸は・印から左右交互に張られた。矢印はヨコ糸を張った方向を示す。　LR：最下方に位置するタテ糸。



矢印の糸が細く切れやすいロウ・シア・ジョイント構造。獲物がかかると切れる。　R：タテ糸／ ST：ヨコ糸

足場糸を張らない点でトリノフンダマシの網はコガネグモ科の垂直円網やアシナガグモ科の水平円網とは根本的に異なった造網である。造網を共通にするクモにナゲナワグモ科の右記の仲間がいる。

ツシマトリノフンダマシ（成熟：夏）
Paraplectana tsushimensis Yamaguchi 1960 **ナゲナワグモ科**

♀ 約 7 ～ 10 mm ♂ 約 2 mm

テントウムシと見誤るほどの赤地に黒点のあるトリノフンダマシの仲間である。次のサカグチとともに関東では稀産種で，オスがなかなか確認できなかったが，張替智行氏の幼体からの飼育と谷川明男氏の分類学的研究により次々と判明した。網の長径 30 ～ 40cm，短径 20 ～ 30cm，縦糸 4 ～ 7 本，横糸数は区画により異なるが，縦糸の長い区画では 5 ～ 8 本であった。

＜♀ photo：別府史朗＞

サカグチトリノフンダマシ（成熟：夏）
Paraplectana sakaguchii Uyemura 1938 **ナゲナワグモ科**

♀ 約 7 ～ 9 mm ♂ 約 2 mm

赤地に白点をもつ稀産種である。

＜♀ photo：一寸木肇＞

ワクドツキジグモ（成熟：夏）
Pasilobus hupingensis Yin, Bao & Kim 2001 **ナゲナワグモ科**

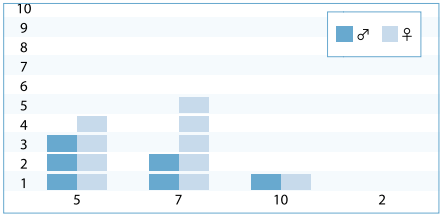
♀ 約 8 ～ 10 mm ♂ 約 3 mm

ワクドはヒキガエルの九州方言。以前の種小名の「*bufoninus*」はラテン語の「ヒキガエル bufo」の意味。ツキジは九州のクモ研究家・築地満男氏に依る。樹間に水平の三角網を張る。網は同心円状水平円網を省略した型である。

＜♀ photo：谷川，♂ photo：新井＞

♀と卵嚢　　Photo：森田

緑色♀　　Photo：石田



オナガグモ

尾長蛛　*Ariamnes cyrindrogaster* Simon 1888

ヒメグモ科

100 %　条網（すじあみ）

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 25 ～ 30 mm

♂ 約 12 ～ 25 mm

【観察ポイント】松葉のように見え，他に形の似たクモはいない。体色は緑色が多いが，地域によっては 5%から 30%の間で茶色の個体もいる。色の差異の原因や生態的な意義は不明。丹沢での上限は標高 790 m，垂直分布の区分では山地帯である。

【習性】かん木の枝の間に張られた粘性のない糸の途中にいて，虫を待ち伏せする。糸を伝って来る虫はほとんどがクモであり，徘徊性種が多い。クモに気づくと，第 4 脚の間に粘球糸を出して投げつける［新海・新海明］。このような投げつけ粘球糸はヒメグモ類に特有の武器である（16 頁）。【卵嚢】13 ～ 17mm 長，4 ～ 5mm 幅の卵嚢を 1 個を葉または枝の間に不規則に引いた糸の中に吊るす［新海］。7 月下旬，出嚢幼体は列を作って分散する［池田］。出嚢幼体は 50 ～ 60 頭［細野］。

【トピック】都市化が進む街にもクモ食いのクモやイソウロウグモは目立つ。ただしこれらのクモには小形種が多い

ツクネグモ（成熟：春、秋）
Phoroncidia pilula (Karsch 1879)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 mm　　♂ 約　2 mm

微小なクモだが，ゴツゴツした形は特徴的。【網性】スギ林などのうす暗い林内に粘球のついた１本の条網を張る。ヒメグモの仲間で，トラップ・スレッドだけを張ったものと考えることが出来る。【生活】千葉県君津市で３月 25 日に求愛・交尾が観察されている［新海明］。

＜♂ Photo：千国＞

マネキグモ（成熟：春）
Miagrammopes orientalis Bös. & Str. 1906　**ウズグモ科**

♀ 約　7 ～ 15 mm　　♂ 約　4 ～ 6 mm

枯れ枝のように見える。【網性】条網。数本の糸には篩板から出した篩板糸が巻かれていて，虫の脚などにからむ。この糸に粘球のような粘着性はないが，接着力はあり，虫が捕えられる。【卵嚢】５月下旬から棒状で長さ 10 ～ 30mm の茶褐色の卵嚢を作る。卵嚢は１～３個を条網に沿ってとりつけ，親はそばで保護している。40 ～ 100 卵（平均 60 卵）［新海］。日周性など生態に関しては西野の詳細な研究報告がある［西野］。

＜♀ Photo：森田＞

オウギグモ（成熟：秋）
Hyptiotes affinis Bös. & Str. 1906　**ウズグモ科**

♀ 約　4 ～ 5 mm　　♂ 約　4 ～ 5 mm

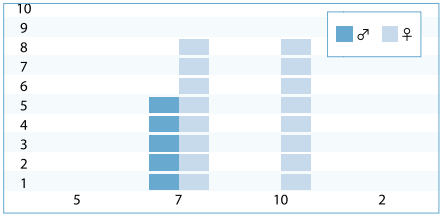
【網性】篩板糸の扇網である。扇網のかなめの部分で網全体を引っ張っていて，獲物がかかるとそれを放すので，網がゆるんで糸が獲物にからみつく。出嚢直後の幼体は扇網の一部しか張れない。扇網の造網は縦糸，足場糸，横糸の順で円網と同じ手順を経る。

＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：石田

球形の腹部
どの脚も黒い

網　　Photo：：池田



ヒメグモ

姫蛛　*Parasteatoda japonica* (Bös. & Str. 1906)

ヒメグモ科　シート付き不規則網

100 %

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 3 ～ 5 mm

♂ 約 2 ～ 3 mm

【観察のポイント】オレンジ色・球形の腹部でどの脚も黒い長靴下をはいたように黒い。

【習性】庭の常緑樹に不規則網を張るが，下部にシート網がある。【網性】シート付き不規則網は本種のみの特徴である。不規則部を迷網と呼ぶこともある。網に粘性はない。迷網に当たってノックダウンされ，シート網に落ちた虫がクモに捕獲される。【生活】7 月に成熟したオスはメスの網に同居し，亜成体メスをガードする。メス網に侵入したオス同士は糸を引き合ったり脚を打ち合ったりして闘い，大きいオスが勝つ。勝ったオスはメスの近くに位置し，脱皮直後にメスと交尾。交尾後，メスは葉を吊り産卵，卵嚢を葉の下に平均 3 個作る。1 メスの総卵数は約 100 卵。子グモに母親は捕獲した虫を与える。給餌されると子の体色は茶色になる。冬季に小形個体は淘汰される［池田］。4 月の幼体の網にシート部は無い［池田泉］。

【トピック】吉田哉により，ヒメグモがヒメグモ属からオオヒメグモ属に転属されたことを理由に，和名をニホンヒメグモに改称する提言がなされた。本書では，和名はできるだけ変更しないという見解と，1960 年の八木沼健夫の図鑑の和名を尊重する立場から提言には従っていない。

コンピラヒメグモ（成熟：夏）
Parasteatoda kompirensis (Bös. & Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ヒメグモに色彩や形態の似たクモはコンピラヒメグモ，キヒメグモ，キヨヒメグモである。コンピラヒメグモは脚が黒くない。【網性】シート部のない不規則網である。これらヒメグモ類は網で捕えた虫に粘球を投げつけることで捕獲する生き方が都市下でも生き残る適応力となっているようだ。【生活】ヒメグモより成熟が早く，6 月には成体が見られる。繁殖習性は未記録。
＜♀ Photo：池田＞

キヒメグモ（成熟：春、夏）
Parasteatoda asiatica (Bös. & Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　3 mm　♂ 約　2 mm

腹背の斑紋は明色型から暗色型まで変異が大きい［久保寺］。腹背は歌舞伎の隈取り模様を思わせるため，中平清はカメンヒメグモと仮称していた。キヒメグモの暗色型は斑紋ではキヨヒメグモと区別できない。【網性】不規則網にシート部はない。【生活】キヒメグモは 4 月に成熟する［松本誠治］が，夏にもう一度成熟する二化性を示す。
＜図：斑紋変異の一部は中平清による＞

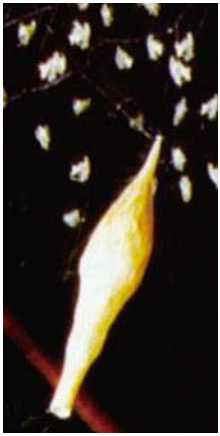
キヨヒメグモ（成熟：夏）
Parasteatoda oculiprominens (S.Saito 1939)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

キヨヒメグモはキヒメグモの暗色型とは斑紋では区別できない。【網性】シート部のない不規則網を張る。【卵嚢】雨だれ型の白い卵嚢で秋に不規則網に 3 ～ 10 個吊るされる。キヒメグモの卵嚢もほぼ同形である。【越冬態】幼体が樹皮下に 1 ～ 1.5mm ほどの袋を作り，その中で越冬する［新海］。乾燥が進む都市下の公園でもこれらのヒメグモ類は個体数を維持し，生息している。
＜♀と卵嚢 Photo：池田＞

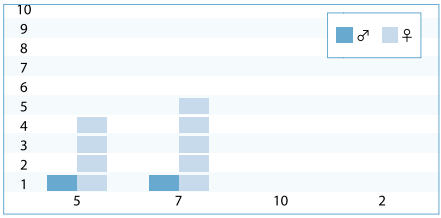
♀　Photo：森田

腹部がとがる
♂の頭に突出部



ヤリグモ卵嚢　Photo：新海

ヒゲナガヤリグモと卵嚢
Photo：池田



ヤリグモ

槍蛛　*Rhomphaea sagana* Dön. & Str.1906

ヒメグモ科

100 %
網へ侵入

成熟：春 夏 秋 冬
♀ 約 6 ～ 11 mm
♂ 約 6 ～ 8 mm

【観察ポイント】腹部先端がとがる。ヤリグモのオスの中眼域中央にはキノコ状の突起がある。それがない場合は別種ヒゲナガヤリグモかタテスジヤリグモである。南西諸島にはさらに別種が生息する。

【習性】網を張る他のクモの網に侵入して網主を攻撃，捕食する。クサグモ・サラグモ類・ヒメグモ類・ジョロウグモ・ゴミグモ・オオシロカネグモ・ウズグモなどがよく捕えられる。オナガグモも捕獲される。【生活】飼育下で出嚢後 3 ～ 4 回の脱皮で成熟し，年 4 世代を得た［加藤む］。【産卵】8 ～ 9 月，成熟したメスは，目の荒い網で立方体の産室を作り，その中央に槍の穂形の卵嚢を吊るし，ガードする。幼体は卵嚢筒状部の下端に孔を開けて出てくる。卵嚢には長短 2 型がみられる［中平］。

【トピック】ヤリグモの名前は卵嚢の形に由来する。ヒゲナガヤリグモの卵嚢はヤリグモより細長い。

チリイソウロウグモ（成熟：夏、秋）
Argyrodes kumadai Chida & Tanikawa 1999　**ヒメグモ科**

♀ 約　7 ～　11 mm　♂ 約　5 ～　9 mm

【網性】網を張らずに，クサグモやコクサグモの網に居候する。クサグモがいないとヒメグモの網に居候する。寄主であるクサグモがチリイソウロウグモに襲われて食われるのは脱皮中，または脱皮直後である。南方のスズミグモ利用個体群とはさまざまな点で同種とはいえ形質が異なる点がある［馬場］。【卵嚢】母グモがガードしていた 3 個の卵数は 90・59・39［池田］。
＜♀ Photo・卵嚢 Photo：千国＞

トビジロイソウロウグモ（成熟：夏）
Argyrodes cylindratus Thorell 1898　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

山地に生息。【網性】網を張らず，主に渓流上や林道に水平円網を張るシロカネグモ類の網に侵入し，網主が食べない小昆虫や，網主が捕えた獲物を盗み食いする。時には網食（あみく）いもする。【分布】北上してきた代表的な種類で，1975 年以前は関東地方からの採集記録はなかった［新海］。
＜♀ Photo：高野，卵嚢 Photo：新海＞

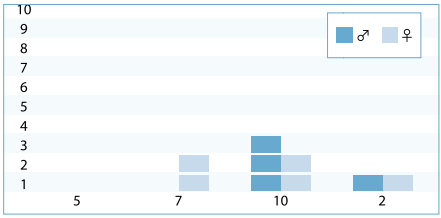
オダカグモ（成熟：夏）
Chrysso argyrodiformis (Yaginuma 1952)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ヤリグモに似た腹部だが，流線形の黒い条が 2 対または 3 対ある。林道や渓流沿いの広葉樹などの葉裏に見られる。【網性】全粘性の垂糸網と不規則網を張る。居候生活ではないし，ヤリグモのようなクモ専食でもない。【分布】南方系のクモだが，近年関東でも局所的に見られる。
＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：石田

ジョロウグモに居候する　　Photo：新井



シロカネイソウロウグモ

白銀居候蛛　*Argyrodes bonadea* Karsch 1881

ヒメグモ科

90 %

網へ侵入し居候

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 3 ～ 4 mm

♂ 約 2 ～ 00 mm

【観察ポイント】仁丹のようなクモ。小さく白銀色。網主の網に残した卵嚢の形でもある程度種類が分る。シロカネイソウロウの卵嚢は「つぼ型」，フタオイソウロウは「びん型」，チリイソウロウグモは「球型」と区別できる（次頁）。

【習性】網を張らずに，他のクモの網に居候して網主の残した餌を食べる。【卵嚢】2 ～ 3mm のつぼ型，を網主の網の中や，その近くに 2 ～ 5 個吊るす。30 ～ 50 卵［新海］。産卵期は 7 ～ 9 月。

【トピック】ジョロウグモの 1 網に 70 個体いた記録がある。シロカネイソウロウグモは網主を補食することはないが，まどい中の幼体を捕食した例が観察されている（ジョロウグモ幼体及びナガマルコガネグモ幼体）。イソウロウグモでも、フタオイソウロウグモやチリイソウロウグモでは，網主を襲って捕食する例が観察されている。

フタオイソウロウグモ（成熟：春、夏、秋）
Neospintharus fur (Bös. & Str. 1906)　**ヒメグモ科**

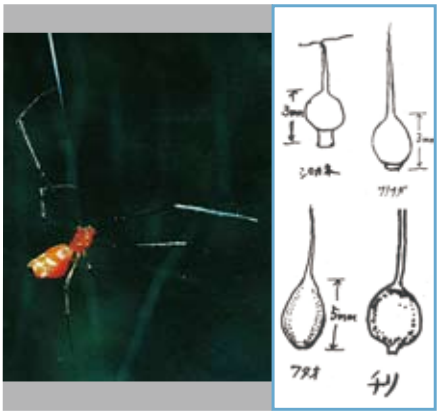
♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

腹部の腹部のふたつの突起を広げたり，せばめたりする［池田］。ツノナガイソウロウグモに酷似する。【網性】自分の網を張らず，網主が食べない小昆虫を捕えたり，ときには網主を襲う。網主が襲われるのは交尾中・脱皮中・脱皮後などである。サラグモ類・ヒメグモ類・クサグモ類・スズミグモ類の網に居候する。
<♀と卵嚢 Photo：新海>

ツノナガイソウロウグモ（成熟：春）
Neospintharus nipponicus (Kumada 1990)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　5 mm　♂ 約　3 mm

フタオイソウロウグモに酷似する。【網性】自身で下草間に不規則網を張る場合もあるイソウロウグモ。クサグモ類・サラグモ類などの網に侵入して，網主の食べない小昆虫を捕食する。【卵嚢】3 ～ 6 個を作る。中は胚 9 頭と 11 頭（7 月 13 日秦野市）［池田］，網内に 1 ～ 2 個（6 月 23 日）から 4 個（7 月 23 日）まで。7 月 7 日には幼体 15 頭，16 頭，卵 10 個の 3 個（君津市）［新海明］。産卵期は 6 月下旬から 8 月。<♀と卵嚢 Photo：高野>



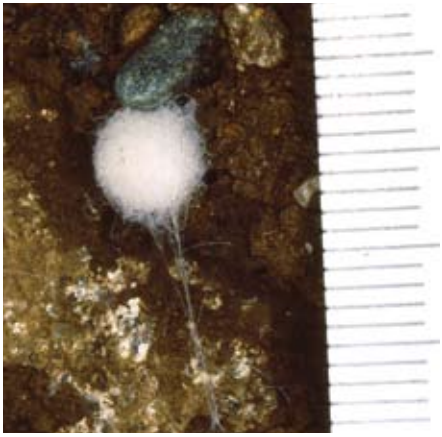
アカイソウロウグモ（成熟：夏）
Argyrodes miniaceus (Doleschall 1857)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　4 ～　00 mm

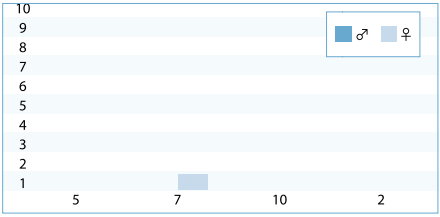
南方系の赤い体色のイソウロウグモで，本州では千葉県以南の太平洋側各県に分布し，平地から山地に生息。【網性】網を張らずに，ジョロウグモ類・コガネグモ類・オニグモ類などの網に侵入して居候生活をする。【卵嚢】22･14･22 卵［安田］，産卵期は 8 ～ 10 月。
<♀ Photo：新海>

♀　　Photo：池田

背甲は黒色
腹背はまだら



卵嚢　　Photo：池田



ムラクモヒシガタグモ

叢雲菱形蛛　*Episinus nubilus* Yaginuma 1960

ヒメグモ科

80 %

X 字状網

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 4 ～ 5 mm
♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】背甲・腹背は黒く，腹部腹面の両側面も黒い。背甲は黒色である。

【習性】菱形の腹部で，腹背にはムラ雲模様のある小さなクモ。【網性】夜間 X 字状の網を張る。地表に伸びたトラップ・スレッドの端はガム・フットで地表を徘徊する虫がこれに触れると釣り上げられる。オオヒメグモと同じ仕組みである。造網は 1 本の上糸から 2 本のトラップ・スレッドを下す。支持糸とトラップ・スレッドは大瓶状腺の糸であり，ガム・フットの粘球は集合腺である。投げつけ粘球は鞭状腺の糸と集合腺が発達した葉状腺からの粘球で作られる。【卵嚢】石の下に球形で飾り糸を備えた卵嚢を作る。【生活】オスは糸を流してメスを探す。オスの流した糸がメスの糸にかかると交尾糸となる。オスは交尾糸をはじいてメスに求婚する。

【トピック】日本で最初にムラクモヒシガタグモの X 字状網を確認したのは栃木県赤城山にて新海栄一である（1981 年）。本種は基本的に夜行性だが，暗所で造網することもある。そのときはたまたま寺の回廊の下の暗所で網上にいた。

ヒシガタグモ（成熟：春、夏）
Episinus affinis Bös&Str. 1906　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

ムラクモヒシガタグモよりやや大きい。背甲は黒色ではなく淡色，腹側面は白いことがムラクモと異なる。この特徴は幼体にも共通である。【網性】夜間に逆Ｙ字状の網を張る。造網法は未確認である。ヒシガタグモ類の網形はＸ字形・Ｈ字形・逆Ｙ字形と呼ばれるがまとめてＸ字状と称する。【卵嚢】飾り糸のある白色球形。
＜♀と卵嚢 Photo：池田＞

ハラナガヒシガタグモ（成熟：春）
Moneta caudifer (Dön.&Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 mm　♂ 約　3 mm

腹部の形態に特徴のあるヒシガタグモ類である。里山から山地に生息する。【網性】樹林地の中や周辺，林道の樹木の枝葉間，草間にＸ字状の網を張る。他のヒシガタグモが樹間の 1.5m から地表近くまで生息しているのに比べて，本種は低い場所ではほとんど見られない［新海］。
＜♀ Photo：新海＞

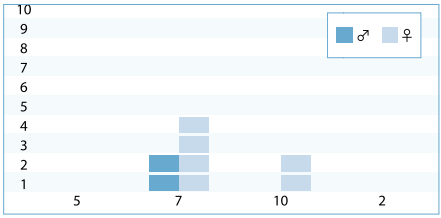
トガリクサチヒメグモ（成熟：春）
Coscinida japonica Yoshida 1994　**ヒメグモ科**

♀ 約　3 mm　♂ 約　2 mm

腹部は卵型で細長い。南西諸島から静岡県まで分布。【網性】ムラクモヒシガタグモ同様のＸ字状の網を張る。【卵嚢】飼育下で 4 月 20 日から 6 月 21 日まで 8 個を枯葉上に作った。卵嚢当り 8 ～ 12 卵，総卵数は 79 個［小笠原］。
＜♀ Photo：谷川＞

♀　Photo：水野

幼体　Photo：水野



クサグモ

草蛛　*Agelena silvatica* Oliger 1983

タナグモ科　管状住居付き棚網

100 %

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 12 ～ 18 mm

♂ 約 12 ～ 18 mm

【観察ポイント】増山雪斎（1800 年頃）の図にはクサグモの斑紋の特徴がよく描かれている。類似種のコクサグモでは黒斑がややおぼろになる。

【習性】クサグモの成熟は 7 月，コクサグモはひと月遅れる。【網性】枝間に棚網をかけ，その上に不規則に糸を引いて迷網を作る。棚網の迷網部にチリイソウロウグモが同居する例が多い。【生活】求愛オスはメス網を訪れ，シート部を触肢で叩く。交尾後にオスはメスの外雌器を分泌物でふさぐ交尾栓を作る。栓の効果は約 60 ～ 70%[桝元]。河川敷や低木には、コクサグモの類似種のヒメクサグモがいる。丹沢でクサグモの分布上限は標高 630m，コクサグモは 710m。

【トピック】出嚢時のクサグモ幼体は頭胸部赤色で腹部黒色。同時期のコクサグモ幼体は腹部も赤色。コクサグモ幼体は糸疣背面近くに赤色点が残る。

棚網

棚網はシート状の棚網部とその上に引かれた迷網部から成る。棚網にはブドウ状腺の糸を，迷網には瓶状腺の糸を使う。棚網の奥にはトンネル状の管状住居が作られる。網を張り替えずに，成長につれ次第に大きく厚くしていく。網の補修は夜間に行われる。迷網にぶつかりノックダウンされた虫の周囲をクモは旋回しながらラップする。その後，管状住居に引き込んで食べる。【卵嚢】住居奥に作られた多面体の卵嚢内で子グモは越冬し，翌年春に出嚢［新海］。冬至までは短日条件で出嚢が抑制されている［加藤輝］。2～3月に出嚢し5～6回の脱皮を経て6～7月に成体となる［宮下和］。7回脱皮の記録もある。

＜網と卵嚢 Photo：池田＞

コクサグモ（成熟：夏、秋）
Allagelena opulenta (L.Koch 1878)　**タナグモ科**

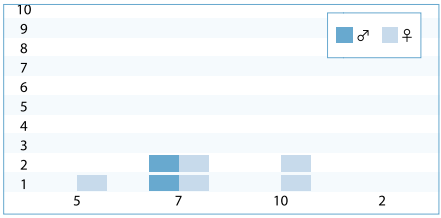
♀ 約　5 ～　12 mm　♂ 約　5 ～　12 mm

形態・網型・生態はクサグモに似るが，都市部にもふつうに生息している。河川敷や低い草むらには類似種ヒメクサグモが生息する。また，山地帯や東北地方にはイナズマクサグモが分布する。イナズマクサグモは地面付近に住居を持つことがある。成熟時期は挽夏（8月～9月）で，クサグモと約1ケ月異なる。【卵嚢】木の葉・樹皮・石垣などの表面に薄い円盤状の白色卵嚢を作り，親はその上にのって保護する。産卵は9～11月，90～130卵。卵はそのまま越冬して翌年4月に孵化する。

＜♀ Photo：腰高，幼体 Photo：池田＞

♀　　Photo：石田

幼体　　Photo：石田



イオウイロハシリグモ

硫黄色走蛛　*Dolomedes sulfureus* L.Koch 1878

キシダグモ科

100 %

草間徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 12 ～ 26 mm

♂ 約 12 ～ 18 mm

【観察ポイント】脚が長い。Photo は無斑型。無斑型は全体に淡い茶色で幼体の斑紋に似ている。

【習性】草間徘徊性で，ほとんどどこにでも見られるハシリグモ。特に幼体は下草のある場所には必ず生息する。色彩や斑紋には変化が多い。成熟は 6 月下旬だが，越年する成体もいる。【卵嚢】灰色球形の卵嚢を上顎でくわえて保護する。産卵は 7 月から。出嚢が近付くと草間に不規則に糸を張った保育網を作り卵嚢を置き，幼体が分散するまで保護する。

【トピック】かつては別種として記載されていたイオウイロハシリグモの多型を同一卵嚢の幼体の飼育により同種と証明したのは中平清である。中平の交配結果（1978）では，スジブト型×イオウイロ型やスジボケ型×イオウイロ型の親からは親と同じ二型の子が得られた。この型の交配では親の雌雄を換えても結果は等しい。また，スジブト型♂×スジボケ型♀の親から生まれた子はスジブト型とイオウイロ型でスジボケ型の子は得られなかった。

コハシリ型

スジブト型

イオウイロハシリグモの変異型

左は黒い斑紋が目立つコハシリ型，右は白い縦条と黒い縦条を持つスジブト型のイオウイロハシリグモ。体長の違いも大きく，南にいくにつれて大型になる傾向があり，東京周辺では雌成体で 12 ～ 15mm に対して，四国では 20 ～ 25mm に達する。

＜コハシリ型♀：新井；スジブト型♀：石田＞

スジアカハシリグモ（成熟：夏）

Dolomedes silvicola Tanikawa& Miyashita 2008　**キシダグモ科**

♀ 約　11 ～　18 mm　♂ 約　9 ～　5 mm

森林内で見られる。腹背の縦条の後方 4 分の 1 のところに一か所だけくびれが見られるが、類似種スジブトハシリグモでは後方のふちが波うつ。スジアカハシリグモの背甲には色彩変異があるが，スジブトハシリグモにはない。外雌器の赤い部分の有無（スジアカハシリグモにはある）でも区別できる。

＜♀ Photo：森田＞

スジブトハシリグモ（成熟：夏）

Dolomedes saganus Bös. & Str. 1906　**キシダグモ科**

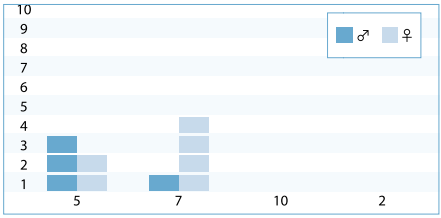
♀ 約　14 ～　19 mm　♂ 約　10 ～　14 mm

水田や池の周囲に見られる。森林内で見られるのは主にスジアカハシリグモや他のハシリグモである。昆虫以外に，オタマジャクシや小さな魚を捕えることがある［仲條，赤羽］。危険を感じると水面を走って逃げたり，水中にもぐって敵から逃れる。水中にもぐると半日は水面に出てこないこともある。

＜♀ Photo：谷川＞

♀　Photo：腰高

♂　Photo：谷川



シボグモ

絞蛛　*Anahita fauna* Karsch 1879

シボグモ科

100 %

地表徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 9 ～ 10 mm

♂ 約 7 ～ 8 mm

【観察ポイント】背甲中央に太い一文字線がある。この線は両側も太く黒い。その外側にもギザギザの縦線、腹背には絞り紋様がある。眼の配列は前から 2・4・2 と並ぶように見える。コモリグモの後中眼をやや小さくしたように見えるため，眼の配列からコモリグモと間違えられることがある。コモリグモの眼は 4・2・2 と並び，後中眼が大きい。シボグモモドキの眼はシボグモよりコモリグモに近い。

【習性】落葉層表面を徘徊する代表的な種。背甲の太い縦線は幼体でも明確。【卵嚢】直径約 10mm，内嚢と外嚢の二重構造で，外嚢下面の円形の幕（直径約 20mm）上に壺を作る。この壺に卵を 200 個ほど産みこむ。壺の口を閉じ，外嚢の上幕を作り，母グモは卵嚢を守る［中平］。産卵は 6 月中旬，7 月中旬に出嚢。

【トピック】*Anahita* はペルシャの水の女神，*fauna* も予言の女神名に由来する。日本では本州にシボグモ科のクモはシボグモしか生息していないが、熱帯にはシボグモ類は日本のハシリグモ類やアシダカグモ類のような生息をしており、大型種も多い。

ハラクロコモリグモ（成熟：春）
Lycosa coelestis L.Koch 1878　**コモリグモ科**

♀ 約 12 ～ 16 mm　♂ 約 10 ～ 12 mm

シボグモより一回り大形の種。コモリグモ科の前眼はほぼ一列に並び，後眼が大きい。コモリグモは視覚に優れているし，色覚もある。ハラクロコモリは腹面が黒色（Photo 参照）。【生活】室内飼育で 5 ～ 6 月と 7 ～ 8 月に産卵，8 ～ 9 月に 3 度目の産卵メスもあり。平均 202 卵 (1 度目) と 77 卵（2 度目)。7 月 19 日の出嚢幼体は雄 6 ～ 8 回，雌 7 ～ 9 回の脱皮で成熟 [宮下和]。
＜♀ Photo：池田＞

キバラコモリグモ（成熟：春、夏）
Piratula subpiraticus (Bös. & Str. 1906)　**コモリグモ科**

♀ 約 5 ～ 8 mm　♂ 約 5 ～ 6 mm

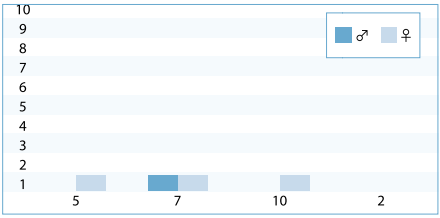
キバラコモリグモ（*Piratula*）属のクモは背甲の Y 字紋が特徴である。中形から小形の類似種が多く，識別は難しい。水田害虫の重要天敵である。稲株のすきまに管状住居を作る。【生活】越冬世代は大きく，夏世代は小さい。12 ～ 105 卵（平均 53.5），7 月以前に卵が多く，8 月以後は少ない。越冬世代の卵数は多い。夏世代は出嚢後 5 ～ 6 回の脱皮で成熟，越冬世代は 7 回脱皮で成熟 (成体は 10 令)[浜村]。＜♀ Photo：新井＞

シッチコモリグモ（成熟：夏）
Hygrolycosa umidicola TANAKA, 1978　**コモリグモ科**

♀ 約 6 ～ 8 mm　♂ 約 6 ～ 7 mm

成体出現期 6 ～ 11 月．主に湿原，池や河川周辺の湿度の高い草原に生息。産卵期は 6 月と 9 月の年 2 回報告されている [新海]。飼育下で出嚢した子グモが親の腹部に乗ることなく分散する [小野]。母親の腹部の毛は先球を持たない。先球が無いのに子グモが母親の腹部に乗る種（カワベ，モリ）もいる [輿石]。カガリビ，クロコも先球はないが子グモが腹部に乗る [藤井]。
＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：安藤



カバキコマチグモ

樺黄小町蛛　*Chiracanthium japonicum* Bös. & Str. 1906

コマチグモ科　　葉巻住居徘徊性

80 %

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 10 ～ 15 mm

♂ 約 10 ～ 15 mm

【観察ポイント】顎の黒や脚先の黒が目立つ。腹部の淡緑色が美しい。

【習性】イネ科やススキの葉をちまき状に巻いて住居巣とする。河川敷の草原などに生息する。オスの成熟は 6 月でメスを探索して徘徊する。オスは室内に入りヒトを咬むことがあり，咬まれた箇所は激痛を生じる。【生活】メスは発育とともに硬い葉を利用するようになる [弘中]。亜成体メスは糸でしきりを作る。オスより半月遅れて最終脱皮後，メスは仕切りを咬み破り，交尾する [新海明ら]。【卵嚢】産卵は 7 ～ 9 月, 80 ～ 220 卵, 最少で 48 卵。卵は約 10 日でふ化し，子グモは数日間，親グモの周りに集まっている。第 1 回目の脱皮後子グモは一斉に母親の体に食いつき，3 ～ 4 時間から半日で親を食べてしまう。

【トピック】有毒種として知られる。産卵前のメスは腹部が大きく攻撃的で，咬まれると神経毒による麻痺 [大利] や，アミン系の発痛成分のため激痛を生じる [鴇田ら]。平塚市では「化け物」と呼ばれていた [大野]。

ちまき状の住居

葉をまげて作る住居は時期により構造に違いがある。高知で６月中旬の「大きく口の開いた空室」は多くはオスの「脱皮室」である。６月中下旬の「密室」(産室より小型)は①若い雌雄の「脱皮室」，②若メスと成オスの同居(仕切はメス)，③成体雌雄の同居(交合室)．同時期の「交合控室」は成体オスの住居で口をおおう糸幕は薄い。６月下旬～７月上旬の「成体メス住居」ではメスがオスを待つ（オス控室より幕が厚い）．同時期の「産室」には外壁に糸かがりのしてあるもの，脱皮室を利用したものがある[中平]。

<住居 Photo：谷川>

ヤマトコマチグモ（成熟：春、夏）
Chiracanthium lascivum Karsch 1879　**コマチグモ科**

♀ 約　10 mm　　♂ 約　10 mm

形態・生態はカバキコマチグモに似るが，母親食いは無い。カバキコマチグモよりやや小形。成体は５～９月。晩春から初夏に成体がいたらカバキコマチではなくヤマトコマチである。平地に多く生息。水田，河原など水辺に多い。カバキコマチグモ同様，夜間に住居より出て，葉上を歩きながら接近してくる小昆虫を捕える。母親は子グモが巣立つまで住居の中で保護する。

<♀ Photo：森田>

ヤサコマチグモ（成熟：夏）
Chiracanthium unicum Bös & Str. 1906　**コマチグモ科**

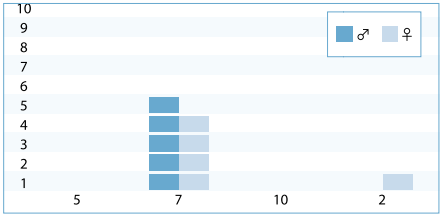
♀ 約　5 ～　8 mm　　♂ 約　5 ～　8 mm

カバキコマチグモの半分のサイズしかない。池や沼の周辺，樹林地の周辺，林道などの草間，樹木の枝葉間に草の葉を巻いた住居の中に潜む。【卵嚢】成熟は５月と９月，産卵期には丁寧な住居を作り，中で産卵し，子グモが孵化するまで保護している。【生活】大磯町でハコネウツギの葉の筒状住居にオス，隣の葉の筒状住居にメス亜成体[池田]。10 月末に出嚢した幼体は飽食飼育下で１月 14 日に７令でオスは成熟[稲葉]。

<♀と産室内幼体 Photo：水野>

♀　Photo：腰高

ヒゲナガツヤグモ♂　Photo：初芝



ヤバネウラシマグモ

矢羽浦島蛛　*Phrulolithus pennatus* Yaginuma 1967

ネコグモ科

60 %

落葉徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 3 ～ 5 mm

♂ 約 2.5 ～ 4 mm

【観察ポイント】黒色の地色に金色の毛をもつ。腹背の矢羽根紋が目立つ。

【習性】落葉層の表面を徘徊する。背面に金色の毛が輝く小形種。成体は 6 ～ 8 月に見られる。トビムシなどをよく捕食する。虫の方向に向き直りとびかかるが，取り逃がすことも多い。キイロショウジョウバエ 1 頭を 40 ～ 60 分で食べる。食欲がない時はハエが脚の上を通っても取らない。脱皮の際にはドーム型の脱皮室を作る。脱皮には 37 ～ 51 分かかる。メスを探すオスは触肢を地面にたたくように震わせている。オスはメスの後方から体によじ登る。交尾時間は左右合わせて 2 時間程。交尾済みのメスはオスから逃げた［稲葉］。産卵期は 7 月中旬～ 8 月中旬。【卵嚢】2 個以上，卵嚢長径は 7 ～ 8mm，出嚢幼体数は 5 ～ 8 頭。越冬態は幼体。

【トピック】落葉徘徊性の種類でヤバネウラシマグモとヒゲナガツヤグモ *Micaria dives* (Lucas 1846) ♀♂ 2 ～ 4mm は金色に輝く毛を持つ。ワシグモのなかにもフタホシテオノグモ（39 頁）など金色の毛を持つ種類がある。

ウラシマグモ　（成熟：春、夏）
Phrulolithus nipponicus Kishida 1914　**ネコグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

乾燥に弱い。ヤバネウラシマグモより少し小さい。【卵嚢】長径 6.5 ～ 7.5mm を 3 ～ 5 個産卵，神奈川県平塚市で 6 月 24 日交尾，6 月 28 日卵嚢作成，7 月 2 日二つ目の卵嚢を作る。7 月 19 日に最初の卵嚢から 1 頭出嚢し，7 月 21 日 3 頭出嚢した［杉崎］。出嚢数は 4 ～ 6 頭［稲葉］。産卵期は 6 ～ 7 月。越冬態は亜成体。
<♀ Photo：谷川>

キレオビウラシマグモ（成熟：春、夏）
Phrulolithus coreanus Paik 1991　**ネコグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ウラシマグモよりやや小さい。平地から山地にかけて広く生息。樹林地，林道などの落葉の中，草間の地表，土壌のすき間，下草の葉上など，ウラシマグモと同所的に生息するが，成熟や産卵はウラシマグモより一週間早い。【卵嚢】飼育下で卵嚢長径 6 ～ 7.5mm を 3 ～ 5 個産卵，出嚢数 3 ～ 4 頭［稲葉］。【生活】越冬態は亜成体。丹沢での上限は 460 m。
<♀ Photo：谷川>

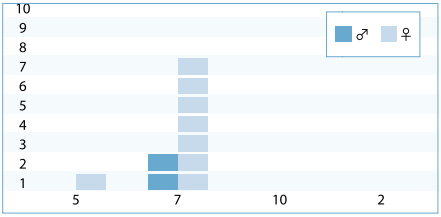
イナズマウラシマグモ（成熟：春、夏）
Phrulolithus claripes (Dön.&Str.1906)　**ネコグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ウラシマグモとほぼ同じ体長と斑紋（図参照）だが，神奈川県箱根の大涌谷の個体群ではウラシマグモとは同所的に生息しない。関東では山地によく見られる［池田］。【生活】トビイロケアリの生活する地区に生活する。第 1 脚を振って歩く。夜間，アリを攻撃するようだ［小松］。本種とウラシマグモ，キレオビウラシマグモはきわめてよく似ているので，腹背の斑紋を図示した。
<♀ Photo：谷川>

♀　Photo：安藤

幼体　Photo：池田



アサヒエビグモ

朝日蝦蛛　*Philodromus subaureolus* Bös. & Str. 1906

エビグモ科

90 %

草間徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 6 ～ 7 mm

♂ 約 4 ～ 5 mm

【観察ポイント】斑紋は淡い。背甲両側だけが茶褐色。腹部は淡い

【習性】一見クモがいないような生け垣でも葉をたたくと幼体がバラバラ落ちてくる最も普通のクモ。葉間を徘徊し，小さな虫を捕獲している。【卵嚢】産卵期は 7 ～ 8 月で，葉の上に白色の円盤状の卵嚢を作り．親はその上にかぶさるようにして保護し，指でつついても逃げない．1 卵嚢中の卵数は 20 ～ 35 個。糸を流してよく移動する。【生活】7 月に出嚢した幼体を室内飼育すると，越冬までに 6 ～ 7 回脱皮し，翌春 4 月から 3 回脱皮して 6 月に雄になった［宮下和］。

【トピック】日本のクモで日長条件と生活史関係が解明された最初の例である。若令幼体期には短日（11L）で発育が促進され，中令以後になると逆に長日（16L）で促進される。夏季は長日によって発育が遅れ，秋季の短日によって長日型の反応に変化するが，冬季は短日と低温によって発育は停止し，春季の長日と気温上昇で発育が促進される。年 1 化性で，成体が一斉に出現するわけである［浜村徹三］。千葉県内のワラ巻き調査では樹種によらず優占種だった［浅間］。

キンイロエビグモ（成熟：春）
Philodromus auricomus L.Koch 1878　**エビグモ科**

♀ 約　7 ～　9 mm　♂ 約　7 ～　8 mm

アサヒエビグモによく似ているが，腹部側面が茶褐色の斑紋がはっきりしている点で異なる。全体に暗色の個体もある。冬のワラ巻きの中などには 50%以上も見つかる。自然条件下では冬季はスギ，マツなどの太い樹木の樹皮下に袋状住居を作って越冬する。

<♂ Photo：谷川>

キハダエビグモ（成熟：春、夏）
Philodromus spinitarsis Simon 1895　**エビグモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

樹肌に擬態する。樹幹に静止して動かないため見つけにくい。平地から低山帯にかけて見られ，都市公園などにも生息する。【卵嚢】5 ～ 7 月に成熟し，メスは樹幹に産卵し，卵嚢を保護する。【瞬間的体色変化】刺激すると樹から落下し，腹部後半が瞬間に黒色となる。刺激に慣れると体色変化しなくなる［池田］。

<♀と卵嚢 Photo：池田>

キエビグモ（成熟：夏）
Philodromus emarginatus (Schrank 1803)　**エビグモ科**

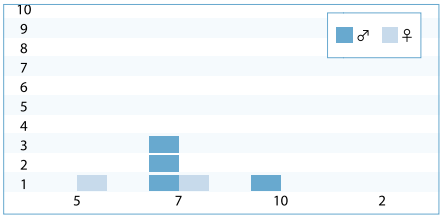
♀ 約　7 ～　8 mm　♂ 約　5 ～　6 mm

体色は紫褐色ないし灰褐色で白斑および暗色斑が多くある。背甲には灰色の U 字斑があり，腹部には灰色の丸い小斑点が多数散在している。山地の樹上や草間に生息する。【卵嚢】6 ～ 7 月に成熟し，メスは葉上に産卵し，卵嚢を保護する。

<♀と卵嚢 Photo：千国>

♀　Photo：石田

♂　Photo：石田



アズチグモ

揉蛛　*Thomisus labefactus* Karsch 1881

カニグモ科

80 %

葉上徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 6 ～ 9 mm

♂ 約 2 ～ 4 mm

【観察ポイント】眼列に三角形の暗色紋があることで識別しやすい。

【習性】花の中や葉裏に潜み，シジミチョウや小型の飛翔性昆虫を捕獲。オスは非常に小型で，成体になるとメスの腹部に乗っていることが多い[新海]。【生活】産卵は7～8月，チガヤやヨシなどの葉をまげて産室を作る。第一卵嚢の出嚢数は平均171個，第2卵嚢の出嚢数は平均16.5個だった。9月中旬の出嚢幼体は越冬前に1回脱皮，越年して4月から3回の脱皮でオスが5月に成熟，メスは5回の脱皮で6月に成熟。飼育下で成体の平均寿命はメスが151日，オスが160日[宮下和]。

和名のアズチは腹部形が弓の的場の的山（アズチ）に似ていることに由来する。昆虫写真家の佐藤有恒氏が体色変化はUV反射率の変化であることを初めて発見した（1987年）。その後，ヨーロッパ産のアズチグモや近縁種はUV反射を欠き，オーストラリア産・マレーシア産・インド産の種はUV反射特性を持つことが分かった。オーストラリアのハチは花だけでなく、花の上のUV反射のクモに接近していく。

ヒメハナグモ（成熟：夏、秋）
Misumena vatia (Clerck 1757)　**カニグモ科**

♀ 約　5 ～ 11 mm　♂ 約　3 ～ 4 mm

成体は 5 ～ 10 月 [新海]。箱根町では仙石原で記録がある [谷川，赤羽]。【生活】オスはメスの背にのり，脚で触れながら素早く全身をめぐり，触肢で外雌器付近をさするとメスは静止。オスはメスの腹部に回りこみ触肢を挿入。1 分間で 28 ～ 40 回を 5 分かかって注入。【卵嚢】8 月 24 日産卵，9 月 1 日孵化，11 日出嚢，14 日団居終了。子は 139 頭。他の 1 例では産卵から 8 日目に孵化，子は 48 頭 [福島]。　<♀ Photo：池田>

♀

♂

ガザミグモ（成熟：春、夏）
Pistius undulates Karsch 1879　**カニグモ科**

♀ 約　9 mm ～ 12 mm
♂ 約　4 mm ～ 5 mm

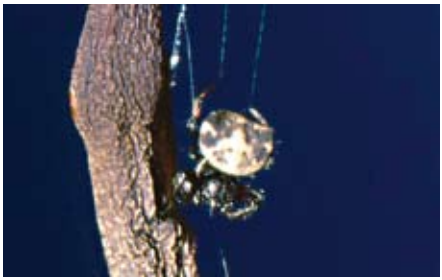
山地に多く生息。花の中や上で長い前脚を広げて獲物を待つ伏兵型徘徊性。【卵嚢】春に 30 ～ 40 卵 [植村，山川・熊田]。【生活】越冬態は樹皮下で亜成体または成体。求愛オスが亜成体メスの腹背につかまっている。ほぼ 1 日半後に脱皮したメスの腹下に回り交尾 [小松]。
<♀♂ Photo：森田>

アシナガカニグモ（成熟：夏）
Heriaeus melloteei Simon 1886　**カニグモ科**

♀ 約　6 ～ 8 mm　♂ 約　5 mm

オス亜成体はメスそっくりで，最終脱皮でオス型に変化する [泉]。成体は 6 ～ 9 月に出現。全体が白色の毛におおわれている。里山から山地に生息。草原や山道の草の葉や花の上にいて待ち伏せ捕食をする。【分布】局所分布をする。埼玉県・東京都・愛知県・三重県でレッドデータブックに載っている。
<♀ Photo：谷川>

♀ Photo：新海



♂ Photo：新海

腹背図：加藤む

トゲグモ

棘蛛　*Gasteracantha kuhlii* C.L.Koch 1837

コガネグモ科

局地的

垂直円網

成熟：春 **夏** **秋** 冬

♀ 約 6 ～ 8 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】腹部が箱型で突起をもつ特異な形態のクモである。腹部は箱形で黒色の点斑が全身にある。

【習性】局所分布する。【網性】比較的高いところに垂直円網を張る。網の枠糸には数 cm おきに微小な白色の球（糸をたぐって集めたもの）をつけている［新海］。沢沿いや道路沿いに多い。【卵嚢】夏に樹皮上に産卵され，地衣類に似た白色である。9 月 5 日と 10 月 5 日の産卵例もあった。秦野市では出嚢日は翌年の 4 月 19 日，5 月上旬が多い［加藤む］。【生活】神奈川県松田町で，7 月 23 日にメス網へのオスの同居が観察された［池田］。飼育下でオスは 5 齢で成熟（出嚢時 2 齢），雌は主に 7 齢で成熟，8 齢もあった。未交尾メスは寿命が長かった［加藤む］。

【トピック】トゲグモのメス幼体は腹背に白い十字架紋様を背負っている。オス 5 齢，メス 7 齢で成熟する場合の図を示した。7 齢では十字架紋様が消えて後端に髑髏模様が浮き出ている［加藤む］。

♀

卵嚢

ムツトゲイセキグモ（成熟：夏、秋）
Ordgarius sexspinosus (Thorell 1894)　**ナゲナワグモ科**

♀ 約　7 mm　～　11 mm
♂ 約　2 mm

雌雄とも背甲前部に 2 本，後部に 4 本の 6 突起。公園から山地まで生息。かんきつ類・ツバキ・クリ・クワの樹に発見例。【網性】昼間は樹木や草の葉裏に静止し，夕方から第 2 脚先端より粘球を吊るし，接近する蛾に粘球をぶつけて捕獲。【生活】年 1 世代，3 ～ 6 回産卵。＜ Photo：新海＞

マメイタイセキグモ（成熟：夏、秋）
Ordgarius hobsoni (O.P.-Cambridge 1877)　**ナゲナワグモ科**

♀ 約　6 ～　7 mm　♂ 約　2 mm

形態は腹部に多くのコブをもつ点で他種から容易に見分けられる。オスの背甲の突起は後方に 4 本だけである。【網性】生態・網型はムツトゲイセキグモに似る。投げ縄作成行動はトリノフンダマシの横糸作成行動と共通 [新海明]。【卵嚢】突起のついた暗褐色の卵嚢を作成，56 ～ 72 卵 [鈴木勝]。【生活】8 ～ 9 月上旬にかけて成熟。
＜♀ Photo：高橋＞

腹背

側面

ゲホウグモ（成熟：夏）
Poltys illepidus C.L.Koch 1843　**コガネグモ科**

♀ 約　12 mm　～　18 mm
♂ 約　4 mm　～　6 mm

同じ母から生れた子でもコブには形態変異がある [石野田，小笠原]。【網性】夜間にレコード盤を連想させる目の細かい垂直円網を張る。横糸は最小 67 ～最多 132 本 [船曳]。【卵嚢】530 ～ 600 卵 [石井]。【生活】5 月 29 日に出嚢，出嚢から最終脱皮まで平均 105 日（オス 3 頭は 35 日）[小笠原]。＜♀ photo：梅本直美＞

北上により関東で発見されるクモ

日本各地の年平均気温は次第に上昇している。これは『理科年表』を見れば明らかであり，地球史からみて「地球は温暖化していない」とする見解もあるが，100 年前と比べて「地域が温暖化している」事実は曲げようがない。1990 年の東京都は（15.6℃），30 年前の 1960 年の静岡市の温かさである（1950 年の東京の年平均気温は 10.2℃だった）。そこで，1960 年には静岡までしか分布していなかったクモが 1990 年には東京に分布する可能性があり，代表的なクモがスズミグモであった［新海栄一，池田］。スズミグモは 2012 年には太平洋側は埼玉県，日本海側は石川県まで北上している。

他にもチュウガタシロカネグモやマルゴミグモといった静岡以西にしか分布していなかったクモが 1980 年以降には神奈川県や東京都内でも発見されるようになってきた。今後，北上して関東地方に分布しそうなクモに，2011 年には西日本から静岡県までしか分布していないクモがあげられる。マミクロハエトリ（83 頁），シマササグモ（73 頁），ホシスジオニグモ，ホシヒメグモモドキといった種が該当する（新海栄一『日本のクモ』参照）。

ホシスジオニグモ *Neoscona theisi* は海岸の草間・低木間に垂直円網を張る。昼間は網の一端の枝や葉裏に潜んでいる。色彩・斑紋の変異が多い［新海栄一］。ホシヒメグモモドキ *Theridula gonygaster* は林道などの草の葉裏，樹木の葉裏に不規則網を張る。東京都で発見されたことがあるが，いまは三重県が北限となっている。

マルゴミグモ♀　Photo：谷川

ホシスジオニグモ♀　Photo：谷川

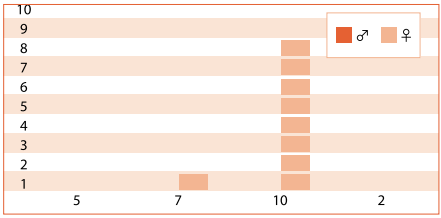
ホシヒメグモモドキ幼体　Photo：谷川

《 第 4 部 》　秋に成熟するクモ

・ナガコガネグモ
・ジョロウグモ
・メガネヤチグモ
3 種

♀　Photo：森田

♂　Photo：水野



ナガコガネグモ

長黄金蛛　*Argiope bruennichii* (Scopoli 1772)

コガネグモ科

100 %

垂直円網

成熟：春 夏 **秋** 冬

♀ 約 20 ～ 25 mm

♂ 約 6 ～ 12 mm

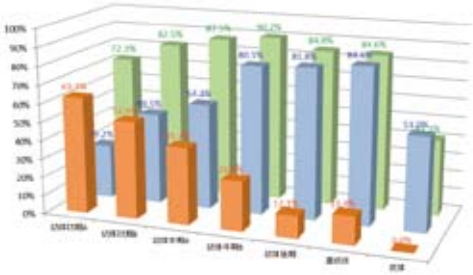
【観察ポイント】腹背の黄色と黒色の縞模様がコガネグモより多く、腹部がコガネグモより細長い。オスはメスより細い。刺激により網をはげしく前後にゆすり，黄色の鱗が収縮して一面に網目状を呈し，腹部正中斑および後端にある数本の縦斑が太くなる。

【習性】河川草原によく造網するが生息域は平地から山地帯まで広く生息し、丹沢での上限は 1200 m（山地帯）。【網性】草原や林縁の草間，水田の稲の間などに体のわりには小さな（直径 20 ～ 50cm）垂直円網を張る。獲物はバッタ，ガ，ハエ，ヨコバイなどが多く，獲物がかかると捕帯で巻いてから中心に持ち帰って食べる［新海］。渓流上では網にハアリとアブラムシが高くかかり，ユスリカやカゲロウは低かった［吉田真］。かくれ帯の変化・交尾と産卵に関しては次頁参照。

【トピック】ファーブル『昆虫記』でも詳しく観察されているヨーロッパと日本の共通種である。高知県ではコガネグモを牛若，本種を稲牛若と呼ぶ［中平清］

Photo：水野

幼体と成熟



かくれ帯の変化：水野

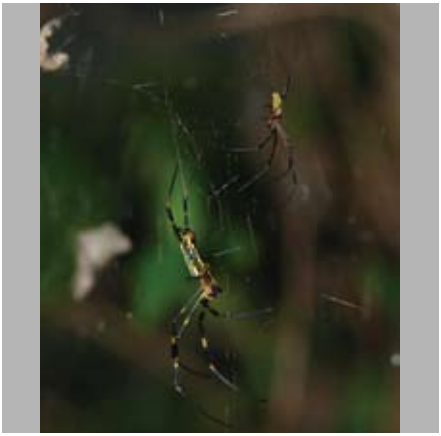
円網の中央にギザギザのかくれ帯を付ける。大抵はシート状を伴っている。出嚢直後から帯状のかくれ帯があるが，発育が進むにつれてギザギザのかくれ帯よりも帯状のものを付けるようになる［水野］。6 月初め出嚢後にオスは 6 回，メスは 7 ～ 8 回脱皮をし，50 ～ 80 日後の 8 ～ 9 月に成熟。オスはメスより 10 日ほど早く成熟しメス網に同居する。9 ～ 10 月に 4 ～ 6 個のつぼ型卵嚢を作る［宮下和］。

交尾と産卵

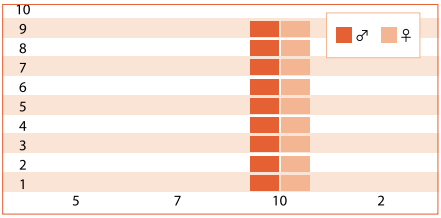
雌雄の同居期間はお盆頃で短い。オスはメスの最終脱皮直後に求愛するがメスに捕食される例がある［吉田真］。オスは交尾糸を作らずメスの網上で求愛し，交尾は数秒［水野］。ドイツの交尾実験ではオスの触肢先端は折れてメスの交尾孔に刺さった。求愛時間が長いと（平均 307 秒），オスがメスに共食いされる率が 56.3％に低下した。先オスの求愛を平均 47 秒で中断させると共食い率は 76.5％。メスは成熟するとクエン酸から作った物質を性フェロモンとして放出するが，この物質は交尾すると放出されなくなる［池田］。産卵は夜間，卵嚢作成には半日かかる。堺市で平均 2.3 個（最大 6 個）を作り，29 ～ 1363 卵，1 頭の子グモ数は平均 650 頭，孵化・脱皮しているが通常年内に出嚢はしない。5 ～ 6 月出嚢後まどいをせず分散していく［西野］。

＜♀♂同居及び卵嚢 Photo：水野＞

♀　　Photo：石田



♂♀　　Photo：腰高



ジョロウグモ

女郎蛛　　*Nephila clavata* L.Koch 1878

ジョロウグモ科

100 %

蹄型円網

成熟：春 夏 **秋** 冬

♀ 約 17 ～ 30 mm

♂ 約 6 ～ 10 mm

【観察ポイント】色彩・斑紋及び三重構造の網，五線譜状の網目で識別できる。腹背に黄色と青色の横縞がある。

【習性】メスは 9 月に成熟。オスはメスより早く成熟し亜成体の網に同居し，メスの最終脱皮直後に求愛・交尾する。交尾後オスは新たなメスを探す。繁殖期後半にはメスの網に複数のオスが見られ，メス近くの中心オスがオス同士の威嚇誇示行動の勝者である。個体数の多い場所では枠糸を共有して大集団を成すことがあるが，集団餌捕獲はしていない。イソウロウグモ類やアシナガグモ類など他の小形のクモが網に居候する。蹄型円網に関する説明は次頁参照。成長につれ，網の上側の捕獲域が狭くなり，産卵近くなると金色の糸が見られるようになる。網を半分更新することがあり，更新した網は輝くので区別できる。千国安之輔のデータからは網径は体長の約 23.4 倍。

【トピック】和名の由来では「上臈」蛛という見解もある。世界のジョロウグモ属では最も北に分布する。

幼体と蹄型円網

卵越冬し，5 月末に出嚢した幼体は一週間のまどい・脱皮の後，分散していく（平均 200 頭，最大 1000[西野]）。幼体の網も主網の前後に補助網を持つ三重構造なので識別は容易。刺激すると網をゆする。足場糸を切らずに残すため横糸が多い。また，縦糸も糸を分割するため多くなる [新海明]。背後の補助網には食べカスや脱皮殻が付けられる。オス 8 齢，メス 9 齢で成熟。

＜幼体 Photo：池田＞

捕食行動

自然状態ではユスリカなど 3mm 以下の双翅類昆虫を捕食した。下水溝上の網にかかった 270 頭の餌のうち 64% は網から逃れた。89% は自力脱出，他は網の「引き」によって落ちた．通常，クモは網の引きで餌を確認，走り寄って上顎で餌を「くわえ」，網から「引きはがし」て，餌をこしきに運び，摂食する。この「くわえ・引きはがし戦略」は大型の餌捕獲には適していない。大きな餌では，鱗翅類は主にまずかみつく「バイト先行戦略」によって，ガガンボとトンボは「くわえ・引きはがし戦略」「バイト先行戦略」「ラップ先行戦略（最初に虫を糸で巻き上げる）」の 3 戦略によって捕獲された [吉田真：和訳は池田]。

＜共食い Photo：池田＞

スズミグモ（成熟：夏）

Cyrtophora ikomosanensis (Bös. & Str. 1906) **コガネグモ科**

♀ 約 14 ～ 23 mm　♂ 約 3 ～ 5 mm

赤い派手な模様が目立つ。埼玉県まで北上している。【網性】樹間にドーム状の 30 ～ 80cm の絹網を張り，メスはドームの天井部に止まる。キヌアミグモと同様に網目は正方形であり，幼体の網でもジョロウグモとは異なることが分かる。網には粘性がない。

＜♀ Photo：安藤＞

日本のナゲナワグモ科の研究（2）

イセキグモの投げ縄習性の発見

大きな粘球を吊り下げて持ち，夜間，蛾にぶつけて採るナゲナワグモ（アメリカの *Mastophora* 属やオーストラリアの *Dicrostichus* 属）の特異な習性は有名だったが，外国での話であり，まさかアジアに同様の投げ縄習性をもつクモがいるとは意外だった。しかし，新海栄一氏は日本のイセキグモ属がナゲナワグモ属に近縁であることから，イセキグモに投げ縄習性があることを予測していた。とはいえ，イセキグモ属のクモは滅多に採れない。観察の機会はなかなか訪れなかった。

1980 年 8 月 31 日，新海明氏は房総半島の本沢林道でマメイタイセキグモを 2 頭発見した。明氏にとっては二度目の発見だった。「採集したら生かしたまま持ち帰ること」というのが，兄の栄一氏の希望だった。栄一氏はメス成体を自宅の庭に放した。そして夜になるのを待つ。観察を始めて 2 日目の 9 月 5 日，クモは投げ縄を作り，粘球を吊り下げた。北米産の種とは違い，第二脚で粘球を持っていた。イセキグモが投げ縄習性をもつことが分かった瞬間だった。写真は学会誌 Atypus の表紙を飾った。

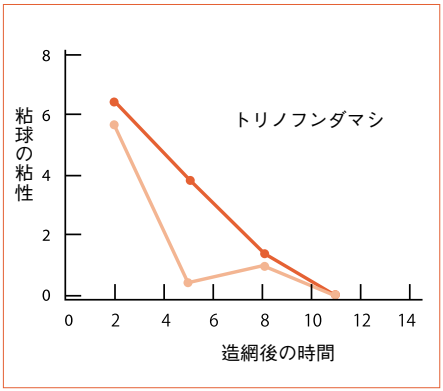
5 日後の 9 月 10 日に安藤博司氏が近縁のムツトゲイセキグモが同じ習性をもつことを観察した。それまでほとんど見つからなかったこれらのクモに注目が集まると関心をもつひとが増え，次々と見つかるようになった。談話会の観察会ではムツトゲの記録率は三割を超え，七月の合宿が西日本の場合には必ず発見される

マメイタイセキグモ粘球　Photo：新海

粘球 4 個のムツトゲ♀　Photo：新井

カトウツケオグモ♀幼体　　Photo：森田

カトウツケオグモ♂　　Photo：新井



クモとなっている。

粘球は1個とは限らず6個も吊るすことがある。粘球作成行動はトリノフンダマシの横糸作成行動の横糸を短縮したものであった［新海・新海明］。つまり，投げ縄をつくるイセキグモと同心円状円網をつくるトリノフンダマシは同じ仲間だったのだ。オニグモやコガネグモの円網と似ているのはみかけ状のことだったのである。さらに投げ縄習性をもつクモにはオスの蛾をフェロモンで誘引するという特性があった。

北米のナゲナワグモでは蛾を誘引する性フェロモンが体から分泌されることが確認されている。性フェロモンが粘球にあると誤解した記述が多いが，性フェロモンを分泌するのは粘球ではなく，クモの体である。クモはフェロモン材料をブレンドして数種の蛾を誘引している。

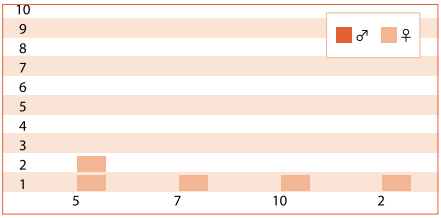
日本のイセキグモで飼育下で捕食された4科10頭の蛾の分析では種の選好性やオス選好性は有意でなかった［甲野・初芝］が，野外で捕食された蛾では特定の蛾に対する選好性が示唆された［吉田嗣郎］。

また，トリノフンダマシ類の粘球は湿度が低いと急速に粘性が低下する［宮下直］。造網の条件に関しては，ワクドツキジグモに関して湿度85％以上という研究結果［谷川］があるので，おそらくナゲナワグモ科のクモ（トリノフンダマシ類，ツキジグモ類，イセキグモ類）に共通の性質であろう。

カニグモ科で鳥糞に擬態するカトウツケオグモ *Phrynarachne katoi* Tikuni 1955（♀8～13mm, ♂2～3mm）に似たヘリジロツケオグモでは，体から餌となる虫を誘引するようなフェロモンは分泌されていなかった。

♀　Photo：池田

♀♂交尾　Photo：初芝



メガネヤチグモ

眼鏡谷地蛛　*Pireneitega luctuosa* (L.Koch 1878)

ヤチグモ科

40 %

住居付漏斗網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 13 ～ 15 mm

♂ 約 11 ～ 13 mm

【観察ポイント】クモよりも街中の管状住居と棚網でメガネヤチと識別するほうが容易である。

【習性】都市型のクモで，公園や庭園などに多く，山地や樹林地にはほとんど見られない。【網性】人家など建造物の隙間に管状住居を作り，入口に小さな漏斗網という棚網を張る。秋または早春にオスはメスを探して徘徊。【産卵】飼育中に 4 回産卵，32 ～ 59 卵，合計 175 個。小松敏宏が報告している幼体の卵食はなかった。一ヶ月の同居後，母親は子グモに食べられた［小笠原］。【求愛】オスの求愛は探索･接近，ドラミング，脈動，体叩き，抱き上げ，網上徘徊，マウンティング，抱きおこし，身づくろい，挿入，移精，分離と進んだ。求愛から分離までは 2 時間または 22 時間 40 分。オス同士が組み打ちになる闘争でより大きいオスが勝つ。最終脱皮後すぐにはメスは交尾しない。オスはメスの住居内で交尾後ガードする。メスは複数オスと交尾可能。交尾後 10 ～ 11 日間経過で，オスの求愛を拒否［中山美和ほか］。

【トピック】母が捕獲餌を子グモに与える幼体世話を行う。子は徐々に分散するものの，1ケ月以上の同居で最高4回脱皮した［谷川･堀］。

アズマヤチグモ（成熟：秋）
Coelotes kitazawai Yaginuma 1972　**ヤチグモ科**

♀ 約　9 ～ 10 mm　♂ 約　6 ～ 8 mm

人家性でなく野外に平地から山地まで広く生息。【網性】下草の根元付近，落葉下，草間の石や倒木の下などに管状住居を作り，入口に小さな棚網を張る。クモは住居の入口に静止し，網に獲物が落ちると，飛び出して捕え，住居に引き込む［新海］。シモフリヤチグモよりも多く記録されている。
<♀ Photo：安藤>

ヤマヤチグモ（成熟：秋）
Tegecoelotes corasides (Bös. & Str. 1906)　**ヤチグモ科**

♀ 約　10 ～ 13 mm　♂ 約　10 ～ 11 mm

ヤチグモ類は空中分散しない。地域ごとに種分化しており，似た種が多い。外形や斑紋からの識別は不可能である。【網性】里地から山地にかけて多く,林縁森林内の草間に大型の棚網を張る。本種の造網場所や網の形状，構造はヤチグモ科よりクサグモなどタナグモ科に近い。♂の触肢と♀の外雌器の形状はヤチグモ科に近いため，現在はヤチグモ科として扱っているが，今後タナグモ科に移る可能性もある。<♀ Photo：谷川>

カチドキナミハグモ（成熟：秋）
Cybaeus nipponicus (Uyemura 1938)　**ナミハグモ科**

♀ 約　9 ～ 12 mm　♂ 約　9 ～ 12 mm

地域により種が限定されるナミハグモのなかでは全国的に分布する種類。ナミハグモは森林の地表性クモの代表的な種類である。【網性】崖地や岩場のくぼみに管状住居を作り，その上に土をつけて擬装する。両方の入口から 1 ～ 3 本の受信糸を引く［新海］。【生活】ナミハグモは空中分散しない為，種分化が著しい。。求愛及び交尾行動は種特異的［甲野・井原］。<♀ Photo：谷川>

索引［index］ 偶数頁はおおむね基本種

【あ行】
アオオニグモ……46
アオオビハエトリ……87
アオグロハシリグモ……75
アカイソウロウグモ……111
アカイロトリノフンダマシ……101
アケボノユウレイグモ……21
アサヒエビグモ……124
アシダカグモ……8
アシナガカニグモ……127
アシナガグモ……56
アシナガサラグモ……63
アシブトヒメグモ……67
アズチグモ……126
アズマキシダグモ……74,75
アズマヤチグモ……139
アダンソンハエトリ……14
アマギエビスグモ……31
アリグモ……84
アワセグモ……9
イエオニグモ……19
イエユウレイグモ……21
イオウイロハシリグモ……116
イタチグモ……34
イトグモ……11
イナズマウラシマグモ……123
イナダハリゲコモリグモ……71
ウズグモ……59
ウススジハエトリ……87
ウヅキコモリグモ……70
ウラシマグモ……123
ウロコアシナガグモ……54
エゾアシナガグモ……55
エゾウズグモ……59
エビチャヨリメケムリグモ……39
オウギグモ……105
オオクマギンメッキゴミグモ…48
オオクマヤミイロオニグモ……97
オオシロカネグモ……99
オオツリガネヒメグモ……17
オオトリノフンダマシ……100
オオヒメグモ……16
オオヤミイロカニグモ……78
オスクロハエトリ……86
オダカグモ……109
オトヒメグモ……35
オナガグモ……104
オニグモ……18
オビジガバチグモ……33

【か行】
カギヅメカラスゴミグモ……49
カグヤヒメグモ……17
ガザミグモ……127
カタハリウズグモ……58
カチドキナミハグモ……139
カトウツケオグモ……137
カニミジングモ……28
カネコトタテグモ……25
カバキコマチグモ……120
カムラタンボグモ……35
カラカラグモ……41
カラスゴミグモ……49
カラフトオニグモ……44
カレハヒメグモ……53
キエビグモ……125
キクヅキコモリグモ……71
キザハシオニグモ……45
キシノウエトタテグモ……24
キジロゴミグモ……51
キタヤハズハエトリ……86
キノボリトタテグモ……25
キハダエビグモ……125
キハダカニグモ……79
キバラコモリグモ……119
キヒメグモ……107
ギボシヒメグモ……69
キムラグモ……25
キヨヒメグモ……107
キララシロカネグモ……55
キレオビウラシマグモ……123
キンイロエビグモ……125
ギンナガゴミグモ……49
ギンメッキゴミグモ……48
キンヨウグモ……55
クサグモ……114
クスミサラグモ……64
クマダギンナガゴミグモ……49
クマダハナグモ……31
クリチャササグモ……73

クロガケジグモ……13
クロチャケムリグモ……39
クロトリノフンダマシ……101
クロマルイソウロウグモ……61
ゲホウグモ……129
コアカクロミジングモ……29
コアシダカグモ……9
コウシサラグモ……63
コウライササグモ……73
コガタコガネグモ……91
コカニグモ……79
コガネグモ……90
コガネグモダマシ……77
コガネヒメグモ……69
コクサグモ……115
コゲチャオニグモ……93
コシロカネグモ……98, 99
コハナグモ……31
ゴミグモ……50
コムラウラシマグモ……35
コンピラヒメグモ……107

【さ行】

サガオニグモ……44
サカグチトリノフンダマシ……103
ササグモ……72
サツマノミダマシ……95
サトヒメグモ……61
ジグモ……22
シコクアシナガグモ……57
シッチコモリグモ……119
シナノヤハズハエトリ……86
シボグモ……118
シマササグモ……73
シモフリミジングモ……29
シモフリヤチグモ……139
シモングモ……21
シャコグモ……76
ジョロウグモ……134
シラヒゲハエトリ……15
シロオビトリノフンダマシ……101
シロカネイソウロウグモ……110
シロスジショウジョウグモ……53
ズグロオニグモ……52
スジアカハシリグモ……117
スジシャコグモ……76
スジブトハシリグモ……117
スズミグモ……130, 135
スネグロオチバヒメグモ……33
セアカゴケグモ……26
セマルトラフカニグモ……81
センショウグモ……60
ゾウシキカニグモ……78
ソメワケトリノフンダマシ…101

【た行】

タイリクアリグモ……85
タカユヒメグモ……67
タテスジヤリグモ……108
タニマノドヨウグモ……45
チビアカサラグモ……88
チャイロアサヒハエトリ……87
チャスジハエトリ……15
チュウガタコガネグモ……91
チュウガタシロカネグモ……98, 99
チリイソウロウグモ……109
チリグモ……11
ツクネグモ……107
ツシマトリノフンダマシ……103
ツノナガイソウロウグモ……111
ツリガネヒメグモ……17
ツリサラグモ……65
デーニッツハエトリ……83
トウキョウウズグモ……59
トガリクサチヒメグモ……113
トガリハナオニグモ……95
トゲグモ……128
トビジロイソウロウグモ……109
ドヨウオニグモ……96
トラフカニグモ……81
トリノフンダマシ……100

【な行】

ナガコガネグモ……132
ナカムラオニグモ……97
ナルコグモ……41
ナンブコツブグモ……88
ニシキオニグモ……93
ニホンヒメグモ……106
ヌサオニグモ……97
ネコグモ……32
ネコハエトリ……82
ネコハグモ……12

【は行】
ハイイロゴケグモ……27
ハイイロヒメグモ……88
ハタケグモ……33
ハツリグモ……47
ハナグモ……30
ハヤテグモ……74
バラギヒメグモ……66
ハラクロコモリグモ……119
ハラナガヒシガタグモ……113
ハラビロアシナガグモ……57
ハラビロミドリオニグモ……95
ハリゲコモリグモ……71
ハンゲツオスナキグモ……27
ハンモックサラグモ……65
ヒゲナガツヤグモ……122
ヒゲナガヤリグモ……108
ヒシガタグモ……113
ビジョオニグモ……47
ヒトエグモ……9
ヒナハグモ……13
ヒメクサグモ……114
ヒメグモ……106
ヒメハナグモ……127
ヒメフクログモ……37
ヒラタグモ……10
ヒロハヒメグモ……66, 67
フタオイソウロウグモ……111
フタホシテオノグモ……39
フノジグモ……81
ヘリジロサラグモ……63
ボカシミジングモ……29
ホシスジオニグモ……130
ホシヒメグモモドキ……130
ホシミドリヒメグモ……68

【ま行】
マネキグモ……105
マミクロハエトリ……83
マミジロハエトリ……83
マメイタイセキグモ……129, 136
マルゴミグモ……130
ミスジハエトリ……15
ミヤグモ……88
ムシバミコガネグモ……91
ムツトゲイセキグモ……129, 136
ムツボシオニグモ……95
ムナアカフクログモ……36, 37
ムナボシヒメグモ……61
ムネグロサラグモ……64
ムラクモヒシガタグモ……112
メガネドヨウグモ……45
メガネヤチグモ……138
メキリグモ……38

【や行】
ヤエンオニグモ……19
ヤガタアリグモ……85
ヤサアリグモ……85
ヤサガタアシナガグモ……57
ヤサコマチグモ……121
ヤドカリグモ……77
ヤハズハエトリ……86
ヤハズフクログモ……37
ヤバネウラシマグモ……122
ヤホシヒメグモ……68
ヤマウズグモ……59
ヤマオニグモ……19
ヤマジグモ……40
ヤマシロオニグモ……92, 93
ヤマトガケジグモ……13
ヤマトカナエグモ……51
ヤマトコノハグモ……53
ヤマトコマチグモ……121
ヤマトゴミグモ……49
ヤマトフクログモ……36,37
ヤマトヤドカリグモ……77
ヤマヤチグモ……139
ヤミイロオニグモ……97
ヤミイロカニグモ……42, 78
ヤリグモ……108
ユウレイグモ……20
ユカタヤマシログモ……11
ユノハマサラグモ……62
ヨダンハエトリ……42
ヨツデゴミグモ……51
ヨツボシワシグモ……38
ヨリメグモ……88

【わ行】
ワカバグモ……80
ワキグロサツマノミダマシ……94
ワクドツキジグモ……103
ワスレナグモ……23

あとがき

斉藤慎一郎さんは自然観察会で見知らぬ生きものに出会ったときに，それが動物だったら「くんづけ」，植物だったら「さんづけ」で自分なりの名前を付けることを提案していた。例えばハナグモを「人面蜘蛛くん」と呼ぶようなことである。この提案は優れたアイデアだったので私も真似している。名前もつけずに見過ごすのはせっかく眼前に出現してきてくれた生きものに対して失礼なことである。もっとも生きものは私たちの失礼をむしろ喜ぶのかもしれないが。

浜口哲一さんは生きもの地図作りと暦作りを推薦していて自分の住んでいるところの身のまわりの生きものの専門家になろうと提案していた。身のまわりの生きものの季節と場所のことなら誰よりも知っているナチュラリストをトコロジストと呼び，トコロジストになろうと提案していた。この提案は優れたアイデアだったので私も真似している。

クモのトコロジストの先達は中平清さん。「高知県のクモ」で日本のクモの生活の観察と記録に道を拓いた。

本書は先達の拓いた道を基礎にしている。クモの「季節」による変化と「場所」による変化をきちんと記録していくためのデータ・ブックという方針である。

（池田）

本書は、東京蜘蛛談話会創立者であります萱嶋泉先生のご遺族 3 名の方
（萱嶋信さん、萱嶋仰さん、山田光子さん）よりの多額のご寄付をもとに作成されております。

参考報文を書かれた方々

（監修・編集者を除く）

赤羽尚夫，秋元維那･秋元昇，浅間茂，新井浩司，安藤昭久，飯田博之，池田泉，池田千洋，板倉泰弘，石井幸子，石野田辰夫，泉宏子，稲葉茂代，植村利夫，梅田泰佳，大熊千代子，太田定浩，大野悟，大利昌久，小笠原幸恵，緒方清人，小野展嗣，加藤輝代子，加藤むつみ，加村隆英，萱嶋泉，川口美咲，木村知之，日下部光代，久保寺みか，熊田憲一，桑田隆生，輿石紗葉子，後藤岳志，小松敏宏，斉藤慎一郎，笹岡文雄，貞元己良，佐藤幸子，渋谷暁子，下謝名松榮，新海明，杉崎るり，鈴木勝浩，鈴木成生，諏訪哲夫，関口晃一，高橋祐子，田中一裕，田中幸一，田中穂積，谷川明男，千国安之輔，鴇田明子，永井均，中島晴子，中田兼介，中西亜耶，中平清，成田和子，錦三郎，西野真由子，花井正実，馬場友希，浜村徹三，張替智行，畑守有紀，林俊夫，林秀幸，平松毅久，弘中豊，福島彬人，藤崎憲治，船曳和代，細野善熙，堀由紀子，前川隆敏，牧孝匡，桝元敏也，松山紘一，宮下和喜，宮下直，安田明雄，山川守，八幡秋山紗和，吉田嗣郎，吉田哉，吉田裕之，吉田真，渡部健

東京蜘蛛談話会

本書の発行母体である東京蜘蛛談話会はクモが好きなひとの集まる同好会である。入会に当たっての資格審査等は無く，誰でも入会できる。

〈入会申し込み先〉
〒186-0002
東京都国立市東 3-10-8 コンフィデンス高垣 105
（有）エコシス　初芝伸吾
E-mail:hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp
http://homepage3.nifty.com/~hispider/tss1.htm

クモの同好会には他にも「三重クモ談話会」「中部蜘蛛懇談会」「関西クモ研究会」があり，クモ研究者の学会には「日本蜘蛛学会」がある。それぞれウェッブ上での案内がある。

クモ基本 60

Spider Life

【改訂版】

発行　東京蜘蛛談話会
発行日　2017 年 5 月